

平安京右京二条三坊八町

— 洛陽総合高等学校校舎建て替えに伴う調査 —

2011 年

古代文化調査会

平安京右京二条三坊八町

— 洛陽総合高等学校校舎建て替えに伴う調査 —

2011年

古代文化調査会

例 言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市中京区西ノ京春日町において、洛陽総合高等学校の校舎建て替えに伴い実施した平安京右京二条三坊八町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、学校法人洛陽総合学院より委託を受けた古代文化調査会の水谷明子、家崎孝治が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は水谷、家崎がおこなった。
5. 本書の執筆分担は次の通りである。
I・II 水谷 III 家崎 IV 水谷 家崎
6. 図面及び遺物整理は、上垣雅子、須貝淑恵、山田学が分担し、遺物の実測は板谷桃代、上村憲章、水谷がおこなった。製図は水谷が担当した。
7. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。
8. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2500分の1の地図（円町）、国土地理院発行の25000分の1の地図（京都北部）を調整し、使用した。
9. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
10. 遺物番号は実測図・写真ともに共通している。
11. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

安藤哲郎 家原圭太 井本幸宏 上村和直 宇野隆志 馬瀬智光 梶川敏夫
北田栄造 工藤和美 白坂龍之介 鈴木久史 高橋克壽 塚本明日香 土屋順敬
西山良平 西森正晃 長谷川行孝 堀 大輔 丸川義広 宮原健吾 山本雅和
吉川義彦

(学) 洛陽総合学院 (株) 明輝建設 (株) 大高建設 (有) 京都編集工房
(財) 京都市埋蔵文化財研究所 シーラカンス K&H (株) 大成建設 (株)

本文目次

平安京右京二条三坊八町

I 調査の経過	1
II 遺 構	4
III 遺 物	10
IV ま と め	27

図版目次

図版 1	遺跡 遺構配置図
図版 2	遺跡 溝 286・398 土器出土状況図
図版 3	遺跡 溝 399 土器出土状況図
図版 4	遺跡 溝 531・532 土器出土状況図
図版 5	遺跡 溝 398・286 断面実測図・溝 399 断面実測図・南壁断面実測図（1）・南壁断面 実測図（2）・西壁断面実測図・東南部北壁断面実測図
図版 6	遺跡 建物 1・2 実測図
図版 7	遺跡 柵 1・2・3 実測図
図版 8	遺跡 建物 3・4・5 実測図
図版 9	遺跡 建物 6・7・8 実測図
図版 10	遺跡 建物 9・柵 4・5・6・7 実測図
図版 11	遺跡 1 第2面全景（南から） 2 第2面南辺部（南から）
図版 12	遺跡 1 第2面南西部（南東から） 2 第2面南東部（南西から）
図版 13	遺跡 1 第2面全景（東から） 2 第2面南半部（北東から）
図版 14	遺跡 1 第2面北東部（南東から） 2 第2面南東部（北東から）

- 図版 15 遺跡 1 溝 286 土器出土状況 (南東から)
 2 溝 286 土器出土状況 (南から)
- 図版 16 遺跡 1 溝 399 土器出土状況 (南から)
 2 溝 399 土器出土状況 (南西から)
- 図版 17 遺跡 1 調査前全景 (北西から)
 2 調査地遠景 (北東から)
 3 拡張区全景 (東から)
 4 土壙 585 (北東から)
 5 土壙 382 (南から)
 6 柱穴 433 (西から)
 7 柱穴 576 (西から)
 8 柱穴 308 (東から)
- 図版 18 遺物 土壙 585・土壙 382・溝 286 出土遺物
- 図版 19 遺物 溝 286・溝 398 出土遺物
- 図版 20 遺物 溝 399 出土遺物
- 図版 21 遺物 溝 286・溝 399・溝 532・溝 56・溝 57・柱穴 495 出土遺物
- 図版 22 遺物 溝 531・溝 312・溝 399・溝 531 上面・柵 3・溝 78 出土遺物
- 図版 23 遺物 溝 286・溝 531・溝 532・溝 399・柱穴 383・南部中央精査中出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査地点位置図	1
図 2	調査地位置図	2
図 3	平安京条坊と調査地位置図	2
図 4	四行八門と調査位置関係図	2
図 5	第 2 面遺構実測図	5
図 6	土壙 382 実測図	7
図 7	柱穴 433 実測図	7
図 8	第 1 面遺構実測図	9
図 9	建物 1・2 出土遺物実測図	10
図 10	土壙 585 出土遺物実測図	11

図 11	土壙 382 出土遺物実測図	11
図 12	溝 286 出土遺物実測図 (1)	13
図 13	溝 286 出土遺物実測図 (2)	14
図 14	溝 398 出土遺物実測図	15
図 15	溝 399 出土遺物実測図 (1)	17
図 16	溝 399 出土遺物実測図 (2)	18
図 17	溝 399 出土遺物実測図 (3)	19
図 18	溝 531・532・312 出土遺物実測図	21
図 19	黄釉褐彩陶器実測図	22
図 20	建物 3・6・7・柵 3・5 出土遺物実測図	23
図 21	溝 8・31・56・57・78・柱穴 495・433 出土遺物実測図	23
図 22	軒瓦・埴拓影実測図	25
図 23	石製品出土遺物実測図	26
図 24	錢貨拓影図	26
図 25	八町の変遷	27

平安京右京二条三坊八町

I 調査の経過

調査に至る経緯

調査地は、京都市中京区西ノ京春日町にある洛陽総合高等学校の敷地内である。当該地は周知の遺跡・平安京跡の右京二条三坊八町にあたる。この八町においては1981年度^{註1}と2007年度^{註2}の2度の発掘調査がおこなわれており、今回の調査対象地は1981年度の調査の北隣接地に当たるところである。2010年、洛陽総合高等学校では校舎建て替えの計画がなされ、工事に先立ち2011年5月、京都市文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、調査対象地全域にわたり良好な状態で平安時代の遺構が残存していることが判明し、発掘調査の指導をおこなった。京都市の指導の下、学校法人洛陽総合学院と設計会社シーラカンス K&H との協議の結果、当調査会が発掘調査を2011年6月よりおこなうこととなった。

調査経過

調査地の平安京右京二条三坊八町は、西側が馬代小路、東側が宇多小路、北側が中御門大路、南側が春日小路に囲まれたところで、調査対象地は八町の中央南半部にあたる東二・三行の北五～七門に相当する。1981年におこなわれた南隣接地の発掘調査では、平安時代前期から中期の

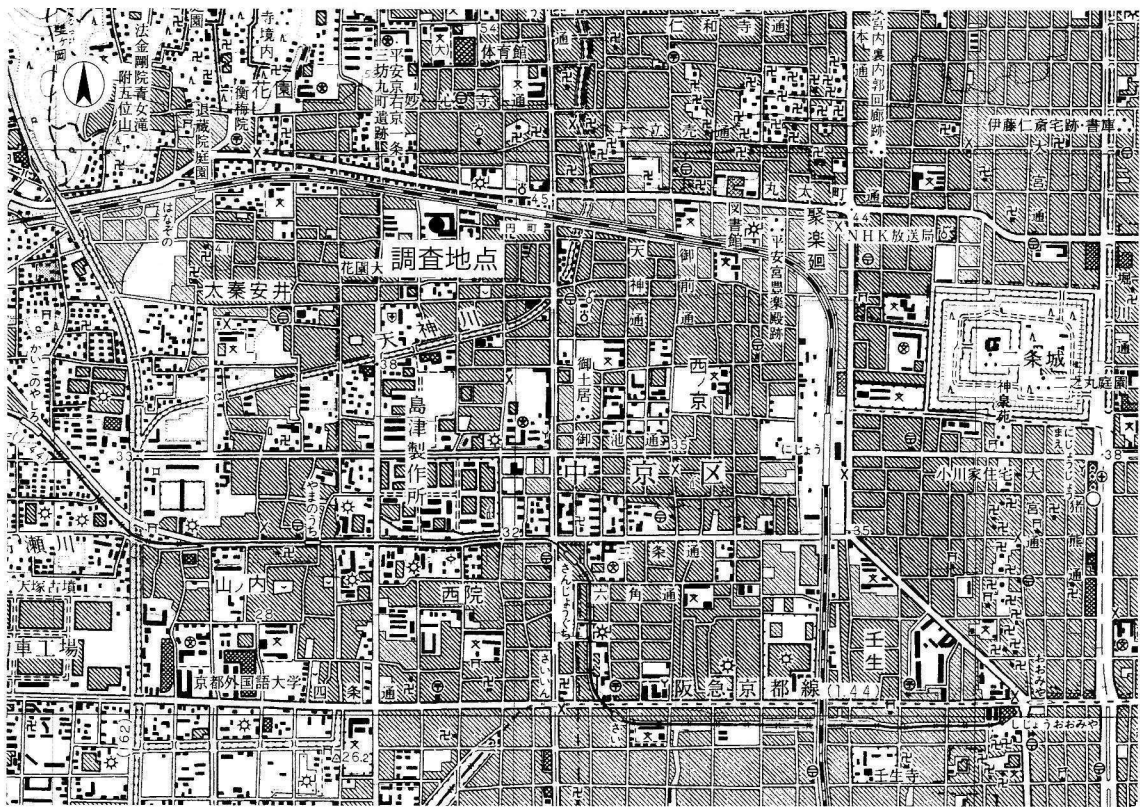


図1 調査地点位置図 (1/25,000)

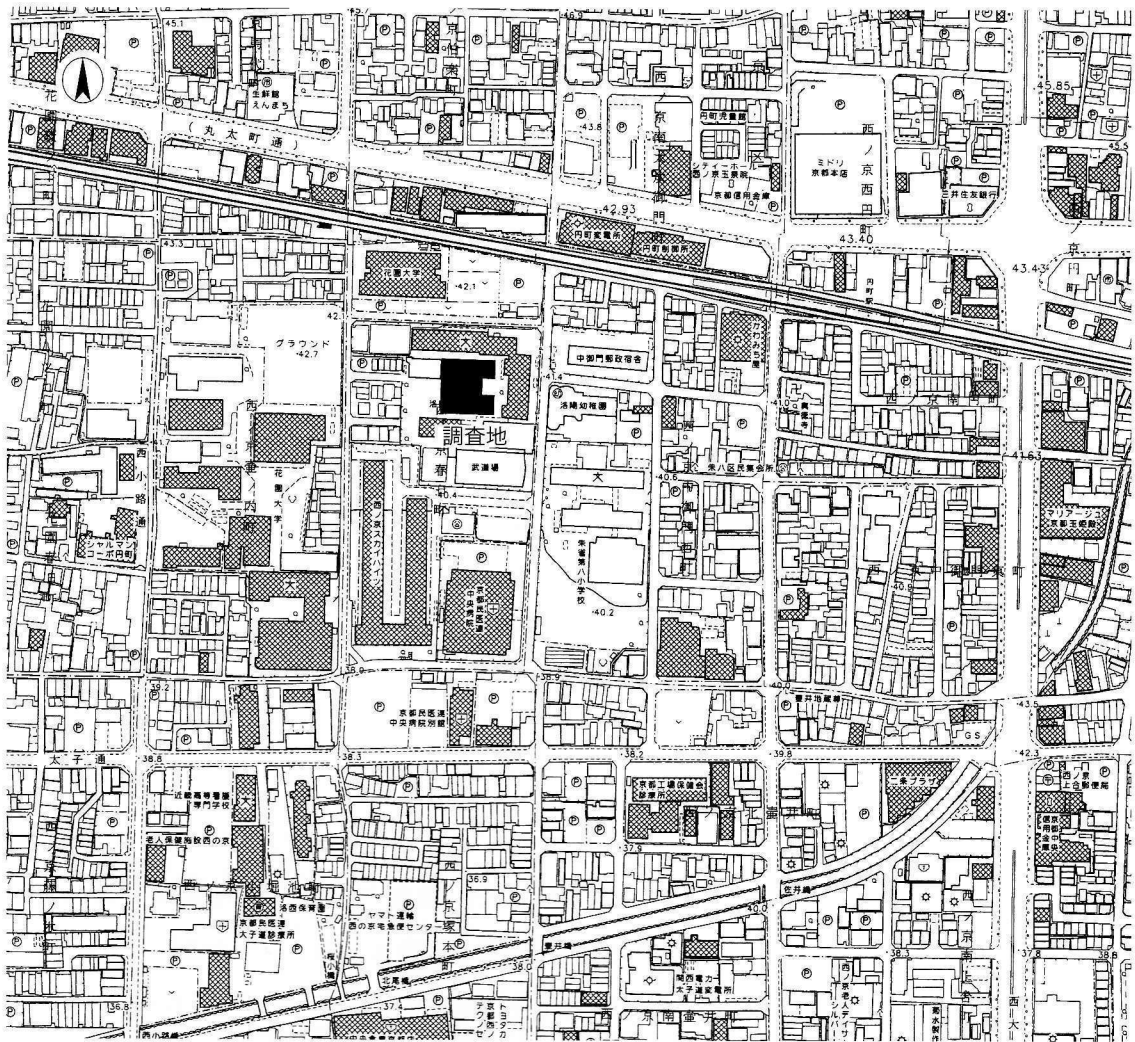


図2 調査地位置図 (1/5,000)

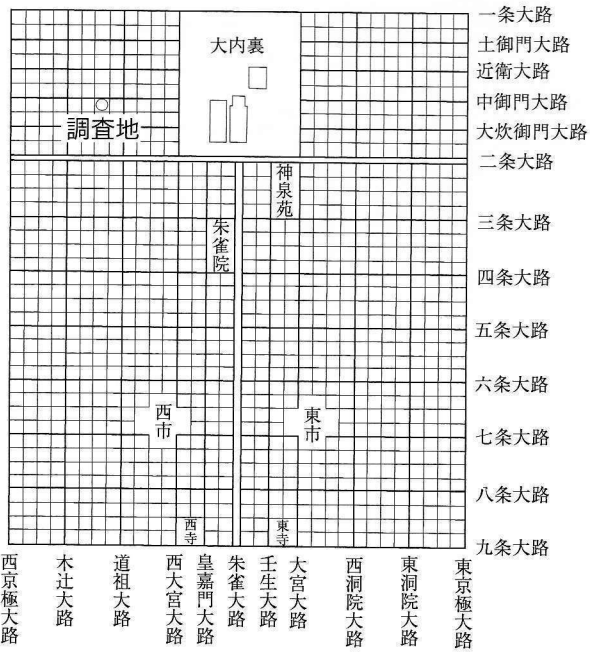


図3 平安京条坊と調査地位置図

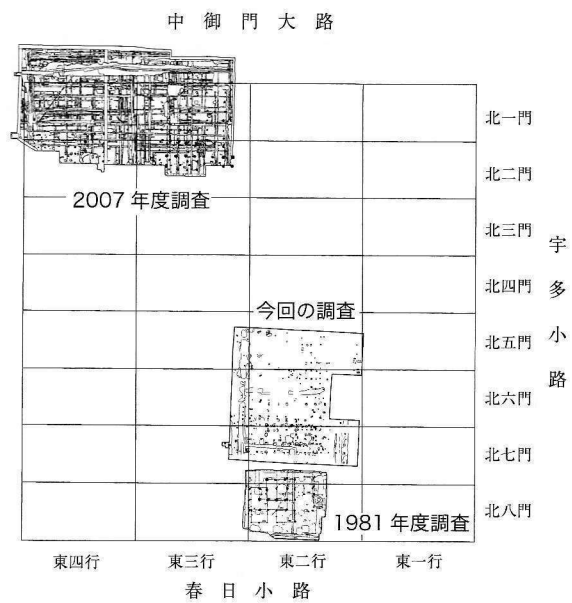


図4 四行八門と調査位置関係図 (1/2,000)

建物跡、井戸跡、溝跡などが検出されている。今回の調査においてはその調査結果を踏まえ、平安時代の建物遺構の広がりを中心に調査をおこなうこととした。

文献資料では、この三坊八町の地には何ら邸宅跡の記録は残されていないが、平安時代前期には隣接する右京二条二坊に多くの諸司厨町が置かれたことが文献資料や絵画資料などによって知ることができる。

調査地は、現状が学校のグラウンドになっているところで、近年、水捌けを良くするため地盤の改良がなされ、その時に旧耕作土及び地山の一部が削平されていることが試掘調査によって判明した。層位としては調査区全域にわたってグラウンドの造成土が厚さ 20cm 程あり、それ以下はベースとなる。調査区の南端部で耕作土の一部が残存していたものの、ところによっては始良火山灰層 (AT) が現出しているところもあった。

実際の調査は 2011 年 6 月 2 日から開始した。グラウンドの造成土を機械力によって除去したのち調査に着手した。地盤改良時のユンボの爪痕が広範囲に及んでおり、攪乱除去とともに第 1 面の中世以降の小溝跡の完掘作業を 7 月 4 日までおこなった。7 月 5 日より調査区の北東部より第 2 面の平安時代の遺構の調査に着手し、漸次南半部に向けて実施した。調査は 8 月 12 日までの 59 日間おこなった。調査の結果、平安時代前期から中期の掘立柱建物跡を 10 棟以上、南北の小径とそれに伴う溝跡などを検出した。

なお、在校生を対象に 7 月 15 日に現場学習をおこなった。また 8 月 3 日に新聞発表をおこない、8 月 6 日に現地説明会を実施した。

調査の方法としては、(財)京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系 VI による平安京の復原モデル 60 を使用し、調査区の北東角を原点 ($X = -108,928\text{m}$ 、 $Y = -24,820\text{m}$) とする、東西方向にアラビア数字を南北方向にアルファベットを記号として付し、4 m メッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。八町における築地四隅の座標値 (新測地系) は次のとおりである。

北西	$X = -108,865.09\text{m}$	北東	$X = -108,864.60\text{m}$
	$Y = -24,909.55\text{m}$		$Y = -24,790.16\text{m}$
南西	$X = -108,984.47\text{m}$	南東	$X = -108,983.99\text{m}$
	$Y = -24,909.06\text{m}$		$Y = -24,789.67\text{m}$

II 遺 構

調査区遺構面は北から南にかけて緩やかな傾斜をもつ。調査区北端部の遺構検出面は標高41.3m、調査区南端部の遺構検出面の標高は41.1mを測り、およそ0.2mの比高差がある。基本層序としては調査地全体に厚さ0.1～0.25mの校庭整地土があり、その直下に室町時代の耕作土、それに伴う湿気抜きの溝を多数検出した。この室町時代の遺構とほぼ同じ遺構面において平安時代の遺構を検出した。調査区北半は攪乱と校庭造成時の削平により、検出遺構数が少なかった。

検出した遺構は平安時代から室町時代のものがあり、その総数は593基であった。それらの内、大半のものが平安時代に属する。遺構としては、掘立柱、土壇、小径、溝跡などがある。

平安時代前期の遺構

建物1 (図5・図版1・6・11～13・14の2・17の7)

調査区南部に位置する。東西5間、南北2間の東西棟である。桁行10.6m、梁間4.8mの規模をもつ。桁行の柱間は7尺(2.1m)、梁間の柱間8尺(2.4m)を測る。掘形は一辺0.5～0.7mの方形もしくは円形を呈し、深さ0.2～0.4m、柱根跡は径0.2mを測る。建物の軸線は座標北に対して東へわずかな振れをもつ。

建物2 (図5・図版1・6・11～13・14の2)

調査区南部に位置し、建物1と重複関係にある。東西5間、南北2間の間仕切りをもつ東西棟である。桁行11.5m、梁間4.8mの規模をもつ。桁行の柱間は7尺半(2.2～2.3m)、梁間の柱間は8尺(2.4m)を測る。掘形は一辺0.5～0.8mの方形を呈し、深さ0.2～0.35m、柱根跡は径0.2mを測る。いずれの掘形にも凝灰岩片が多量に混じる特徴をもつ。建物の軸線は座標北に対してはほぼ等しい。建物1の建て替えと考えられる。

建物3 (図5・図版1・8・12・13の1・14の2)

調査区南東隅部に位置する。南北2間分検出したが、建物の東部及び南部が調査区外のため、全形は不明である。柱間は2.2～2.3mを測る。掘形は一辺0.4～0.6mの方形を呈し、深さ0.2～0.3m、柱根跡は径0.2～0.25mを測る。軸線は座標北に対してほぼ一致する。

柵1 (図5・図版1・7・11の2・12・13)

調査区南部、建物2の南側に位置する。東西方向の柵列である。長さ14.6mにわたって検出した。柱間は2.2～2.3mを測る。一辺0.5m程の方形の掘形をもち、深さ0.2m、柱根跡は径0.2mを測る。西端は延びる可能性がある。

平安時代中期の遺構

建物4 (図5・図版1・8・11～13)

調査区中央部やや南寄りに位置する。建物1・2・6と重複する。東西3間、南北1間の東西棟である。柱間は8尺(2.4m)等間である。径0.5～0.6mの掘形をもち、深さ0.1～0.2m、柱

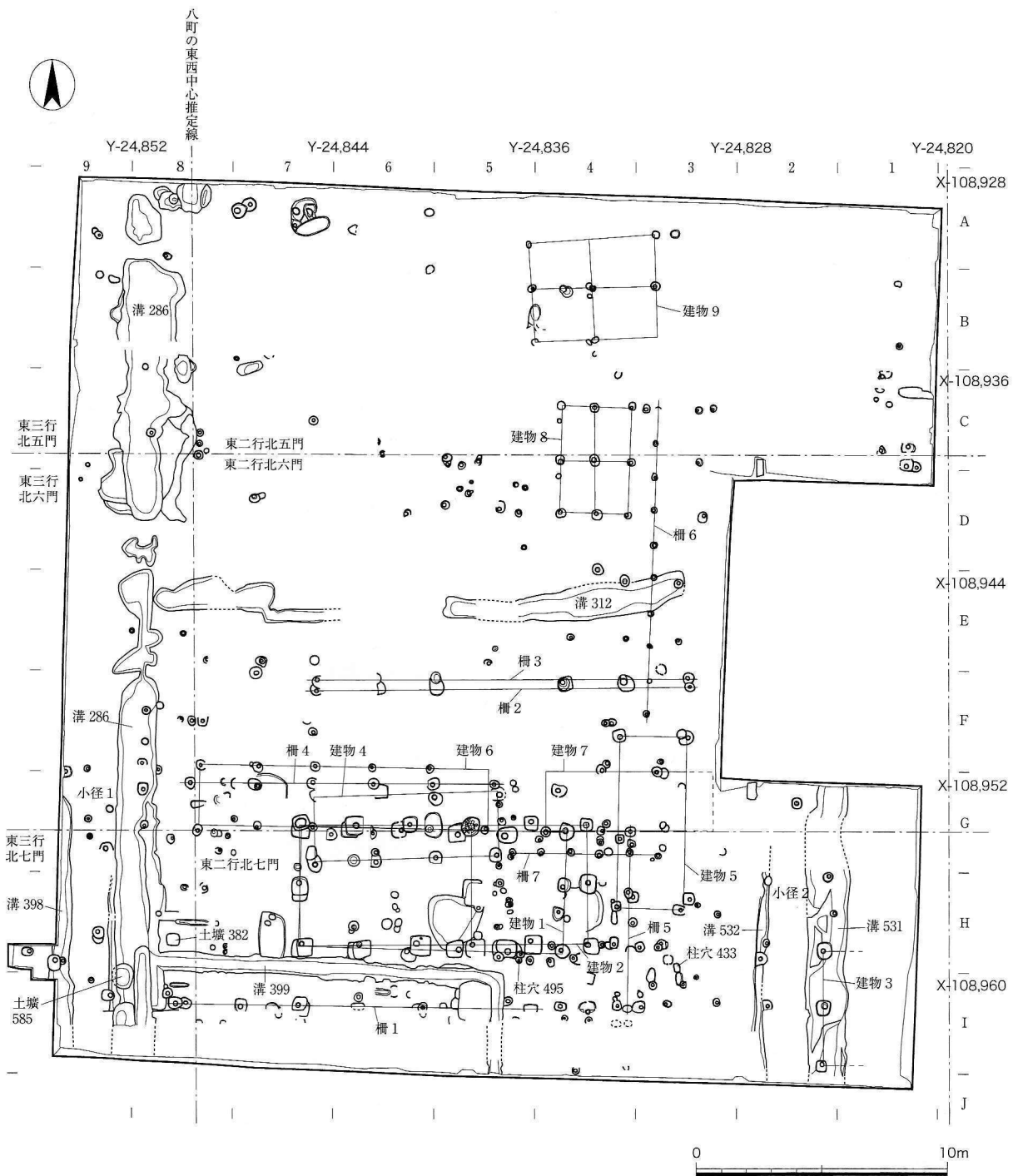


図5 第2面遺構実測図 (1/250)

根跡は径 0.15 ～ 0.2m を測る。建物の軸線は座標北に対してほぼ一致する。

建物 5 (図 5・図版 1・8・11・12 の 2・13)

調査区南東部に位置する。建物 7、柵 5 と重複する。南北 3 間、東西 1 間の南北棟である。桁行の柱間は 2.7 ～ 4.0m、梁間の柱間は 9 尺 (2.7m) を測る。掘形は一辺 0.4 ～ 0.5m の方形を呈し、深さ 0.1 ～ 0.2m、柱根跡は径 0.15 ～ 0.2m を測る。建物の軸線は座標北に対して東へわずかな振れをもつ。

柵 2 (図 5・図版 1・7・11 ～ 13)

調査区中央部、建物 4・5 の北側に位置する東西方向の柵列である。長さ 15.2m にわたって検出した。柱間は 2.4 ～ 2.5m を測る。柱穴は方形ないし円形を呈し、径 0.4 ～ 0.7m、深さ 0.15 ～ 0.2m の掘形をもち、柱根跡は径 0.15 ～ 0.2m を測る。

建物 6 (図 5・図版 1・9・11 ～ 13)

調査区中央部やや南寄りに位置する。建物 1・2・4 と重複する。東西 5 間、南北 1 間の東西棟である。桁行の柱間は 7 尺半 (2.2 ～ 2.3m)、梁間は 8 尺 (2.4m) を測る。径 0.3 ～ 0.4m の掘形をもち、深さ 0.1 ～ 0.25m、柱根跡は径 0.15 ～ 0.2m を測る。建物の軸線は座標北に対してほぼ一致する。

建物 7 (図 5・図版 1・9・11・12 の 2・13)

建物 6 の東側に並ぶ位置にある。建物 5 と重複する。東西 2 間以上南北 1 間の東西棟である。桁行の柱間は 2.2m、梁間は 2.3m を測る。掘形は径 0.3 ～ 0.4m の円形を呈し、柱根跡は径 0.1 ～ 0.2m を測る。建物の軸線は座標北に対してほぼ一致する。

柵 3 (図 5・図版 1・7・11 ～ 13・17 の 8)

調査区中央部、建物 6・7 の北側に位置する柵 2 とほぼ重複する東西方向の柵列である。柵 2 と同規模で、柵 2 の建て替えと考えられる。検出した柱穴 6 基の内 3 基は柱の抜き取り痕が顕著である。西端の柱穴 308 の柱当りからは緑釉陶器の底部片が出土した。出土状況から判断して、柱を抜いた後に地鎮のために据えたものと考えられる。

建物 8 (図 5・図版 1・9・11 の 1・13 の 1・14 の 1)

調査区中央部やや東に位置する。2 間 × 2 間の総柱建物である。東西の柱間は 1.3 ～ 1.4m、南北の柱間は 7 尺 (2.1m) を測る。掘形は径 0.3 ～ 0.5m の円形を呈し、深さ 0.1 ～ 0.2m、柱根跡は径 0.15 ～ 0.2m を測る。建物の軸線は座標北に対して東へわずかな振れをもつ。

柵 4 (図 5・図版 1・10 ～ 13)

調査区中央部やや南に位置する。建物 6 と重複する東西方向の柵列である。長さ 12.5m にわたって検出した。柱間は 2.2 ～ 2.7m を測る。径 0.3 ～ 0.6m の掘形をもち、深さ 0.15 ～ 0.2m を測る。柱根跡は径 0.15 ～ 0.2m を測る。

柵 5 (図 5・図版 1・10・11・12 の 2・13・14 の 2)

調査区南部、建物 1 の東側に位置する。南北方向の柵列で、建物 5 と重複する。長さ 7.3m にわたって検出した。柱間は 2.3m を測る。径 0.4m の円形の掘形をもち、深さ 0.1 ～ 0.2m、柱根

跡は径 0.15m を測る。軸線は座標北に対してほぼ一致する。

建物 9 (図 5・図版 1・10・11 の 1・13 の 1・14 の 1)

調査区北部に位置する。2間×2間の総柱建物である。東西の柱間は 2.4～2.5m、南北の柱間は 1.8～2.1m を測る。掘形は径 0.2～0.4m、深さ 0.05～0.3m、柱根跡は径 0.1m を測る。建物の軸線は座標北に対して西へわずかな振れをもつ。

柵 6 (図 5・図版 1・10・11・12 の 2・13・14 の 1)

建物 8 の東に位置する南北方向の柵列である。長さ 12.5m にわたって検出した。柱間は 1.3～1.4m を測る。径 0.2～0.3m の掘形をもち、深さ 0.1～0.15m を測る。建物 8 に並行する。

柵 7 (図 5・図版 1・10・11・12 の 2・13)

調査区南東部に位置する。東西方向の柵列で長さ 6.0m にわたって検出した。柱間は 1.15m 前後を測る。径 0.2～0.3m の掘形をもち、深さ 0.1～0.2m、柱根痕は径 0.1～0.15m を測る。

土壌 585 (図 5・図版 1・12 の 1・17 の 4)

調査区南西部、溝 286 の底面において検出した。長辺 1.0m、短辺 0.8m の楕円形を呈し、深さ 0.4m を測る。埋土は黒色砂泥層で、完形品を含む土師器が多く出土した。溝 286 はこの土壌を切って成立する。

土壌 382 (図 5・6・図版 1・11・13・17 の 5)

調査区南西部に位置する。小径 1 の東側溝 286 と溝 399 が合流するすぐ北東に位置する。掘形は一辺 0.5m 程の方形で、深さ 0.15m を測る。埋土は黒褐色砂泥層で、邢州窯白磁碗や白土器が出土した。地鎮遺構とみられる。

小径 1 (図 5・図版 1・2・11～13)

調査区西部に位置する。両側溝をもつ南北方向の小径である。側溝を含む全長幅は 4.5m、路幅は 1.6m 前後を測る。小径の中心軸は、八町の東西中心推定線より西へ 4m ずれる。八町における東二行と東三行を区画する小径と考えられる。

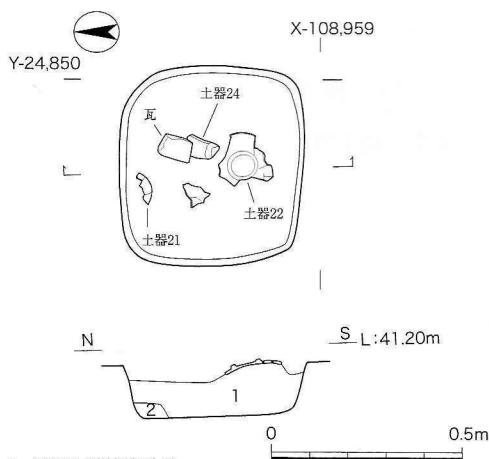


図6 土壌382実測図(1/20)

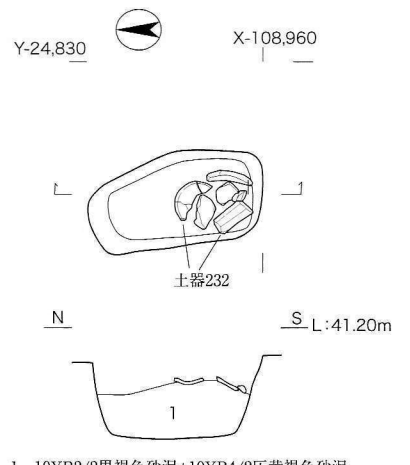


図7 柱穴433実測図(1/20)

溝 286 (図5・図版1・2・5・11・12の1・13・15)

調査区の北端から南端まで南北に貫く小径1の東側溝である。北半部は後世の削平を受けて溝底部のみ残存する。幅1.0～2.5m、深さ0.05～0.3mを測る。埋土は黒褐色砂泥層ないし泥土層で、多量の土器類が出土した。溝399の取り付け部は、長さ3m以上、幅0.6～0.7m、深さ0.15mの規模で一段掘り下げる。調査区北端部の溝底の標高は41.27m、南端部で標高40.85mで比高差0.42mを測る。

溝 398 (図5・図版1・2・5・11・12の1・13・15の1)

調査区西壁沿いで検出した小径1の西側溝である。一部溝幅の確認のため拡張区を設定して調査をおこなった。幅0.7～1.0m、深さ0.05～0.15mを測る。

溝 399 (図5・図版1・3・5・11～13・16)

調査区南部で検出した東西方向の溝である。幅0.5～0.9m、深さ0.3mを測る。堆積土は2層に分層でき、上から第1層が黒褐色砂泥層、第2層が黒褐色泥土層である。溝の西端は溝286に繋がり、東端は南方向へ直角に曲がりそのまま調査区外に延びて行く。この溝は本調査地の南隣接地の調査で^{註3}検出した溝SD1と同一の溝であることが判明した。溝内からは多量の土器類が出土したが、土器類の出土状況より判断して、溝の廃絶時に捨棄されたものと考えられる。

小径 2 (図5・図版1・4・5・12の2・13・14の2)

調査区南東部に位置する。両側溝をもつ南北方向の小径である。路幅は1.6m前後を測る。小径の中心線は東一行と東二行の南北境界推定線より西へ6.5m程離れる。

溝 531 (図5・図版1・4・5・12の2・13の1・14の2)

小径2の東側溝である。北半部は近代の攪乱により破壊されており、調査区の南部でのみ検出した。幅1.2～1.7m、深さ0.3mを測る。南端部の溝底の標高は40.7mを測る。埋土は黒褐色砂泥層で、完形品を含む土器類が出土した。

溝 532 (図5・図版1・4・12の2・13の1・14の2)

小径2の西側溝である。大半が攪乱されており、東肩部のみ検出した。

溝 312 (図5・図版1・11・12の2・13・14)

調査区中央部で検出した東西方向の溝である。幅0.7～1.2m、深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色砂泥層で、北六門の中央部付近に位置し、小径1の東側溝286に繋がる。

柱穴 433 (図5・図版1・12の2・13・14の2・17の6)

調査区南東部、建物5の南に位置する。長さ0.5m、幅0.25m、深さ0.2mを測る。掘形内より高杯が出土した。埋納遺構の可能性はある。

鎌倉時代以降の遺構 (図8)

調査区全域より多数の溝跡を検出した。南北方向の溝が多く、幅0.2～0.6m、深さ0.05～0.2mを測る。いずれも16世紀以降近代までの耕作に伴う小溝跡である。

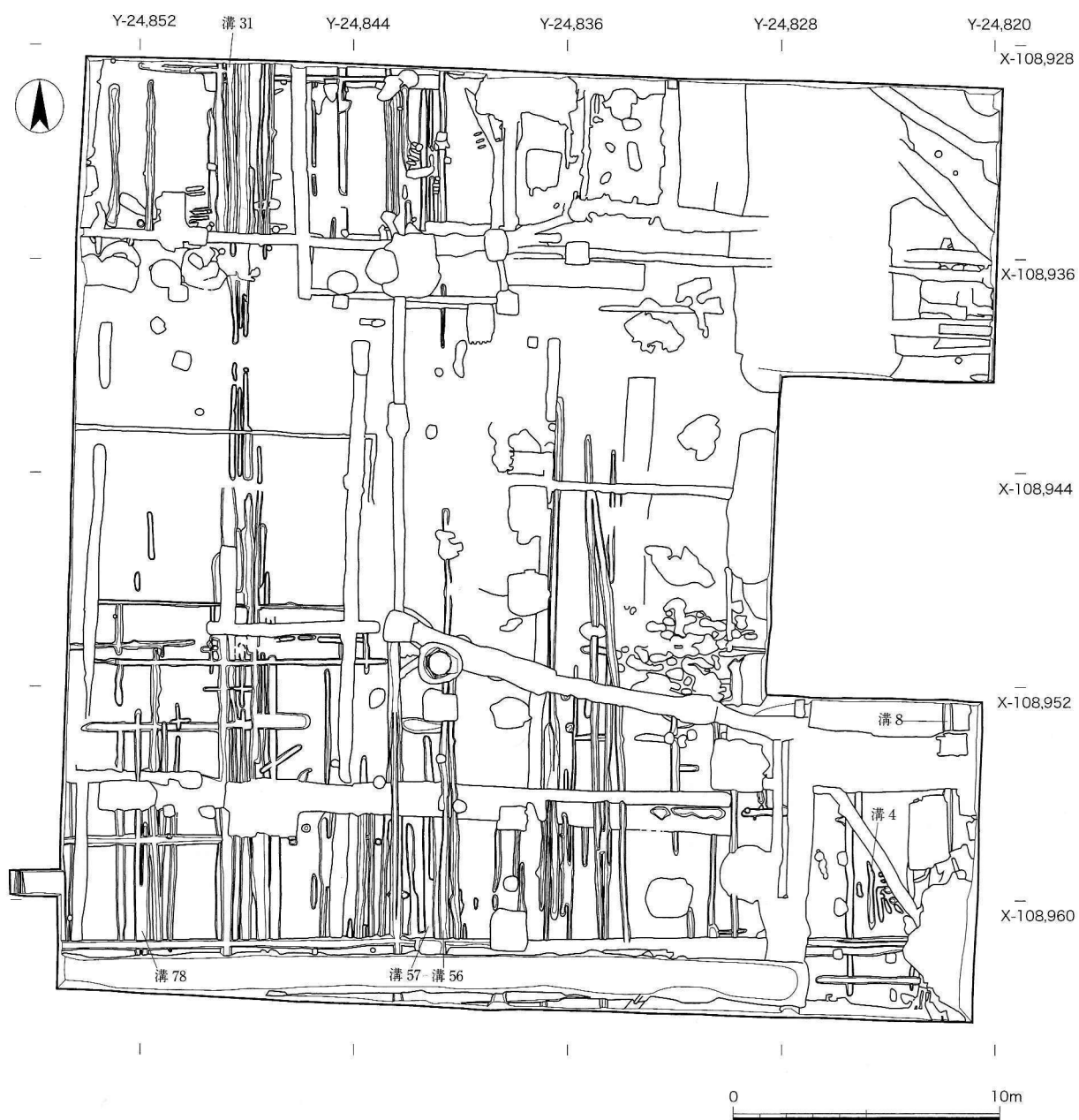


図8 第1面遺構実測図 (1/250)

Ⅲ 遺物

出土した遺物は整理箱に58箱ある。時代は平安時代前期から中期のものが大半で、そのほかに室町時代以降のものが少量ある。平安時代の遺物の大半は小径の側溝及び区画溝跡より出土したもので、掘立柱跡からは少ない。遺物の種類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦類、土製品、石製品、銭貨などがあり、輸入陶磁器の中には長沙窯系黄釉褐彩陶器、越州窯系青磁、邢州窯系白磁などの稀少品が含まれる。以下、主要な遺物について概述する。なお、時代区分は平安京の土器編年^{註4}をもとにおこなう。

土器・陶磁器類

建物1 出土土器 (図9)

柱穴576より土師器(1~3、5)、須恵器(4)などが出土している。土師器皿A(1、2)は口径15cmと19cmのものがある。いずれも口縁端部は内側に肥厚し、外面はヘラ削りをおこなう。高杯3は杯部外面に粗めのヘラ磨きを施す。3個体とも柱当りより出土した。4は須恵器壺の口頸部である。断面セピア色を呈する。5は弥生末から古墳前期の甕の底部片である。底径5cmの平底である。混入品である。この2個体は掘形より出土した。平安京土器編年のI期新の9世紀前半に属する。

建物2 出土土器 (図9)

土師器(6、7)、須恵器(8)などがある。土師器碗A(6)は柱穴361の掘形より出土したもので、口径13.2cmを測る。同じく7は口径13.4cmを測り、いずれも外面はヘラ削りをおこなう。須恵器蓋(8)は折り返しの受けをもつ。

建物3 出土土器 (図20)

土師器皿(217)は口径13.1cmを測る。e手法である。柱穴536柱当り出土。9世紀後半。

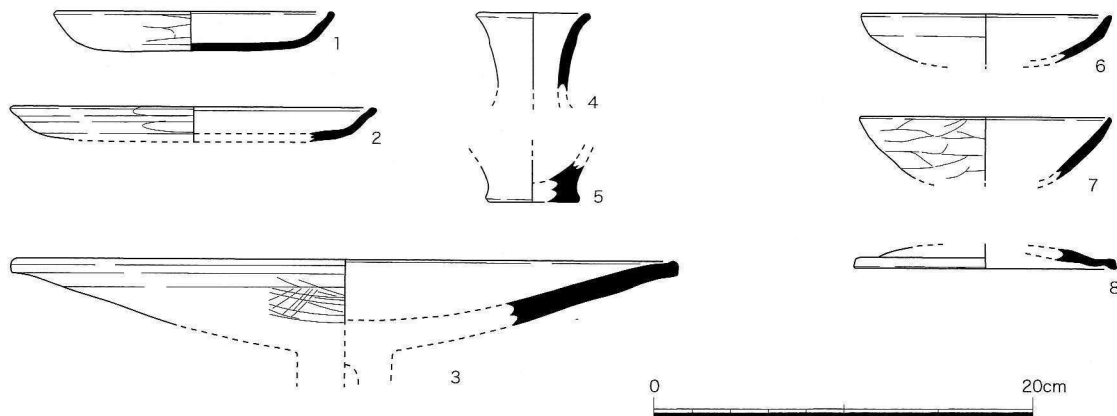


図9 建物1(1~5)・建物2(6~8)出土遺物実測図(1/4)

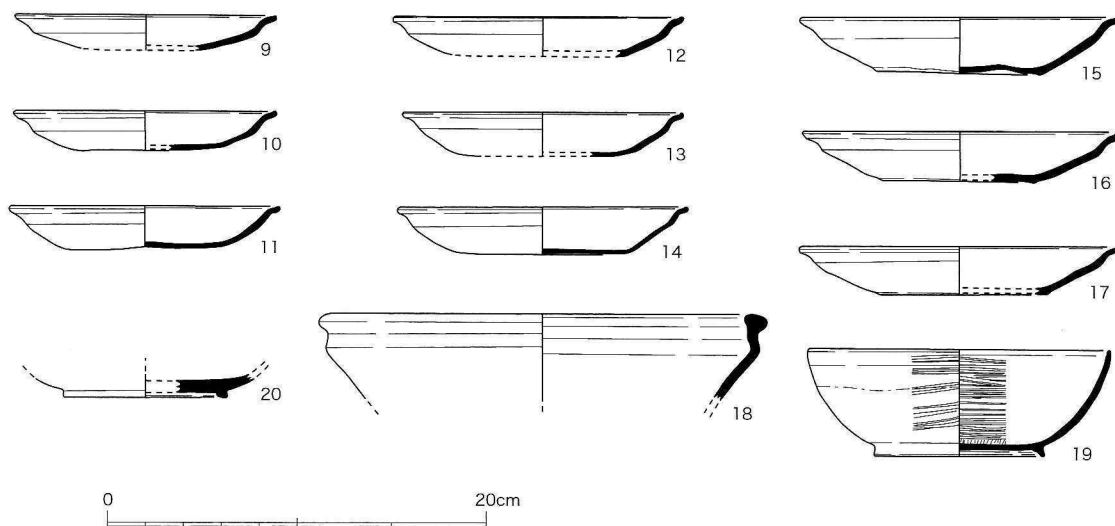


図10 土壙585出土遺物実測図(1/4)

土壙 585 出土土器 (図 10・図版 18)

土師器 (9～17)、黒色土器 (18)、須恵器 (19)、灰釉陶器 (20)、緑釉陶器などがある。土師器には杯 A (9～14)、杯 B (15～17) がある。いずれも器壁が薄く、e 手法である。底部内面にハケ目が残るもの (11、14、15) がある。杯 A は口径 13.6～15.1cm、器高 2.1～2.5cm を測る。口縁部は一段のナデにより外反し、口縁端部は小さな肥厚部をもつ。杯 B は口径 16.6～16.8cm、器高 2.5～3.0cm を測る。底部にへたった高台を貼り付ける。19 は黒色土器碗 B で A タイプある。口径 15.8cm、器高 5.6cm を測る。口縁端部内側に一条の沈線を施す。三角形のしっかりした高台を貼り付ける。体部内面は密なヘラ磨きを施し、内面底部は一定方向の磨きを施す。外面の磨きは粗い。18 は播鉢状にひらく須恵器鉢である。口縁部は屈曲し、口縁端部は楕円状の肥厚部をもつ。胎土は緻密で、青みがかかった灰色を呈する。20 は灰釉陶器碗の底部である。方形の高台をもち、内面は全面に施釉する。胎土は灰白色を呈する。Ⅱ期新の 10 世紀初頭頃のものである。

土壙 382 出土土器 (図 11・図版 18)

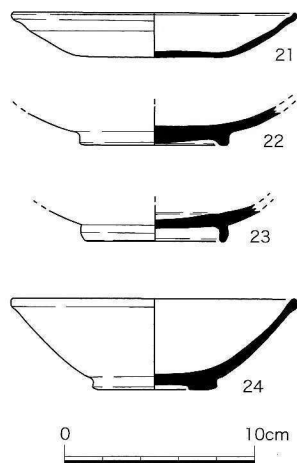


図11 土壙382出土遺物実測図(1/4)

土師器 (21)、白土器 (22)、灰釉陶器 (23)、白磁 (24)、緑釉陶器などがある。土師器杯 A (21) は口径 15.0cm、器高 2.3cm を測る。口縁部のナデは浅い。22 は白色土器の底部、器表は残りが悪く調整は不明である。胎土は黄白色を呈する。灰釉陶器碗 (23) は三日月状の高台をもつ。底部内面は平滑で硯に転用したとみられる。体部内面を施釉する。胎土は淡灰色を呈する。白磁碗 (24) は、やや直線状にひらく体部と口縁部をもち、口縁端部は玉縁である。底部は削り出しの蛇の目高台で、底部外面のみ釉薬を削り取る。色調は象牙色を呈する。邢州窯系白磁である。Ⅱ期新。

溝 286 出土土器 (図 12・13・図版 18・19・21)

土師器 (25～39)、黒色土器 (40～44)、須恵器 (45～53)、緑釉陶器 (54～63)、灰釉陶器 (64～68)、白磁 (69、70)、青磁 (71、72)、白色土器などがある。

土師器には皿 A (25、26)、杯 A (27～32)、甕 (33～36)、羽釜 (37)、高杯 (38、39) がある。皿 A は口径 10～12cm 台を測る。杯 A は口径 12～16cm 台を測る。32 は口径 16.6cm、クサリ礫を多く含む。甕 (33) は口径 12.6cm、白色微砂粒を含む。34 は口縁端部が内側に肥厚する。クサリ礫を含む。35 は体部内面指押さえ痕残る。36 は口径 19.4cm を測る。体部内面ヨコナデを施す。羽釜 (37) は口径 27.7cm を測る。内面ヨコ方向のハケ目、体部外面はタテ方向のハケ目が顕著に残る。白色微砂粒を多く含む。高杯 (38) の脚部は明瞭な面取はなく、円柱を呈する。39 は脚柱部を十一角形に面取する。

黒色土器には椀 B (40～43)、甕 (44) がある。いずれも A タイプである。40 は体部外面に指押さえ痕残る。41 は内面を密に磨き、口縁端部が外反する。42・43 は小さな三角の高台を貼り付ける。甕 (44) は内面のみ炭素を吸着する。口縁部内外面を磨く。口径 15.0cm を測る。

須恵器は壺 (45、46)、杯 A (47)、硯 (48)、鉢 (49～51)、甕 (52、53) がある。45 は壺の口頸部である。口径 7.8cm を測る。胎土はきわめて精良、灰色を呈する。46 は壺の底部、糸切りのままである。外面黒灰色、内面灰白色を呈する。47 は須恵器の杯であるが焼きが甘く土師質を呈する。クサリ礫を多く含む。口径 12.8cm を測る。48 は内面底部が平滑である。八角に面取した短い足がつく。胎土は淡灰白色を呈し、緻密である。3 足の風字硯とみられる。49 は口径 21cm ほどの鉢の口縁部である。口縁下にくびれをもち、端部は円形に近い肥厚部をもつ。胎土は青灰色を呈する。50 は播鉢状にひらく鉢である。口径 25.8cm を測る。口縁端部を平坦に面取りする。内面及び口縁部は暗灰色、外面は灰白色を呈する。51 は鉢の底部である。糸切り痕が残る。甕 (52) の体部外面には格子目叩き、体部内面は青海波文が残る。胎土は暗灰色を呈する。53 は口径 18.8cm を測る。口縁部内外面及び体部外面に自然釉が付着する。胎土は白色微砂粒を多く含み、暗灰色を呈する。

緑釉陶器には小椀 (54)、皿・椀 (55～61)、香炉 (62、63) がある。54 は口径 8.0cm、器高 3.2cm を測る。底部は糸切りのままである。内外面を丁寧に磨き、底部外面を除き施釉する。硬質で、ほぼ完形品である。55・57 は削り出し輪高台である。見込みに重ね焼き痕が残る。55 は高台内の底部外面を除き施釉する。硬質。57 は底部外面を除き施釉する。やや軟質。56 は貼り付け輪高台である。見込みにトチン跡が残る。高台底部を除き施釉する。やや硬質である。58・59 は高台の内側に段をもち、見込みにトチン痕が残る。59 の底部外面に糸切り痕が認められる。いずれも全面に施釉し、濃緑色を呈する。硬質である。60 は削り出しの蛇の目高台。軟質。61 は削り出し高台、見込みにトチン痕が残る。硬質である。いずれも全面に施釉する。62 は香炉の蓋である。口径 13.1cm、残存高 3.8cm を測る。天井部に陰刻花文と透かしを施す。口縁部との境に二条の沈線、端部外面に一条の沈線を施す。内外面丁寧に磨き、光沢がある。胎土は硬質、釉はうぐいす色を呈する。63 は香炉の身である。胴部最大径 12.5cm を測る。全面に施釉する。

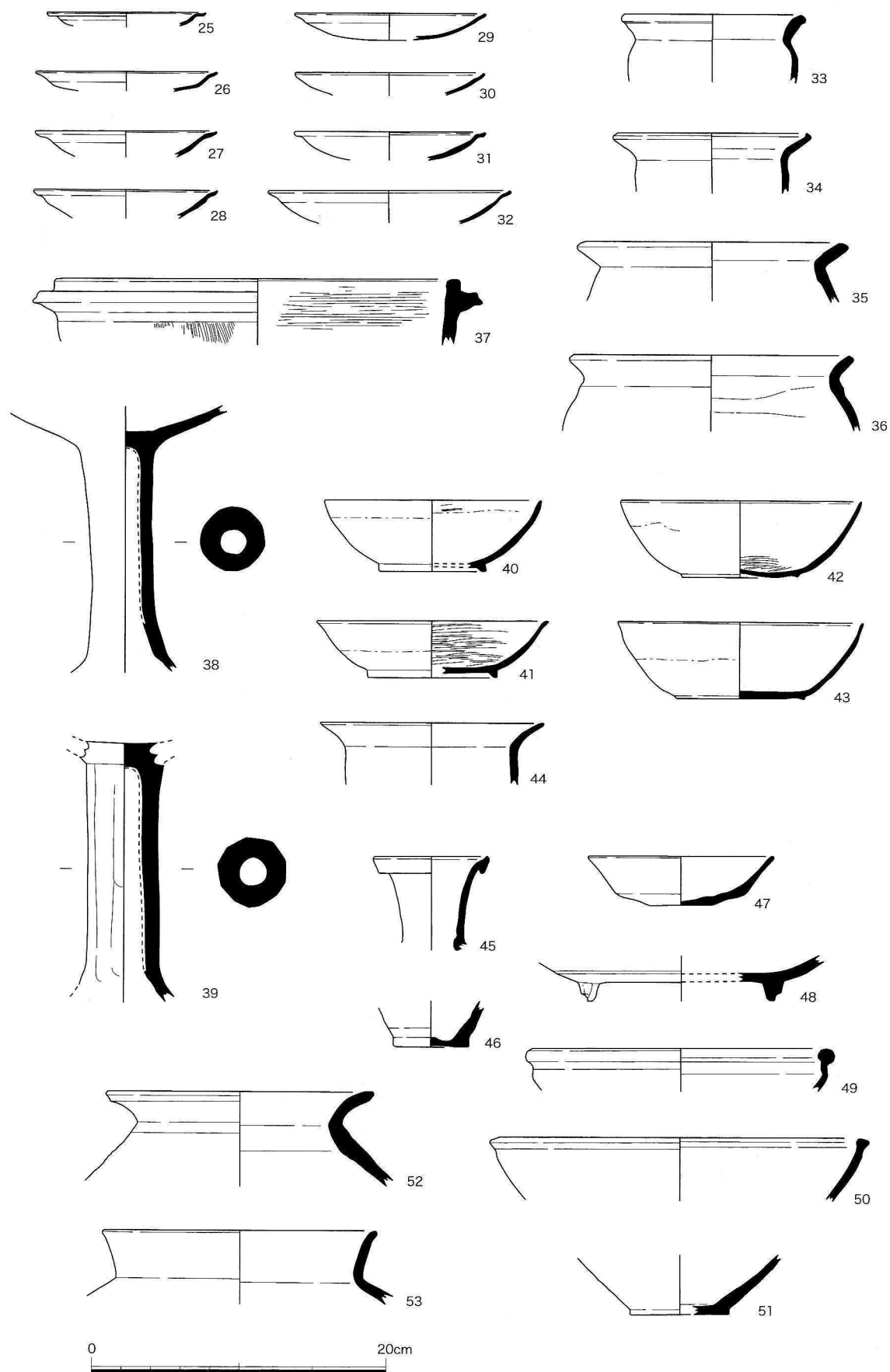


图12 沟286出土遗物实测图(1)(1/4)

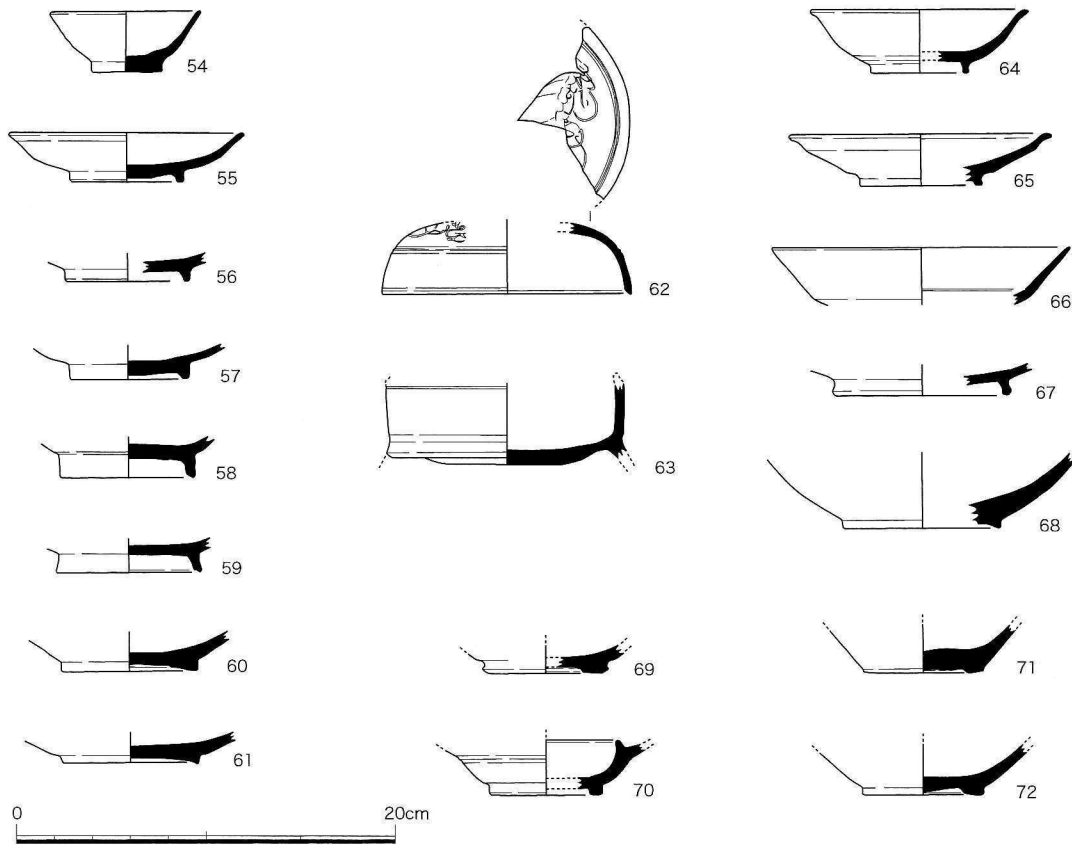


図13 溝286出土遺物実測図(2)(1/4)

胎土は軟質、釉はうぐいす色を呈する。

灰釉陶器には皿・椀(64～67)、壺(68)がある。64は口径11.6cm、器高3.3cmの椀である。内面全体に施釉する。65は14.0cm、器高2.7cmを測る。内面全体に施釉する。66は口径15.8cmの椀である。口縁部が屈曲して立ち上がる。内外面を施釉する。67は見込みに重ね焼き痕が残る。底部内外面を除き施釉する。68は低い幅広の高台をもつ。内面に厚く釉が付着する。体部外面の釉は薄い。

白磁には碗(69)、香炉(70)がある。69は蛇ノ目高台で、高台外面にヘラ削り痕が顕著に残る。底部外面を除き施釉する。70は輪高台の畳付け部を除き全面に施釉する。受部外面に二条の沈線を施す。香炉の身とみられる。いずれも邢州窯系白磁である。

青磁には碗(71、72)がある。71・72は蛇ノ目高台をもつ。畳付け部を除き内外面を施釉する。71の胎土はにぶい黄橙色、72は灰白色、釉はオリーブ色を呈する。72の釉に細かな貫入が認められる。いずれも越州窯系青磁である。これらの一群は10世紀前半から中頃のⅡ期新～Ⅲ期古の特徴を有する。

溝398出土土器(図14・図版19)

土師器(73～76)、黒色土器(77、78)、須恵器(79)、緑釉陶器、土製品(80)などがある。

土師器には皿A(73、74)、杯A(75、76)がある。皿杯ともに口径13cm台から14cm台を測る。クサリ礫を含む。黒色土器杯B(77、78)はいずれもAタイプである。77は口径16cm

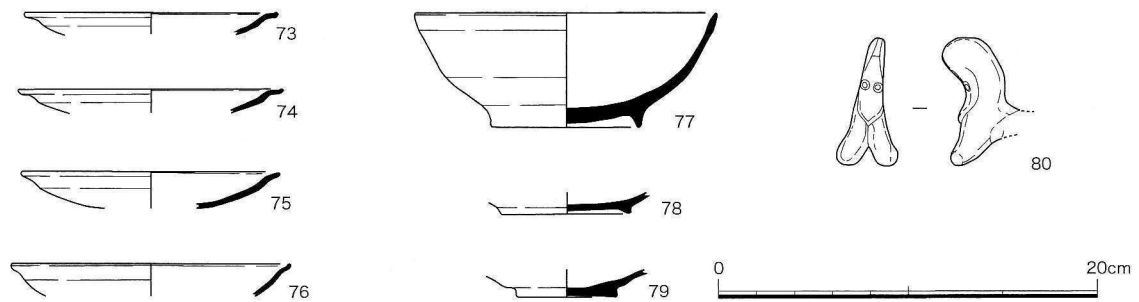


図14 溝398出土遺物実測図(1/4)

前後、器高 6.0cm を測る。三角の高台をもつ。二次焼成を受けている。78 は小さな高台をもつ。須恵器椀 (79) は糸切り痕が明瞭に残る。胎土は精良、灰白色を呈する。土馬 (80) は土師質である。しゃくれ類にたてがみが強調して表現されている。

溝 399 出土土器 (図 15 ~ 17 · 図版 20 · 21)

土師器 (81 ~ 113)、黒色土器 (114 ~ 122)、須恵器 (123 ~ 136)、緑釉陶器 (137 ~ 164)、灰釉陶器 (165)、白色土器 (166 ~ 169)、青磁 (170)、白磁 (171、172)、黄釉褐彩陶器などがある。

土師器には皿 A (81 ~ 86)、杯 A (87 ~ 102)、杯 (盤) B (103、104)、高杯 (105 ~ 107)、甕 (108 ~ 112)、羽釜 (113) がある。皿 A は口径 11 ~ 13cm 台、器高 1.2 ~ 1.6cm を測る。83 は底部内面にハケ目痕が残る。杯 A (88 ~ 101) は 12 ~ 15cm 台、器高 1.6 ~ 2.7cm を測る。87 は体部に径 0.4cm の孔を穿つ。焼成後、内から孔を開ける。杯 A (102) は口径 22.2cm、器高 4.0cm を測り、大型である。いずれも e 手法で、口縁部を一段の横ナデによる屈曲部をもち、端部は内側に小さく肥厚する。杯 B (103) は高台径 14.0cm、高さ 0.9cm を測る。クサリ礫を多く含む。104 は口径 35.3cm、器高 10.0cm の大型の盤である。幅 3 cm ほどの粘土紐の繋ぎ痕が一部認められる。逆台形の低い高台をもつ。105・106 は高杯の杯部、口径 26.3cm、27.0cm を測る。内外面をヨコナデ調整。107 は指押さえで脚部を成形した後、タテ方向に面取し円形に整える。クサリ礫を多く含む。105 と 107 は直接接合しないものの同一個体とみられる。甕 (108 ~ 112) は口径 11.2 ~ 20.0cm の大小がある。108 は内外面平滑に仕上げる。口縁部内外面をヨコナデし、109・110 は体部外面はタテ方向のハケ目調整をおこなう。111 の体部内面は左回りに板ナデ調整、112 とともに外面は指押さえが顕著に残る。羽釜 (113) は口径 18.2cm、外径 19.4cm を測る。体部外面はタテ方向のハケ目、内面はヨコ方向のナデ調整をおこなう。短い鏝が付く。

黒色土器には椀 B (114 ~ 118)、皿 B (119)、壺 (120)、鉢 (121、122) がある。椀 B はいずれも A タイプである。114 は口径 14.6cm、器高 4.8cm を測る。外面は削り調整。115 は口径 14.6cm、器高 4.1cm を測る。116 は口径 16.0cm、器高 5.4cm を測る。体部外面は指押さえ痕残る。117 は口径 16.1cm、器高 5.0cm を測る。比較的高い高台をもつ。118 の高台径は 8.6cm を測る。白色砂粒を多く含む。皿 B (119) は B タイプである。口径 11.4cm、器高 2.5cm を測る。内面底部を一定方向に磨いた後、口縁部内面を四分分割に磨く。壺 (120) は体部と頸部の繋ぎ痕顕

著に残る。体部外面はタテ方向に磨きを施す。外面の炭素吸着にムラがある。121は口径21.1cmの鉢である。内外面をヨコ方向に磨く。122は口径23.0cmを測る。Bタイプとみられる。

須恵器には蓋(123)、椀・皿(124～127)、壺(128～130)、甕(131)、鉢(132～136)がある。蓋は小ぶりの宝珠形つまみをもつ。124は台の付かない椀、口径13.4cm、器高3.6cmを測る。口縁端部に膨らみをもつ。125の皿は削り出しの低い高台をもつ。口径14.0cm、器高2.85cmを測る。胎土は灰白色を呈し、やや軟質。二次焼成を受けた可能性がある。126は体部中央で稜をもつ口径15.2cm、器高5.5cmの椀である。体部外面下半はヘラ削りをおこなう。胎土は灰色、硬質。127は削り出しの高台。胎土は灰色、やや硬質。128は壺の口頸部。口径9.0cmを測る。胎土は灰色、やや硬質。129・130は壺の底部。129は糸切り離しの後、ナデ調整をおこなう。底部内面に自然釉が付着する。胎土は灰色、硬質。130は糸切り痕明瞭に残る。胎土は灰色、やや硬質。131は口径12.4cmの甕、肩部外面に格子目叩き痕が残る。胎土は淡灰色、やや軟質である。鉢の内132は口径20.4cm、133は口径20.2cm、134は口径22.4cmを測る。いずれも口縁下にくびれをもつ。胎土は灰色、硬質。135・136の底部は糸切り痕残る。胎土は灰色、硬質である。

緑釉陶器には椀・皿(137～162)、香炉(163)、壺(164)がある。137は口径7.8cm、器高2.9cmの小椀である。底部は糸切り離し。胎土は淡灰色、硬質。釉は淡緑灰色を呈する。138は口径10.4cm、器高3.5cmを測る。底部は糸切り離し、貼り付け輪高台で、高台の内側に浅い段をもつ。全面に施釉し、濃緑色を呈し、胎土は暗灰色、硬質である。139は口径11.3cm、器高4.4cmを測り、底部ヘラ削りで調整する。高台内側に浅い段をもつ。胎土は灰色で硬質、釉は淡緑灰色を呈する。140は口径12.4cm、器高4.0cmを測る。底部は糸切り離しの後ナデ調整、全面に施釉、釉は濃緑色を呈し、胎土は灰色、硬質。141・142・154・155の底部は糸切り離し、高台の内側に明瞭な段をもつ。見込みにトチン痕。141は口径12.4cm、器高4.1cm、142は口径13.6cm、器高5.1cmを測る。141・142・155の胎土は灰色、硬質、154は黄灰色、軟質。141・154の釉は黄緑色、142・155は濃緑色を呈す。143～150はいずれも削り出しの輪高台。見込みに重ね焼き痕が認められる。150は口径14.6cm、器高6.3cmを測る。145の胎土は黄灰色、軟質。それ以外は灰色、硬質である。147～150は底部外面まで施釉する。釉は緑灰色を呈する。151は口径15.2cm、器高5.5cmを測る。底部は糸切り、貼り付けの輪高台をもつ。見込みにトチン痕。胎土は淡灰色、硬質。釉は濃緑色を呈し、光沢がある。152は口径16.2cmを測る。胎土は淡灰色、硬質。釉は黄緑色。153は口径19.0cm、器高6.9～7.2cmを測り、4カ所に輪花を施す。底部は糸切り離し、貼り付けの輪高台をもつ。見込みにトチン痕。胎土は黄灰色を呈し、やや軟質。釉は全面に施し、緑黄色を呈する。156～159は貼り付けの輪高台、高台は比較的高く、内側に浅い段をもつ。見込みにトチン痕。胎土は灰色、硬質。157～159の釉は黄緑色、156は濃緑色を呈する。皿には段皿(161)と耳皿(162)がある。160は口径11.4cm、器高2.2cm、161は口径14.7cm、器高3.0cm、162は最大径10.0cm、幅7.3cm、器高1.8～2.9cmを測る。いずれも貼り付けの輪高台、高台の内側に浅い段をもつ。161・162は底部糸切り。胎土は灰色、硬質。

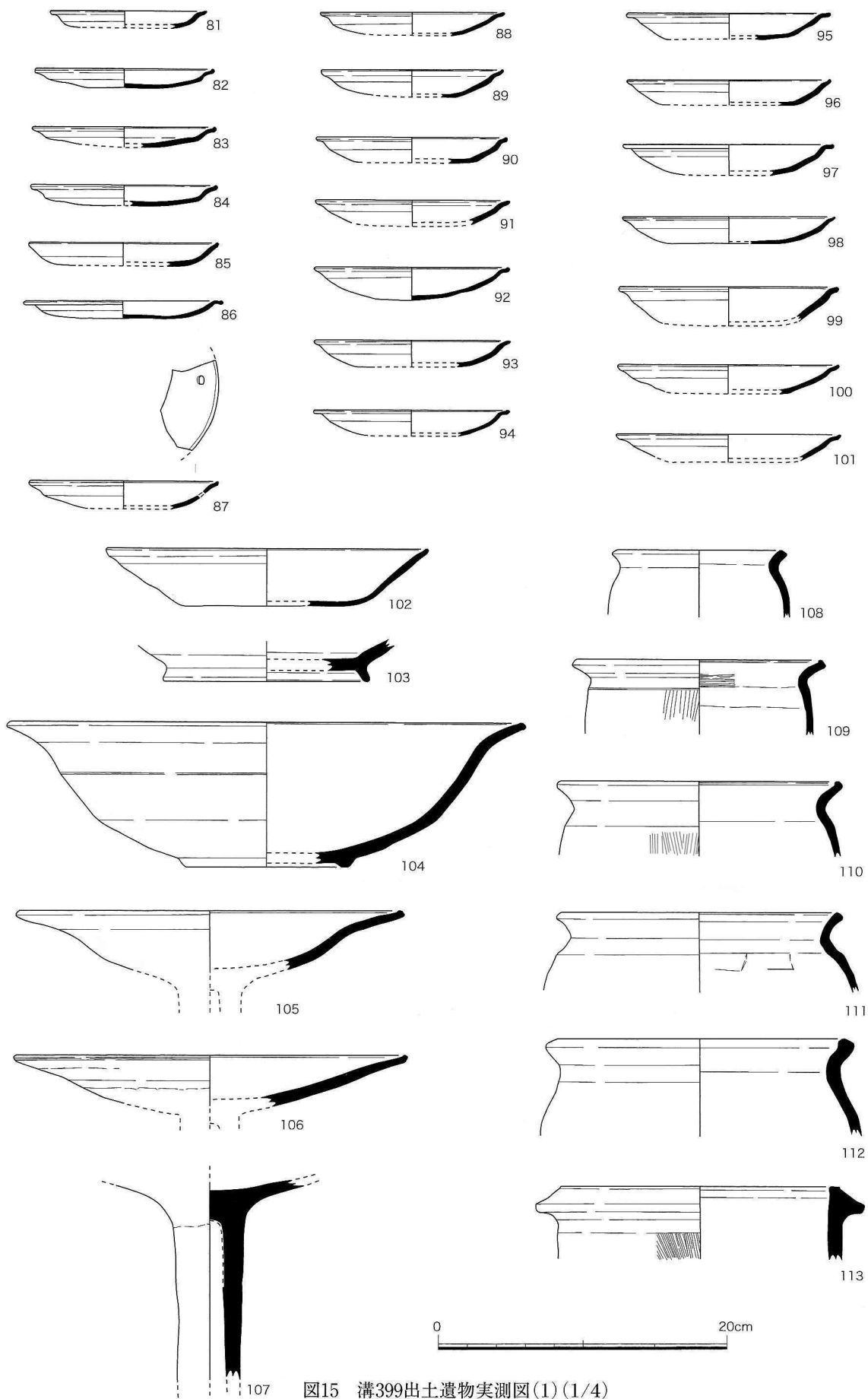


图15 溝399出土遺物実測図(1)(1/4)

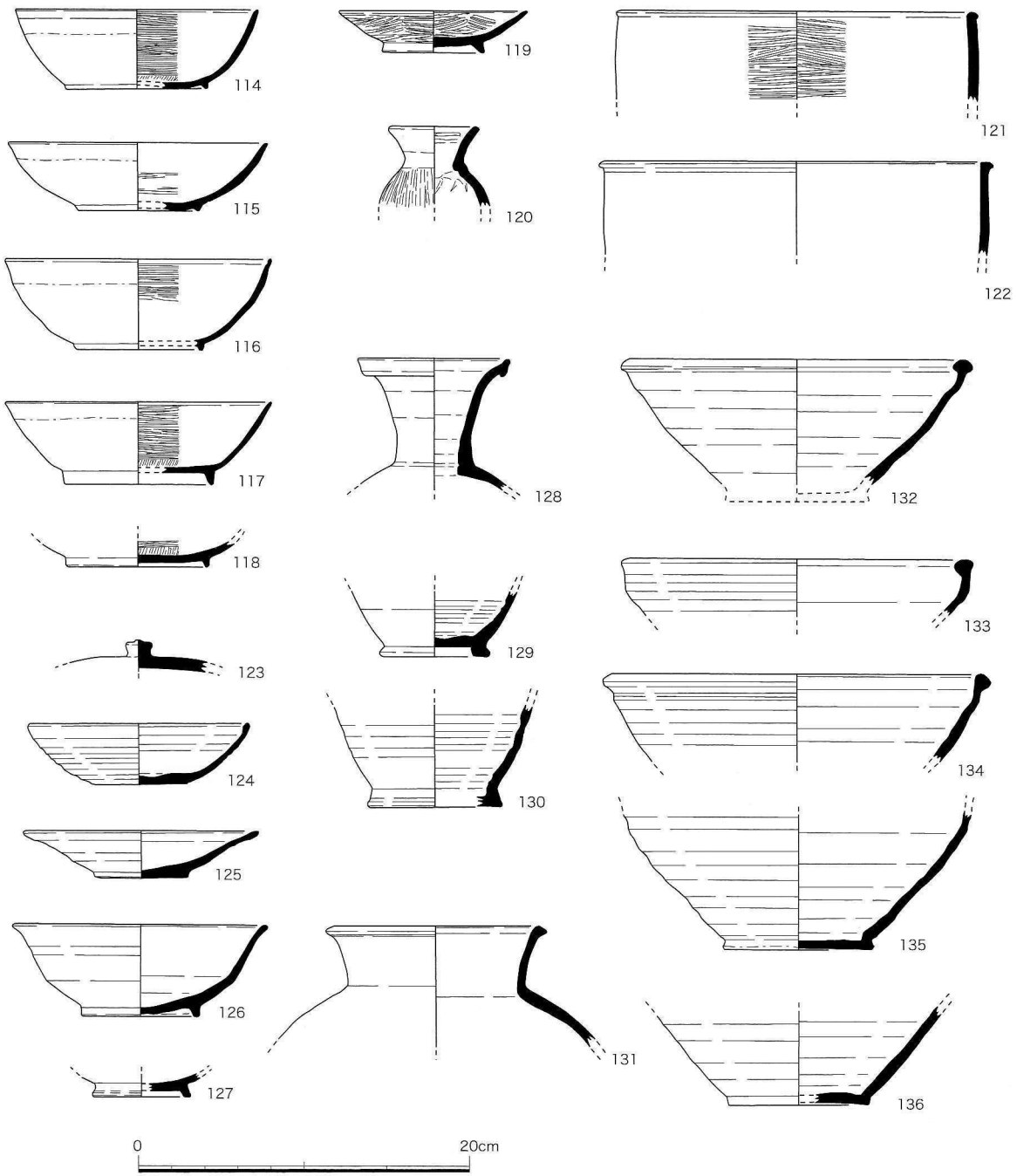


图16 溝399出土遺物実測図(2)(1/4)

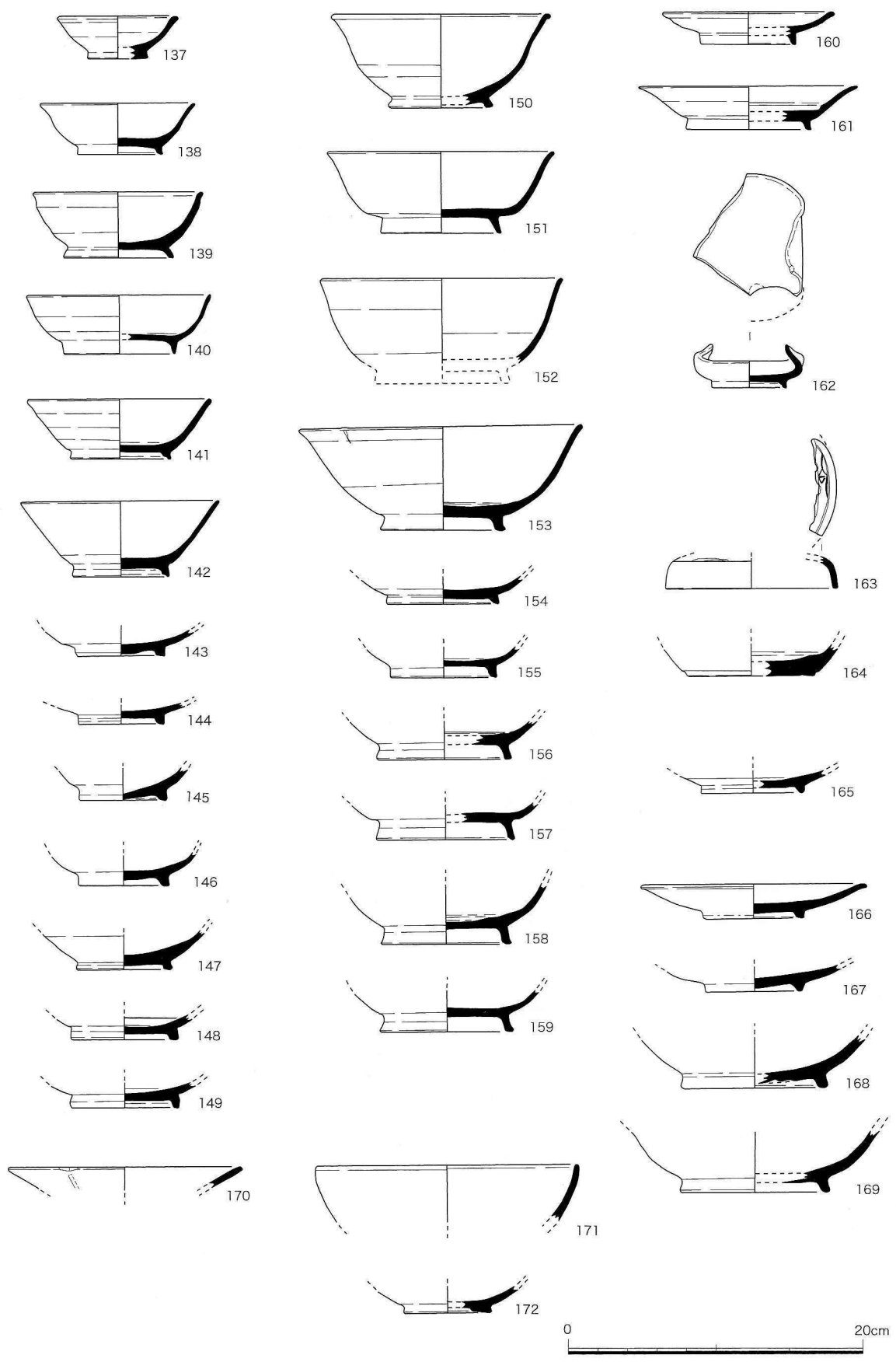


图17 沟399出土遗物实测图(3)(1/4)

釉は緑黄色を呈する。163は香炉の蓋、口径11.7cmを測る。天井部に陰刻花文と透かしを施す。胎土は黄灰色、やや軟質。釉は全面に施し、黄緑色を呈する。164は壺あるいは鉢の底部である。底部は凹線によって輪高台風に作る。胎土は灰色、やや硬質。釉は全面に施し、緑黄色を呈する。

灰釉陶器碗(165)は貼り付けの輪高台、体部内外面を施釉する。内面重ね焼き痕。

白色土器は皿(166、167)と碗(168、169)がある。166は口径14.8cm、器高2.3cmを測る。いずれも貼り付けの輪高台をもつ。器表は残りが悪く調整不明。胎土は灰白色、軟質。

青磁(170)は輪花の碗か皿。胎土は灰白色、釉はオリーブ色を呈する。越州窯系青磁。

白磁碗(171)は口径17.6cmほどを測る。口縁部は内彎し、端部を丸くおさめる。胎土、釉ともに白色を呈する。172は蛇ノ目高台。見込みを円形にえぐる。畳付け部を除き全面施釉する。胎土、釉ともに白色。邢州窯系白磁。これらの土器群はⅡ期新～Ⅲ期古。

溝 531 出土土器 (図 18・図版 22)

土師器(173～190)、黒色土器(191～194)、須恵器(195～199)、緑釉陶器(200、201)、灰釉陶器(202～204)などがある。

土師器には皿A(173～175)、杯A(176～189)がある。皿Aは口径12～13cm台、杯Aは口径12～19cm台を測る。174・175は炭化物が付着する。176・178・180・181・185・187はクサリ礫多く含む。甕(190)は口径10.8cmを測る。短く立ち上がる口縁部をヨコナデ、体部内外面はナデ調整。赤褐色を呈する。

黒色土器には碗B(191～193)、鉢(194)がある。191は口径14.7cmを測る。Aタイプ。192は口径15.0cm、器高5.3cmを測り、しっかりした高台をもつ。内外面を密に磨く。Bタイプ。193は口径15.1cm、器高5.1cmを測る。体部外面指押さえの後ナデ調整。Aタイプ。194は口径21.0cmを測り、口縁端部が外反する。内面は粗い磨きを施す。Bタイプ。

須恵器には鉢(195～199)がある。195・196の口縁端部の肥厚は小さく、くびれをもたない。197は口縁端部を水平に面取する。198の端部は断面楕円形を呈する。199の底部は糸切り離し痕。

緑釉陶器(200)は貼り付けの蛇ノ目高台。見込みにトチン痕あり。胎土は灰色、硬質。釉は濃黄緑色を呈する。201は削り出しの輪高台の碗。胎土は灰色、硬質、釉は緑黄色を呈する。

灰釉陶器には碗(202、203)、壺(204)がある。202は削り出しの輪高台をもつ。体部の内外面を施釉。胎土は黄灰色、やや軟質。203は貼り付けの輪高台、胎土は灰白色、硬質である。204は貼り付けの輪高台をもつ壺である。体部外面全体に施釉を施し、底部まで釉垂れが認められる。底部内面に釉が付着。胎土は淡灰色、硬質。Ⅱ期新～Ⅲ期古。

溝 532 出土土器 (図 18・図版 21)

土師器、須恵器、黒色土器(205)、青磁(206)などがある。205は黒色土器の鉢、Bタイプである。内外面を磨く。206は青磁碗である。胎土は灰色、釉は均一でオリーブ色を呈する。越州窯系青磁である。

溝 312 出土土器 (図 18・図版 22)

土師器、須恵器、緑釉陶器(207)などがある。207は貼り付け輪高台の皿である。内外面を

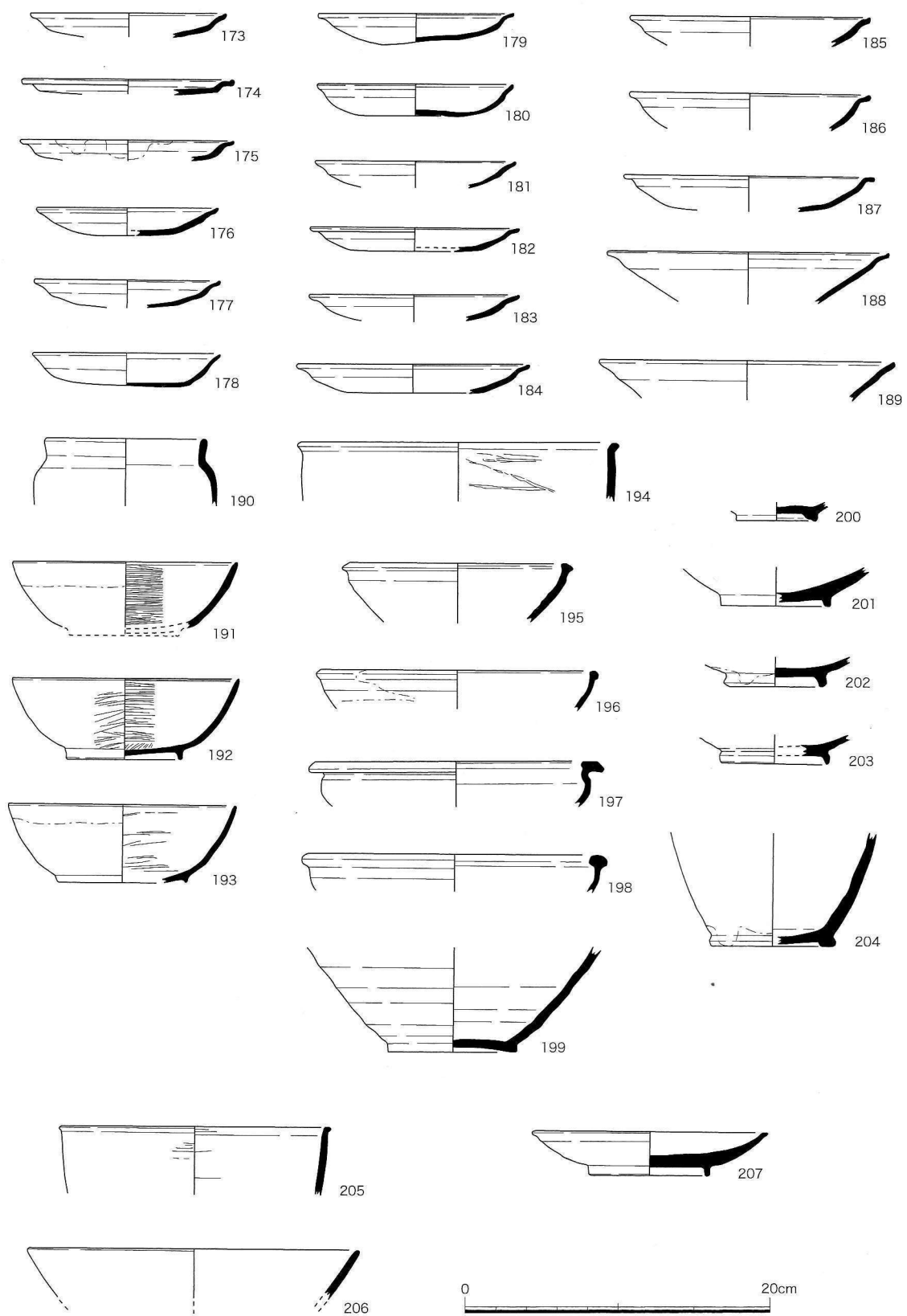


图18 溝531(173~204)・溝532(205・206)・溝312(207)出土遺物実測図(1/4)

丁寧に磨き全面に施釉し光沢がある。見込みと高台内底部にトチン痕が認められる。胎土は灰白色、やや硬質、釉はうぐいす色を呈する。

溝 399・溝 399 上面・溝 531 上面出土土器 (図 19・図版 22)

208 は溝 399 より出土した。厚さ 0.3 ~ 0.4cm の胎土に高さ 0.1 ~ 0.2cm の「四天王 (増長天)」文あるいは「胡人舞踏」文を貼り付ける。この断片は平たく、水注ではなく陶枕片などの可能性がある。内面のロクロ目は幅 1cm を測る。胎土は灰黄色、やや硬質。釉は透明釉 (黄釉) にちかく、貼文部分に褐釉を施す。209 は溝 399 上面精査中に出土したものである。208 と同文である。同じく褐釉を施す。210 は溝 531 上面精査中に出土した。把手付き水注の肩部に厚さ 0.2cm の文を貼り付ける。なつめやし (date palm) の実をついばむ鳥を描いた「なつめやしと鳥」文。胎土は黄灰色、やや硬質、黄釉陶器の貼文部分に褐釉を施す。これらは中国湖南省長沙^{註5}窯系の黄釉褐彩陶器である。

建物 6 出土土器 (図 20)

土師器 (211) と緑釉陶器碗 (212) などがある。212 は貼り付けの輪高台をもつ。胎土は灰色、硬質、釉は黄緑色を呈する。211 は柱穴 383 掘形出土、212 は柱穴 329 掘形出土である。

建物 7 出土土器 (図 20)

土師器 (213、214)、黒色土器 (215)、灰釉陶器 (216) がある。215 は A タイプの杯 B である。柱穴 317 柱当り出土。214 は口径 19.6cm を測る。白色砂粒を多く含む。柱穴 511 掘形出土。

柵 5 出土土器 (図 20)

土師器 (218、219)、黒色土器 (220)、須恵器 (221)、緑釉陶器 (222) などがある。218 は柱穴 451 掘形出土。219 ~ 222 は柱穴 441 柱当り出土。220 は B タイプの鉢である。221 は口縁下にくびれをもつ須恵器鉢である。222 は緑釉陶器碗。胎土は灰色、硬質、釉は黄緑色を呈する。

柵 3 出土土器 (図 20・図版 22)

土師器 (223) は口径 13cm を測る。緑釉陶器碗 (224) は貼り付けの輪高台をもつ。底部は糸切りの後ナデ調整。底部内外面トチン痕。胎土は灰色、硬質である。釉は黄緑色を呈し、内外面

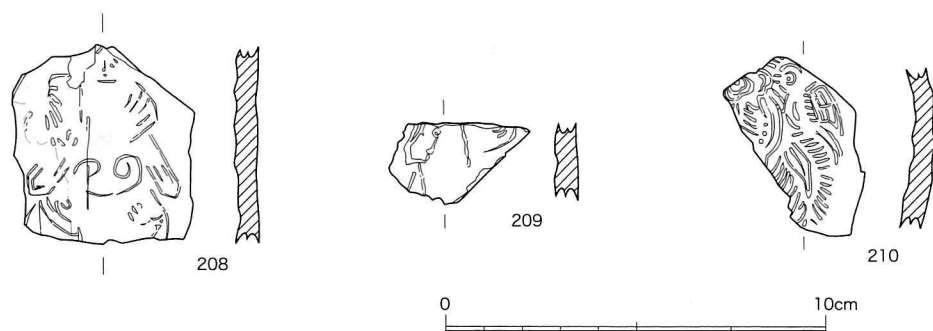


図19 黄釉褐彩陶器実測図(1/2)

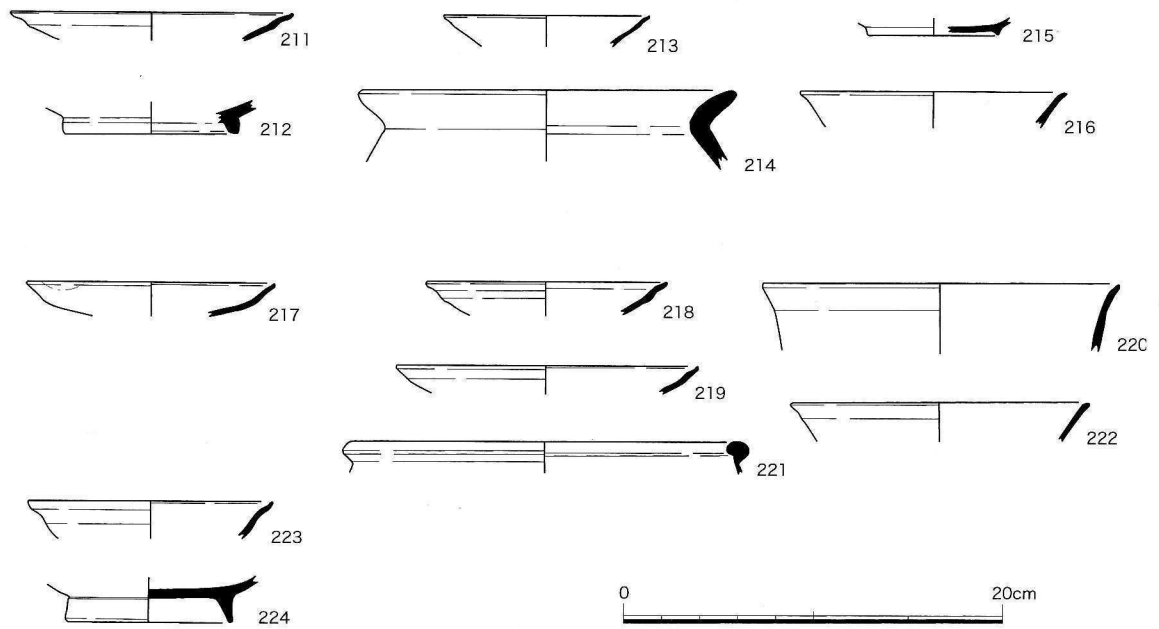


图20 建物6(211・212)・建物7(213~216)・建物3(217)・
柵5(218~222)・柵3(223・224)出土遺物実測図(1/4)

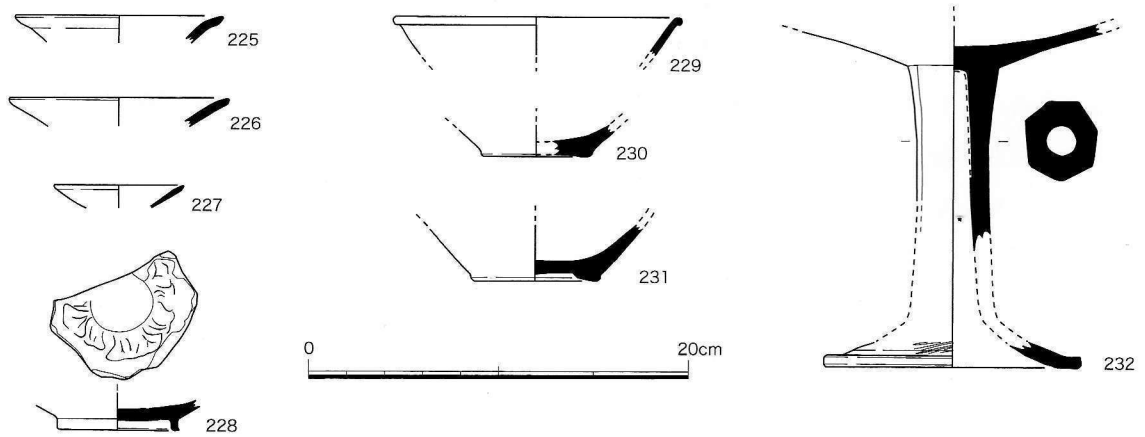


图21 溝8(225・226)・溝31(227)・溝78(228)・溝56(229)・溝57(230)・
柱穴495(231)・柱穴433(232)出土遺物実測図(1/4)

丁寧⁶に磨き、光沢がある。柱穴 308 柱当り出土。

溝 8・31・78・56・57・柱穴 495・433 出土土器 (図 21・図版 21・22)

土師器皿 (225、226) は口径 11cm 台を測る。溝 8 出土。227 はいわゆるへそ皿である。口径 6.9cm を測る。溝 31 出土。これらは 16 世紀代に属する。228 の緑釉陶器椀は貼り付けの輪高台である。見込みに陰刻花文を施す。底部内外面にトチン痕が残る。底部外面まで丁寧⁶に磨く。胎土は淡灰色、硬質。釉は全面に施し、うぐいす色を呈し、光沢がある。溝 78 出土。229 は白磁碗。口径 14.8cm を測る。口縁端部は小さな玉縁をもつ。胎土、釉ともに白色を呈する。邢州窯系白磁である。溝 56 出土。青磁碗 (230、231) は蛇の目高台。胎土は淡灰色、釉は灰オリーブ色を呈する。越州窯系青磁。230 は溝 57、231 は柱穴 495 掘形出土。土師器高杯 (232) は柱穴 433 より出土。脚部を 7 角に面取する。杯部内面にハケ目痕が残る。外面に一部磨きが認められる。裾部外面を磨く。

瓦類 (図 22・図版 23)

瓦の出土量は少ない。軒丸瓦 5 点、軒平瓦 2 点、塼などが出土した。

複弁四葉蓮華文軒丸瓦 (233～235)

いずれも同文の一本造り瓦である。233 は溝 286 出土。やや小ぶりの瓦である。瓦当裏面の布目痕が筒部より連続する。花卉に顕著な範傷がある。二次焼成を受けており、橙灰色を呈し軟質、胎土は白色微砂粒を含み精良。『平安京古瓦図録』^{註6}内裏蘭林坊跡出土瓦 (69) と同範である。蓮子は 1 + 4、珠文は 16。234 は溝 531 出土。界線が花卉に合わせて窪む。中央部を縦断する範傷がある。瓦当裏面に布目痕が残る。蓮子は 1 + 4。二次焼成を受けた可能性がある。外面は黒灰色を呈し、胎土は橙灰色で精良、軟質。235 は溝 531 出土。234 とは珠文の間隔が相違する。外面は黒灰色を呈し、胎土は淡灰色で精良、やや軟質。平安時代中期。

均整唐草文軒平瓦 (236)

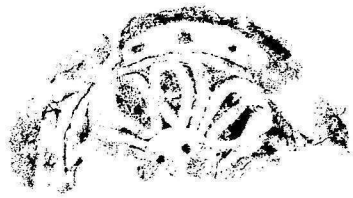
溝 532 出土。外区の右下の珠文間に「・○・瓦・屋・」銘を横向きに配する。『木村捷三郎収集瓦図録』^{註7}壇林寺跡出土瓦 (835) と同範である。瓦当顎部はヨコケズリ、裏面はヨコナデ、平瓦部凸面はタテケズリ、側面はタテケズリ、平瓦部凹面は布目痕。外面は黒灰色を呈し、胎土は灰白色で精良、やや軟質。

均整唐草文軒平瓦 (237)

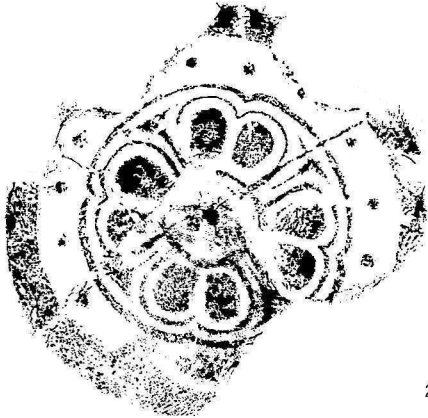
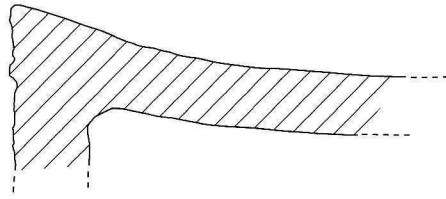
溝 399 出土。瓦当顎部はヨコケズリ、裏面ヨコナデ、平瓦凸面部はタテケズリ、側面縄目タタキをおこなう。二次焼成を受けて平瓦凸面部の一部が黒灰色、他の部分は橙灰色を呈する。胎土は砂粒を多く含み灰白色、やや軟質。西賀茂角社瓦窯産。

塼 (238)

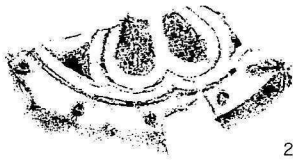
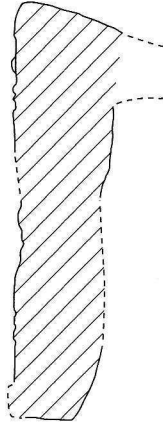
溝 399 出土。厚さ 9.5cm を測り、大振りの塼である。黒灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含み精良、やや軟質。



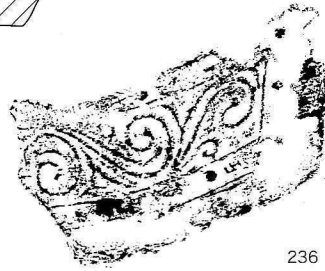
233



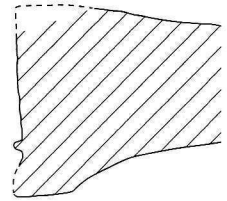
234



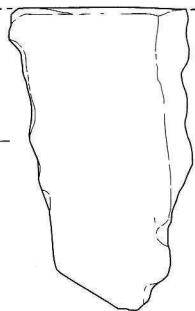
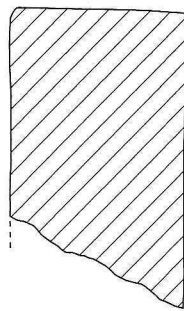
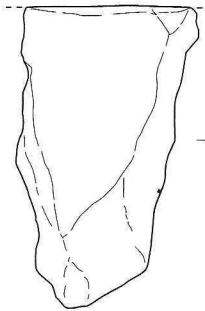
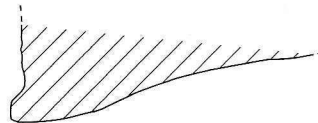
235



236



237



238



图22 軒瓦·磚拓影实测图(1/3)

石製品 (図 23・図版 23)

紡錘車 (239)

溝 286 出土。滑石製である。径 3.8～4.0cm、高さ 1.6cm、質量 34g を測る。孔は径 0.6cm。細線の二重円と格子模様が認められる。完存品。

砥石 (240)

建物 6 の柱穴 383 より出土。一端が欠ける。残存する五面とも使用しており、平滑である。

金属製品 (図 24・図版 23)

銭貨 (241)

調査区南部中央精査中出土。天聖元寶である。北宋の 1023 年初鑄。真書。

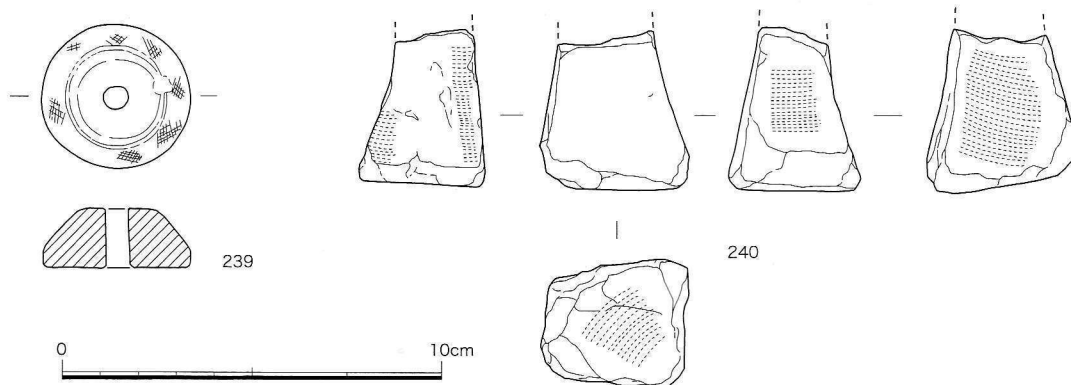


図23 石製品出土遺物実測図(1/2)

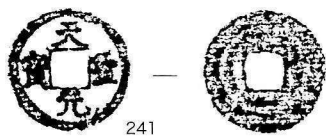


図24 銭貨拓影図(1/1.5)

	A ランク点数 (箱数)	内訳	B ランク 箱数	C ランク 箱数	出土箱数 合計
点数及 び箱数	241 点 (15 箱)	土師器 97 点、須恵器 33 点、黒色土器 24 点、白色土器 5 点、緑釉陶器 45 点、灰釉陶器 12 点、白磁 6 点、青磁 6 点、黄釉褐彩陶器 3 点、軒瓦 5 点、埴 1 点、土製品 1 点、石製品 2 点、銭貨 1 点	58 箱	0	73 箱

IV ま と め

今回の調査では、平安時代前期から中期にかけての掘立柱建物、小径、溝、土壇跡などを、また室町時代以降の耕作に伴う溝状遺構を多数検出した。とくに八町内を南北に走る二条の小径は、平安京の発掘で初めての検出例となった。

平安時代の建物の変遷と宅地割

9世紀前半から10世紀後半にかけて掘立柱建物は複数の変遷時期があり、掘立柱建物跡及び小径、溝跡は以下のI期からVI期に大別できる。

I期 建物1

II期 建物2・建物3・柵1

III期 建物4・建物5・柵2・小径1（溝286・398）・小径2（溝531・532）
溝312・溝399

IV期 建物6・建物7・柵3・小径1・小径2・溝312・溝399

V期 建物8・柵4・柵5

VI期 建物9・柵6・柵7

今回検出した最古期の建物1の柱穴576から出土した土器群は平安京の土器編年・I期新に属するもので、建物1は9世紀前半に遡る。II期の建物2は建物1とほぼ重複しており、建物1の建て替えとみられる。各柱穴の掘形には凝灰岩片が多量に含まれる特徴をもつ。南側に東西方向の柵1を伴う。建物3の柱穴536から出土した土師器皿は9世紀後半に属する。III期の段階になると町を東西に二等分する東二行と東三行の境界付近に側溝を伴う小径1と、東一行と東二行の境界付近に小径2が作られる。また区画溝312・399が作られるのもこの時期である。小径の側溝及び区画溝か

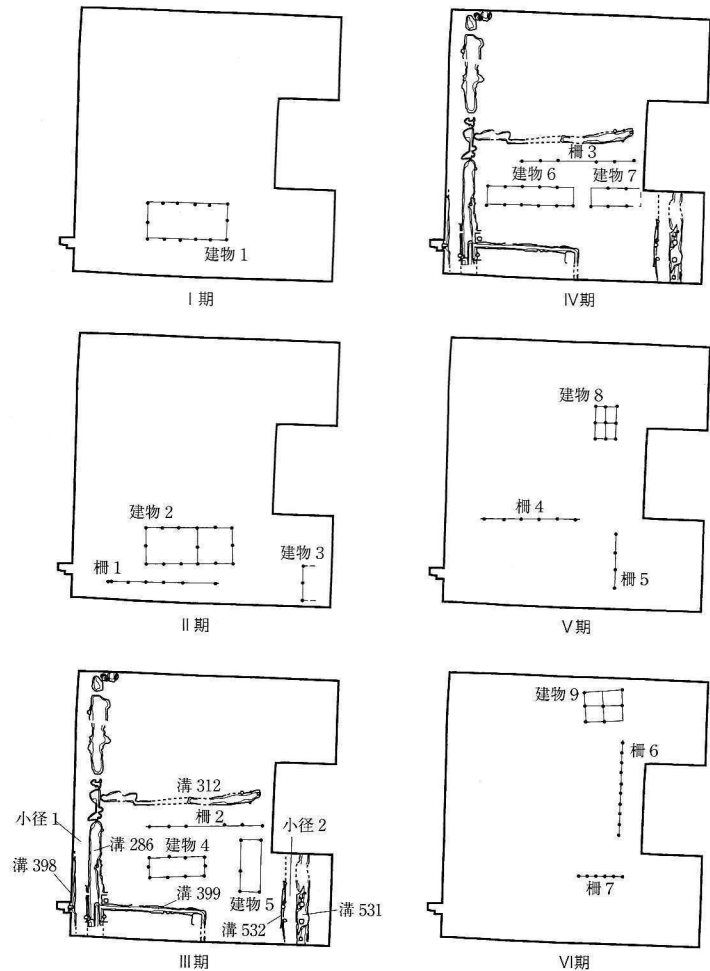


図25 八町の変遷 (1/1,000)

ら出土した多量の土器群は土器編年のⅡ期新からⅢ期古に収まるもので、10世紀前半から中頃までのものである。Ⅲ期の建物4・5及びⅣ期の建物6・7はいずれも北側に東西方向の柵列をもつ。柵2と柵3は重複関係にあり建て替えとみられる。柵3の柱穴308出土の緑釉陶器椀(224)は10世紀中頃のものである。Ⅴ期の段階では小径の側溝及び区画溝は埋め立てられ廃絶したものと考える。建物8は総柱の建物で倉庫とみられる。南方に東西方向と南北方向の柵列がある。Ⅵ期も同様に北側に総柱の建物9、その南に柵6・7がある。Ⅵ期は10世紀後半代に収まるものと考えている。今回の調査では11世紀から15世紀の遺構をほとんど検出することができなかった。遺物もきわめて少ない。耕作に伴う小溝群からは16世紀以降の遺物が出土した。(水谷)

「小径」の位置と成立時期について

今まで平安京内の調査においては「小径」とみられる側溝を伴う遺構は数多く検出されている。^{註8} 今回の調査においても八町の東西中心推定線西側と東一行と東二行を限る南北推定線の西側の2カ所において側溝を伴う「小径」を検出した。

『延喜式』卷四十二の「京呈」によれば

凡町内開小径者。大路辺町二。廣一丈五尺。市人町三。廣一丈。自余町一。廣一丈五尺とあり、この八町の北側が中御門大路に面することからも二条の小径が想定され、小径1の東西両側溝(溝286と溝398)と小径2の東西両側溝(溝531と溝532)の各全長がおよそ45m前後を測り、『延喜式』の規定を踏襲するものと考えられる。小径1の中心は八町の東西中心推定線よりも西へ4mのところであり、また小径2の中心は東一行と東二行の境界推定線より西へ6.5mのところにある。小径1の中心を八町の東西中心線とした場合、東一行と東二行の境界線は小径2の東側溝531の東肩部付近を通ることとなる。この小径2の偏りは四行八門制における路に面する戸主の築地と内溝(ここでは宇多小路西築地)を考慮したものである可能性がある。

溝286下層で検出した土壙585の出土土器群は土師器杯Bなどの形態より、平安宮左兵衛府跡SD1出土土器群^{註9}と同時期のものと考えられる。左兵衛府SD1土器群は平安京の土器編年のⅡ期新に位置付けられており、10世紀初頭頃の年代が与えられている。小径1と小径2の両側溝より出土した土器群はⅡ期新からⅢ期古に位置付けられ、10世紀前半から中頃の土器群であり、この八町における小径は10世紀の前半代に成立したものと考えられる。そして、10世紀の後半代には廃絶している。これは同じ右京二条三坊の十一町の調査^{註10}においても、町を二分する位置に南北の小径が検出されており、その小径の成立期が平安時代中期初頭とされ、二分された宅地は10世紀中頃まで続き、その後廃絶し空閑地となる、と報告され、八町と同じ変遷を辿る。また東隣接地の右京二条三坊一町の調査^{註11}においても町を二分する位置に南北方向の溝SD344が検出されており、これは小径の西側溝とみられる。報告書ではこの溝は平安時代前期に遡るものとされているが、出土遺物などの提示がなく詳細は不明である。

なお、南隣接地の調査で検出された春日小路北側溝とみられる溝SD2(図版1)は平安京の条坊復原モデルの春日小路北築地心推定線上に重なって検出されているが、1982年度におこな

われた東隣接地の二町の調査（朱雀第八小学校内^{註12}）において春日小路の南側溝（SD 1）が検出されており、溝 SD 2 と SD 1 の心心距離を求めると、およそ 7.8m 前後を測り、「京呈」における小路の記述と等しく、それぞれ北側溝及び南側溝とすることは妥当性をもつ。その場合、実際の春日小路北築地心推定線は 2.1m 前後北寄りにずれた位置に想定される。また 2007 年度の花園大学構内の調査では中御門大路の南側溝とみられる溝 SD01・02 が検出されており、中御門大路南築地心推定線と同じく北寄りに 2.1m 前後移動すると、検出された溝 SD01・02 は「京呈」通りの中御門大路南側溝の位置に収まる。（家崎）

溝 399 について

調査区の南端部近くで検出した溝 399 は 1981 年度の南隣接地の調査で検出された溝 SD 1 と L 字型に繋がる溝であることが判明した（図版 1）。溝 399 は小径 1 の東側溝である溝 286 から取水し、13.5m 程東へ延びたのち直角に南へ折れ曲がり、春日小路の北側溝に流れ込む。これらの溝に囲まれた東西 13m、南北 23m の敷地に東西 4 間、南北（5）間の四面庇建物 SB 2 がある。長岡宮の大蔵跡の調査^{註14}では蔵の回りに溝が巡らされており、報告書では雨落ち溝とされているが、今回の小径の東側溝及び春日小路の北側溝を利用した四方を囲む溝は単に雨落ち溝とは考えにくく、建物 SB 2 は器物などを保管した蔵で、四囲の溝は防火用水の役割を持った施設と考えられ、長岡宮大蔵跡の溝も同様な性格をもつものとみられる^{註15}。溝 399 が小径 1 の東側溝 286 から取水するところでは溝 286 の底を一段掘り下げて深くなっており、溝 399 に流れる水量を豊富に確保するための所作と考えられる。また、同じ八町の花園大学の調査でも L 字形に曲がる溝 SD04（東三行北二門の東半部に位置する）が検出されており、報告書では SK01 と切り合い関係にあるとされているが、この SK01 は小径 1 の西側溝の残欠である可能性が高い。SD04 に付随する建物遺構は検出されていないが、南辺部の SB 2 と同様な建物があったと考えることができ、これらは八町における宅地利用のひとつの特徴を示すものとも考えられる。

また、溝 286 と溝 399 の取り付け部に土壙 382 がある。土壙は一辺 0.5m の方形をなし、当初は掘立柱跡と考えたが、柱根跡が認められず、繋がる柱穴跡も無いことから建物遺構に伴うものではないことが判明した。土壙内からは邢州窯系白磁碗、白土器などが出土し、溝 399 に伴う地鎮遺構と考えられる。（家崎）

今回の調査では平安時代前期から中期にかけての多数の掘立柱建物跡、溝跡などを検出することができた。調査区の西端と東端で検出した南北方向の小径は、平安時代の宅地割りの在り方を規定した延喜式の「京呈」に沿うものであり、二条の小径の同時検出は平安京内の調査で初めての発見となった。

出土遺物においては、主として溝内より多量の土器類が出土したが、土師器類と共に緑釉陶器の割合がきわめて高く、出土遺物の少ない柱穴跡からも必ず緑釉陶器片が混入するという特徴があった。また輸入陶磁器の中には越州窯系青磁と共に稀少な邢州窯系白磁、長沙窯系黄釉褐彩陶

器などが多く出土し、とくに蔵とみられる建物 SB 2 を圍繞する溝跡から出土したことは、この建物の性格を考える上で重要な意味をもつものと考えられる。

- 註 1 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 56 年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981 年
- 註 2 『平安京右京二条三坊八町 -花園大学構内調査報告Ⅷ-』（花園大学考古学研究報告第 15 冊）花園大学考古学研究室 2010 年
- 註 3 註 1 と同じ。
- 註 4 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第 3 号』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
- 註 5 李效偉『長沙窯 大東文化輝煌之焦点』湖南美術出版 2003 年
- 註 6 『平安京古瓦図録』平安博物館編 1977 年
- 註 7 『木村捷三郎収集瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
- 註 8 『平安京右京六条三坊-ローム株式会社社屋新築に伴う調査-』古代文化調査会 1998 年
『平安京左京九条一坊十六町-東寺旧境内遺跡-』古代文化調査会 2009 年
- 註 9 『平安京発掘調査概報 京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978 - II』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978 年
- 註 10 『昭和 58 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1985 年
- 註 11 『昭和 60 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988 年
- 註 12 『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984 年
- 註 13 註 2 と同じ。
- 註 14 「長岡宮跡 137 次（7AN12 地区）～北辺官衙（南部）-推定大蔵～発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書 第 11 集』向日市教育委員会 1984 年
- 註 15 山本雅和氏（京都市埋蔵文化財研究所）より現地での実見を賜り、ご教示を得た。
- 註 16 註 2 と同じ。

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうにじょうさんぼうはっちょう							
書名	平安京右京二条三坊八町							
副書名	洛陽総合高等学校校舎建て替えに伴う調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	水谷明子、家崎孝治							
編集機関	古代文化調査会							
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404							
発行年月日	2011年12月10日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 にじょうさんぼうはっ 二条三坊八 ちょう 町	きょうとしなかがょうく 京都市中京区 にしきょうかすがちょう 西ノ京春日町	26100	1	35度 01分 03秒	135度 43分 40秒	2011.06.02 ～ 2011.08.12	1,097 m ²	校舎建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京 二条三坊八 町	都城跡	平安時代	土壙、柱穴、掘 立柱建物、小 径、溝	土師器、須恵 器、緑釉陶器、 灰釉陶器、黒色 土器、輸入陶磁 器、土製品、石 製品、金属製 品、瓦類	9～10世紀の 建物遺構、小径 とそれに伴う側 溝			

版 図



八町の東西
中心推定線

今回調査地

Y-24,852

Y-24,844

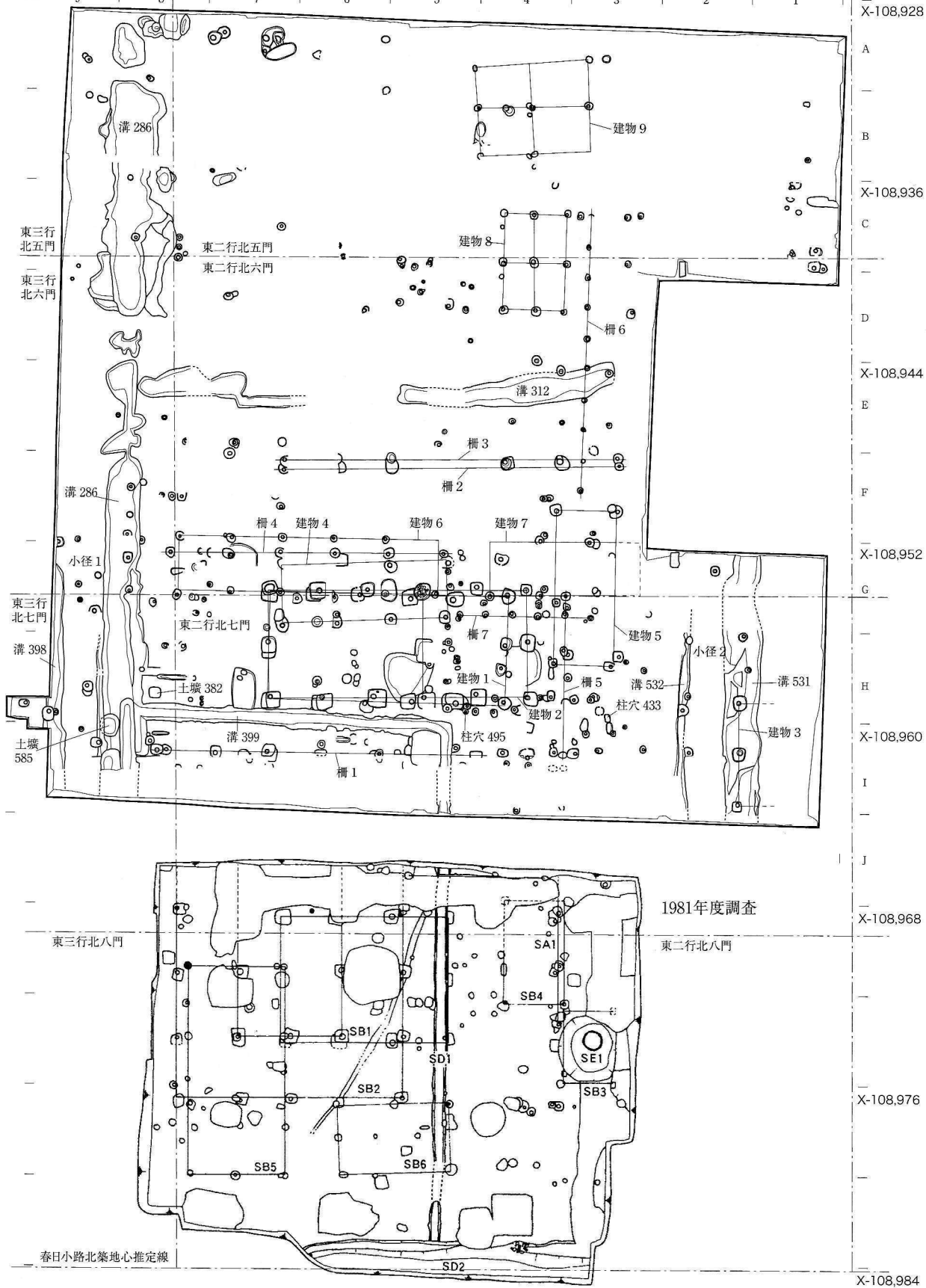
Y-24,836

Y-24,828

Y-24,820

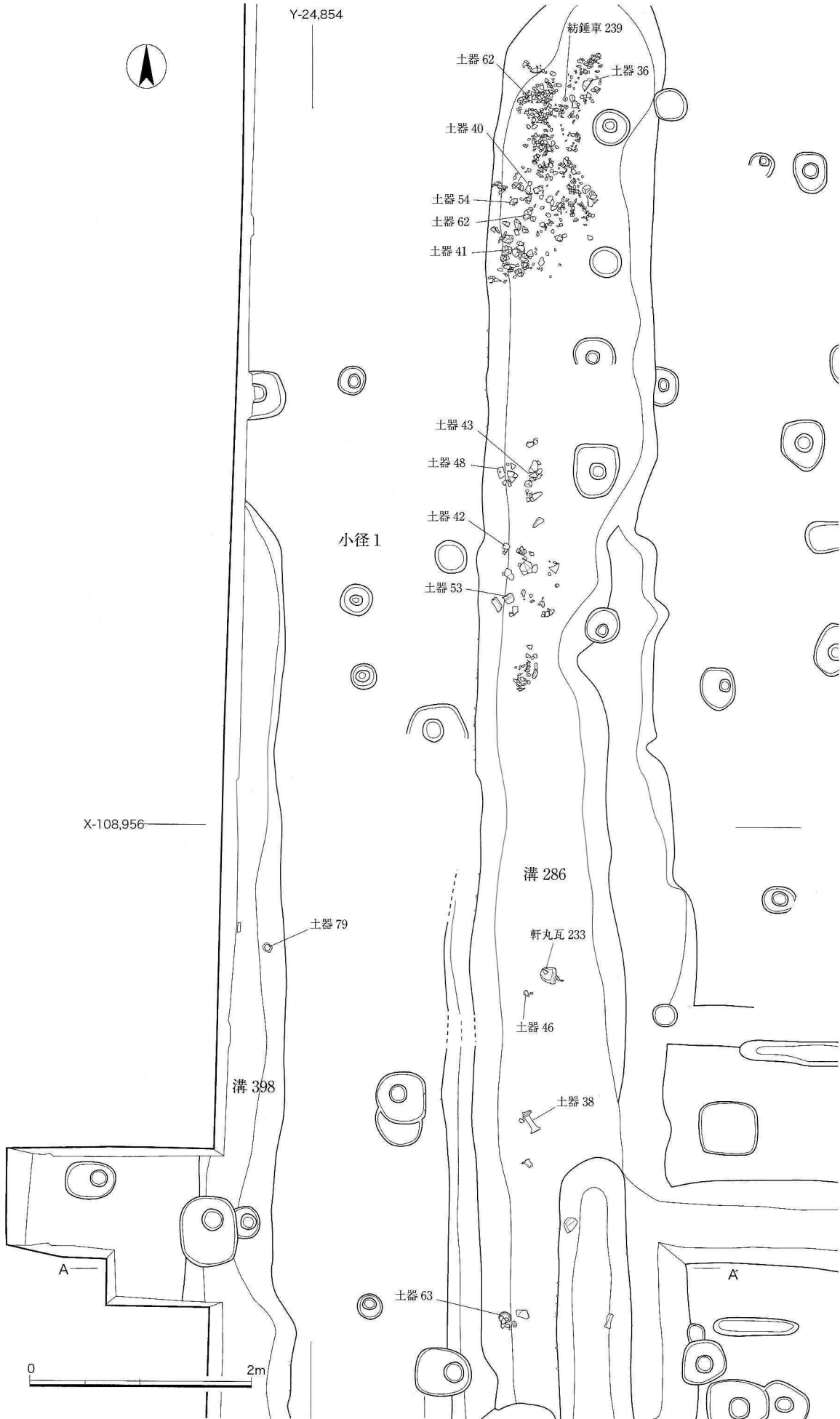
9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1

図版
—
遺跡

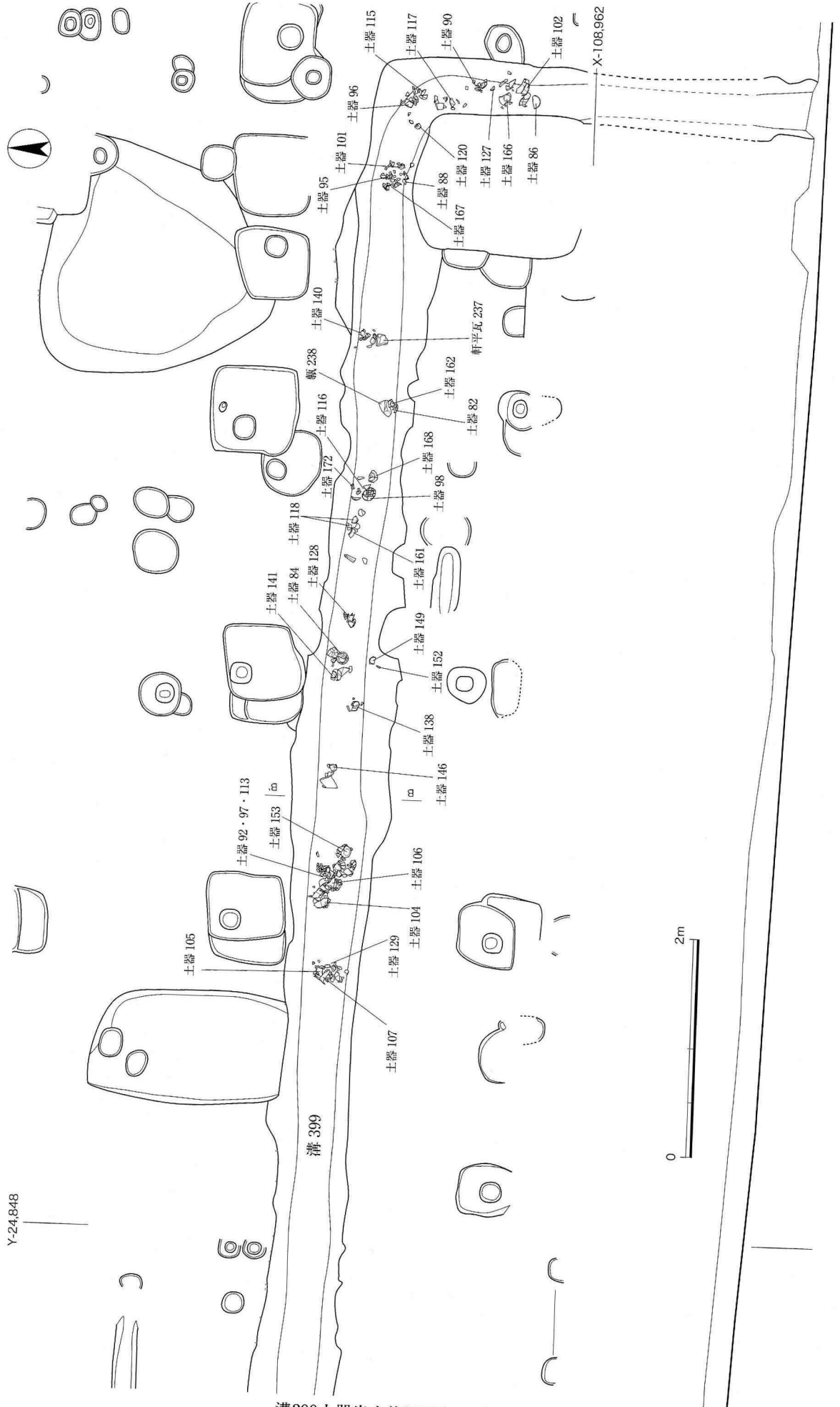


遺構配置図(1/250)



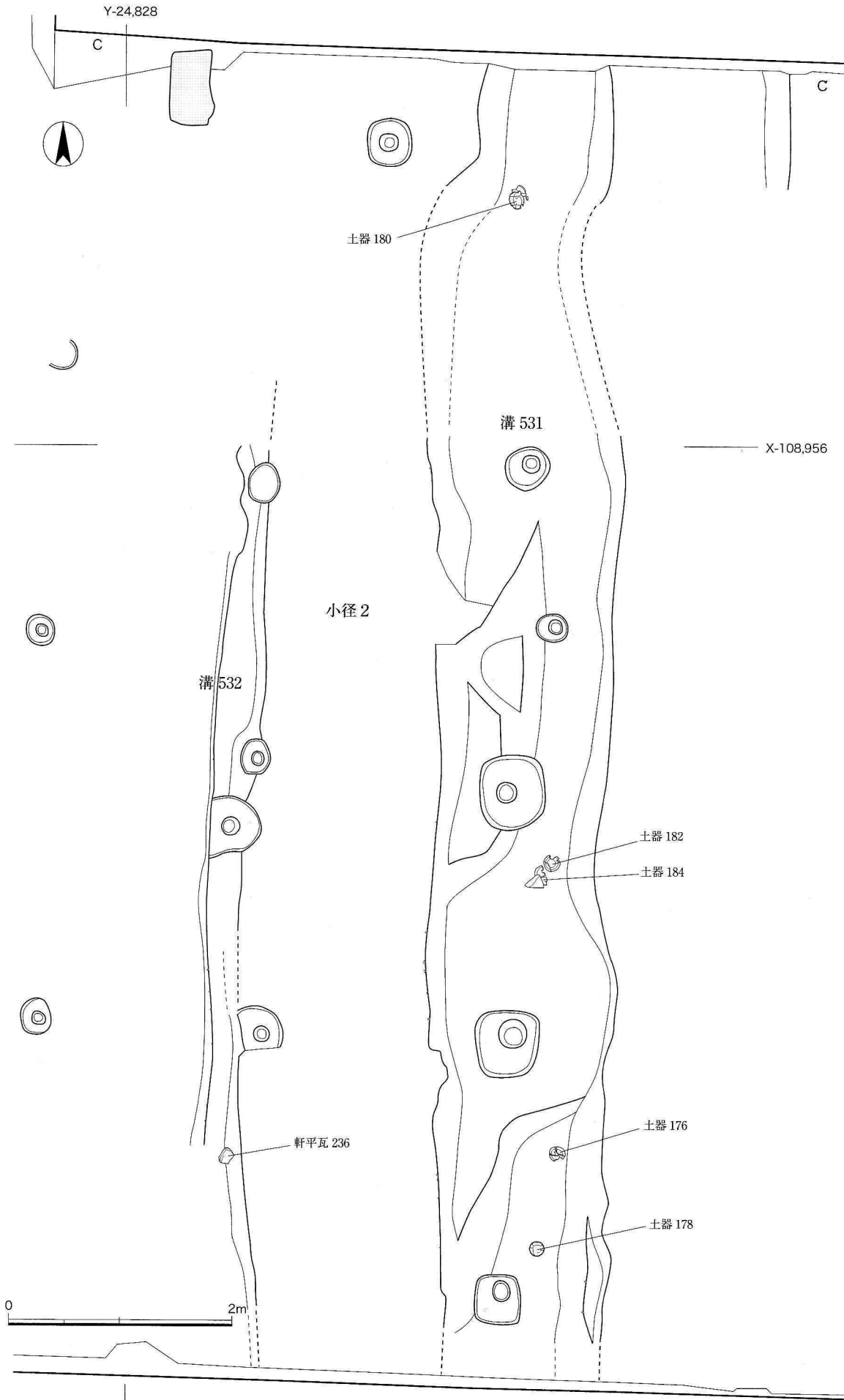


溝286・398土器出土状況図(1/50)

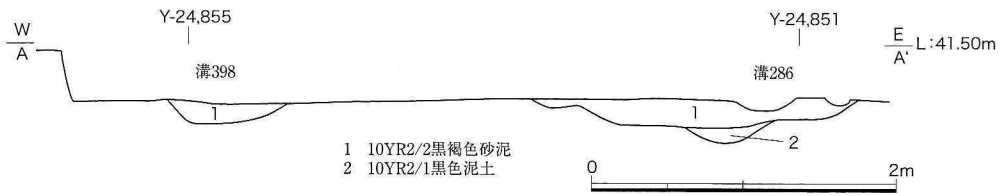


溝399土器出土状況图(1/50)

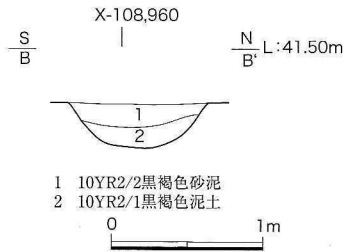
Y-24.848



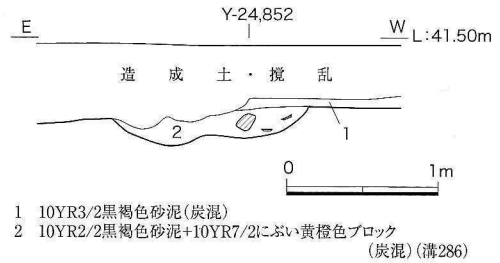
溝531・532土器出土状況図(1/50)



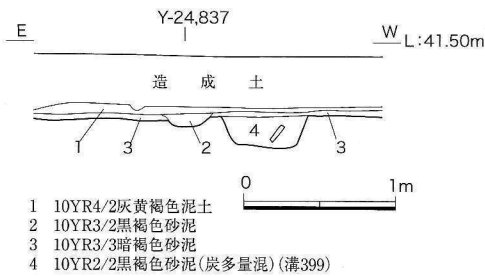
溝398・溝286断面実測図(1/50)



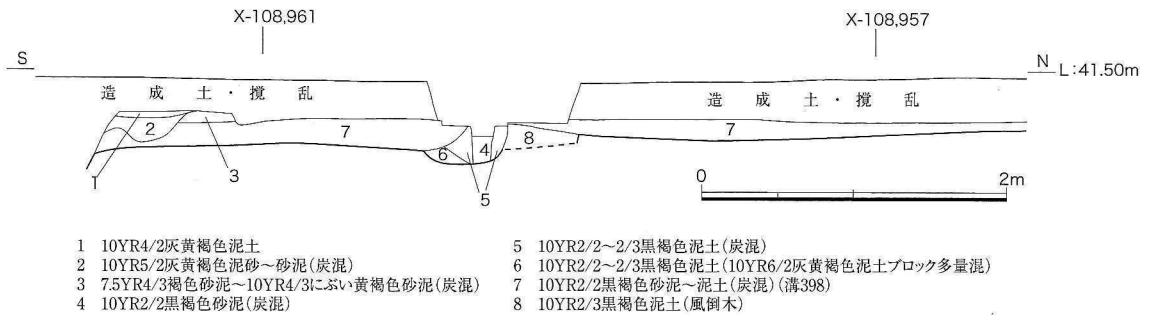
溝399断面実測図(1/50)



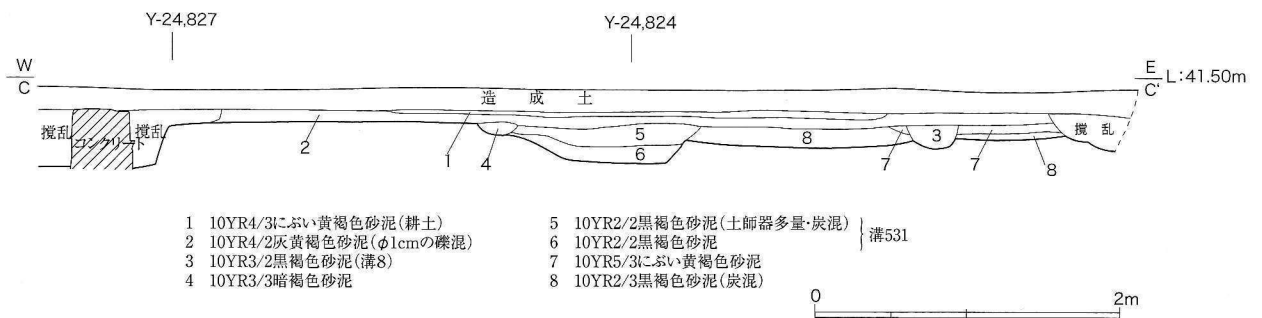
南壁断面実測図(1)(1/50)



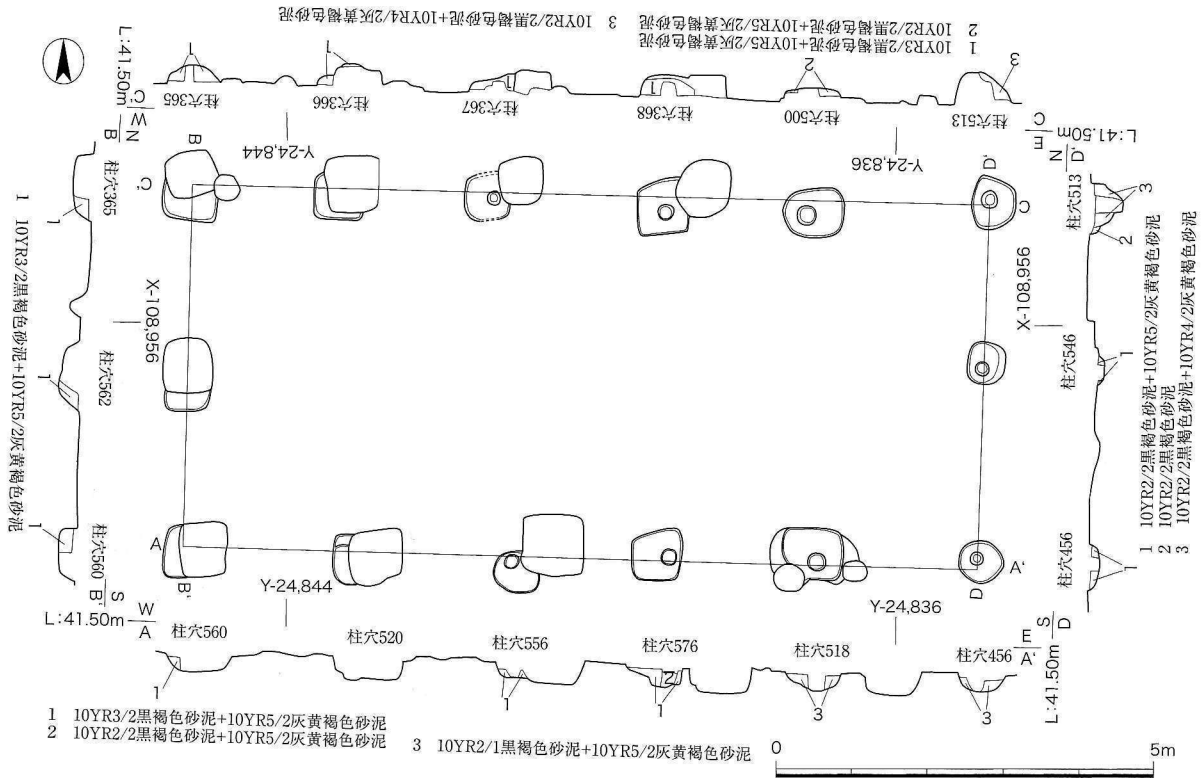
南壁断面実測図(2)(1/50)



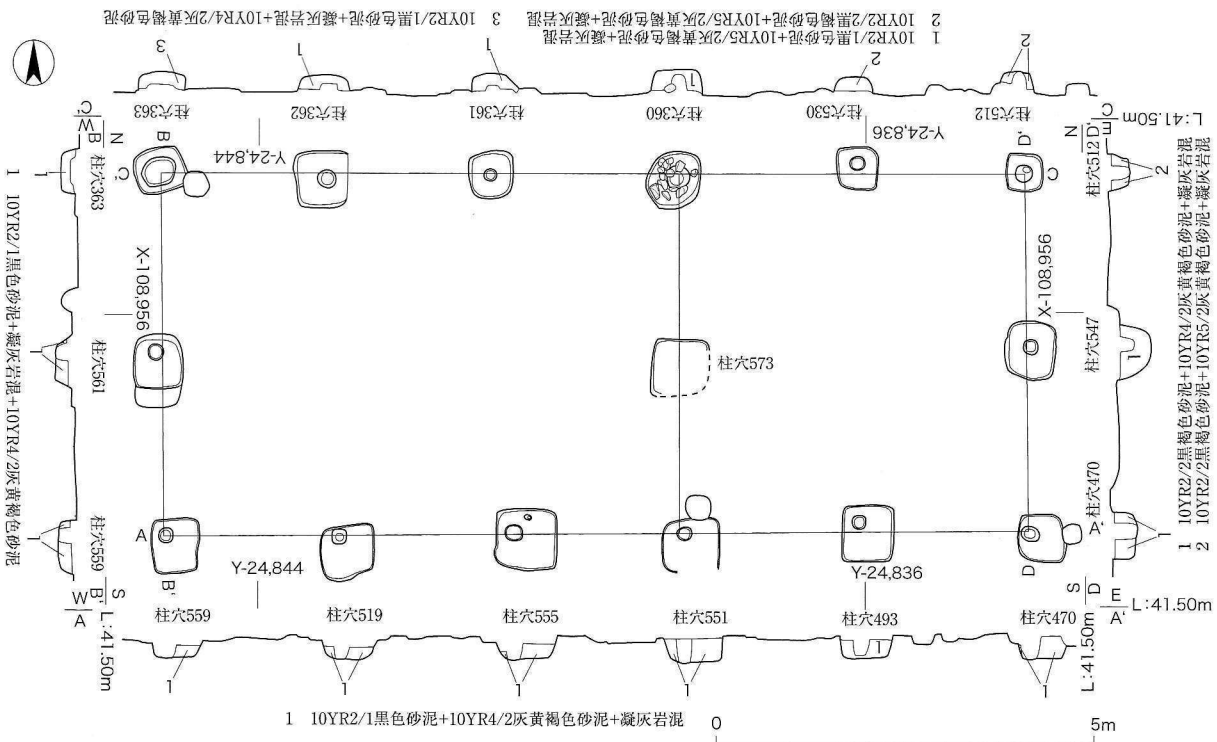
西壁断面実測図(1/50)



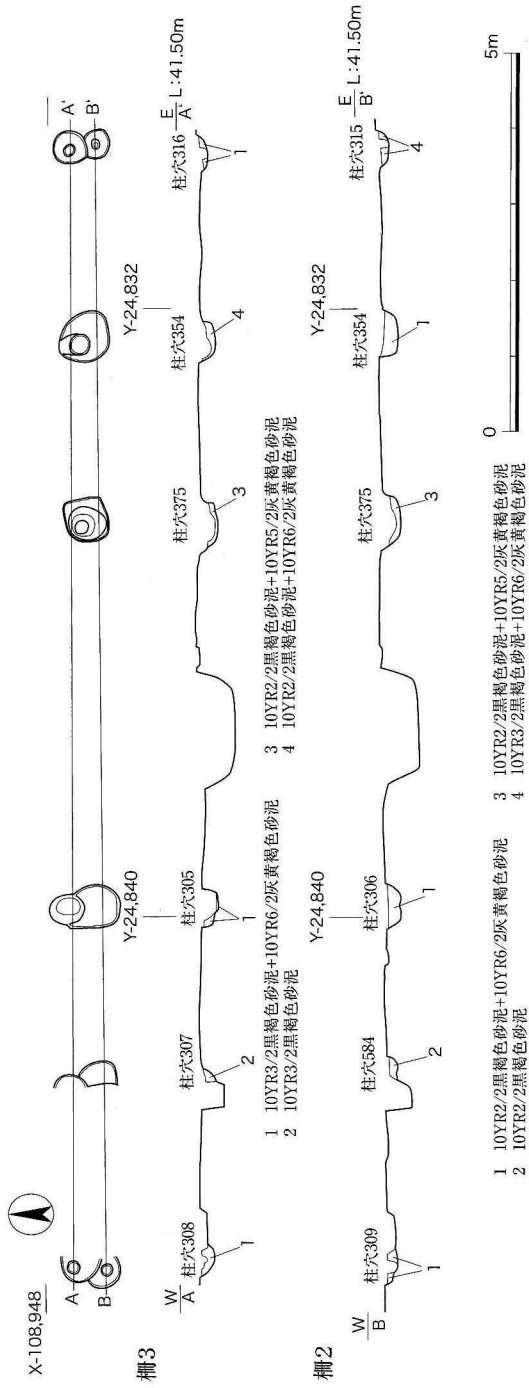
東南部北壁断面実測図(1/50)



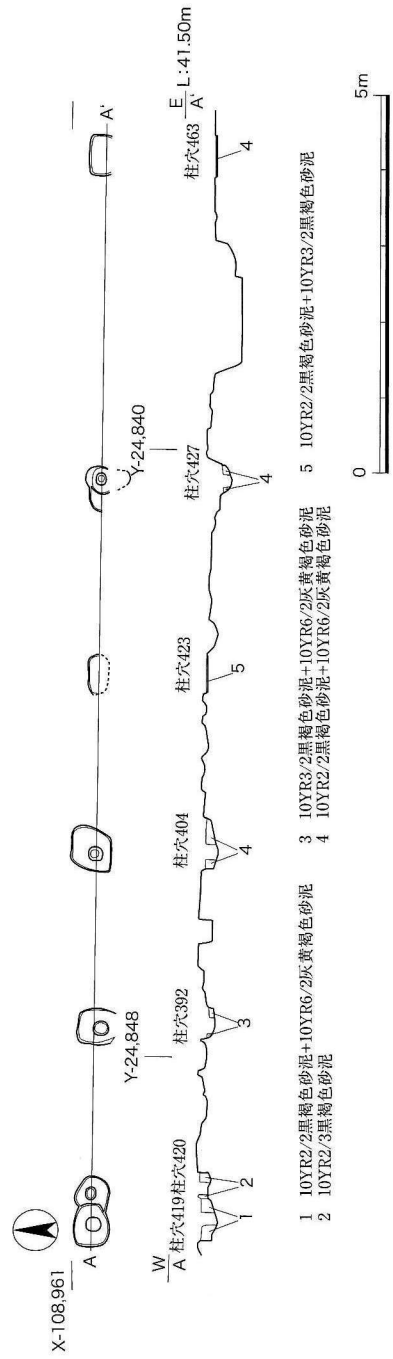
建物1実測図(1/100)



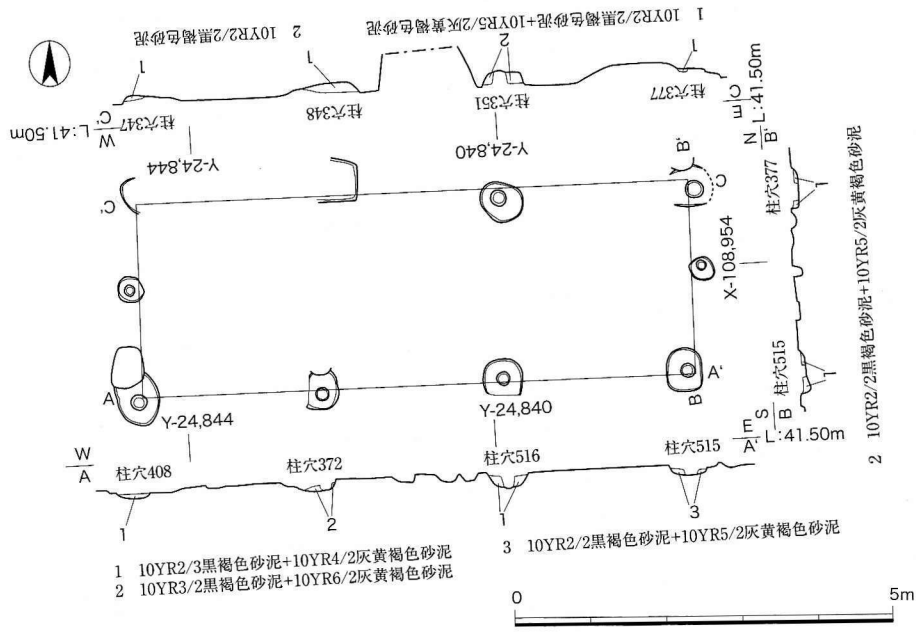
建物2実測図(1/100)



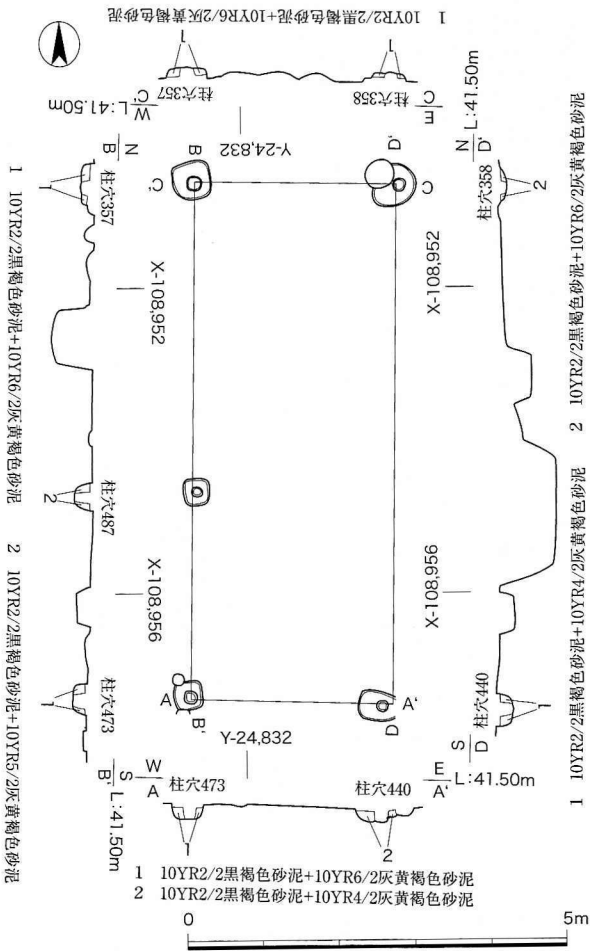
栅2·3实测图(1/100)



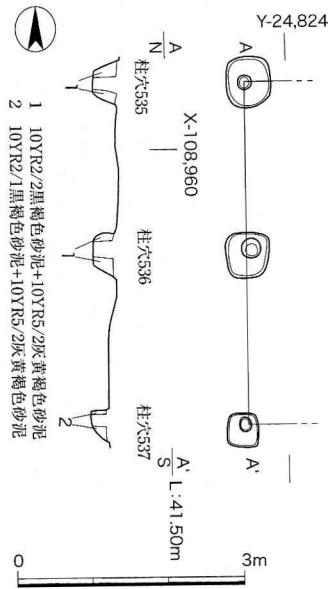
栅1实测图(1/100)



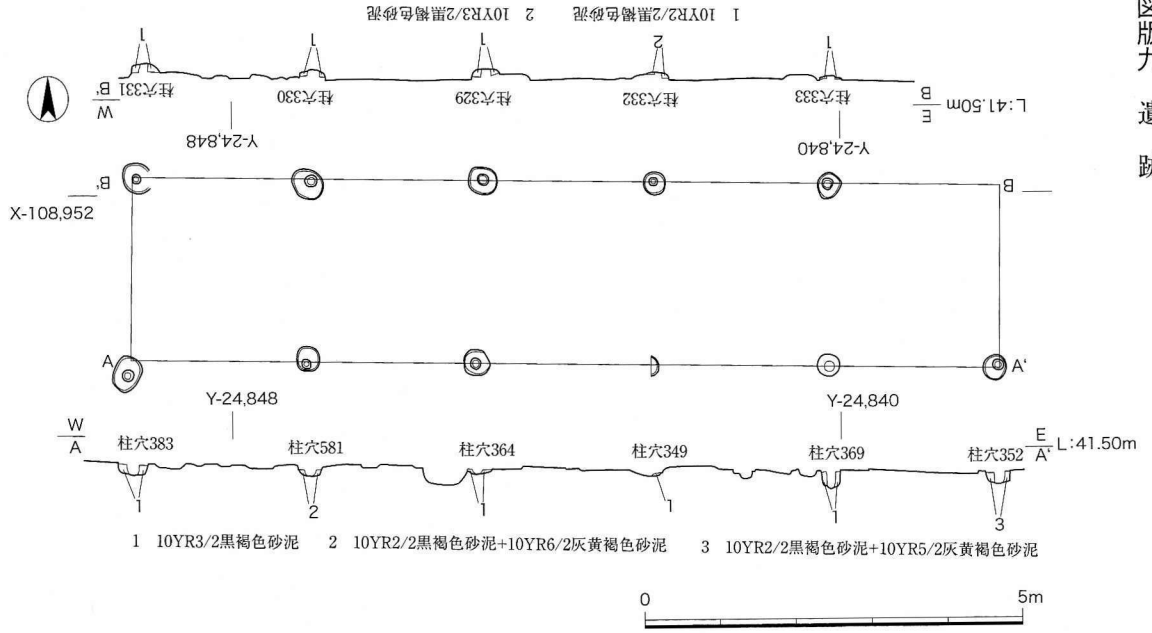
建物4实测图(1/100)



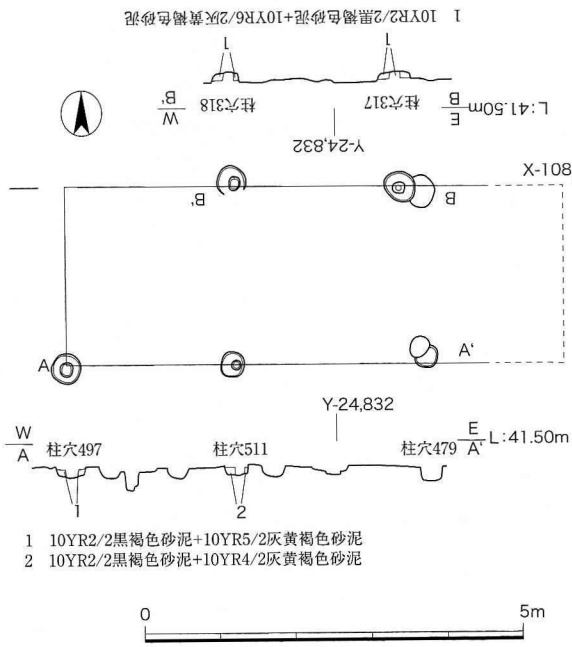
建物5实测图(1/100)



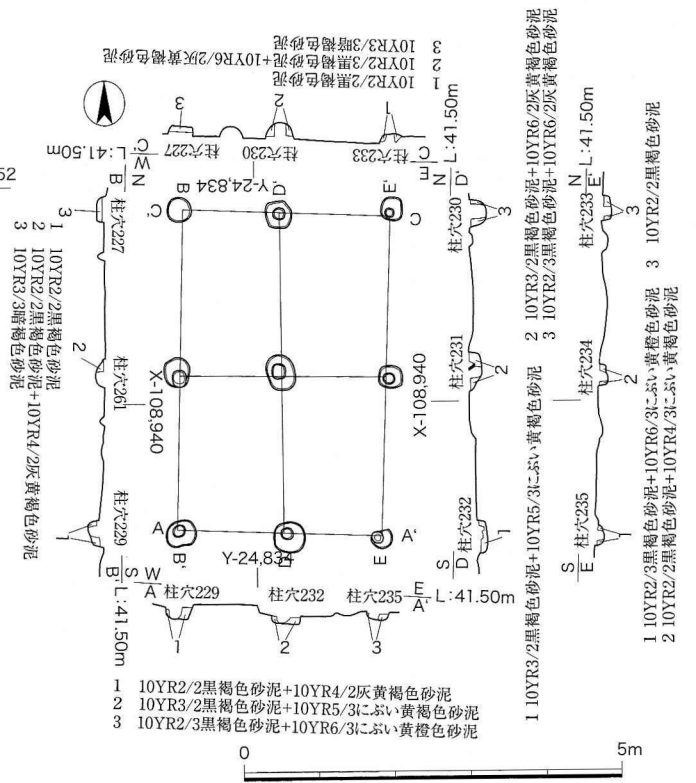
建物3实测图(1/100)



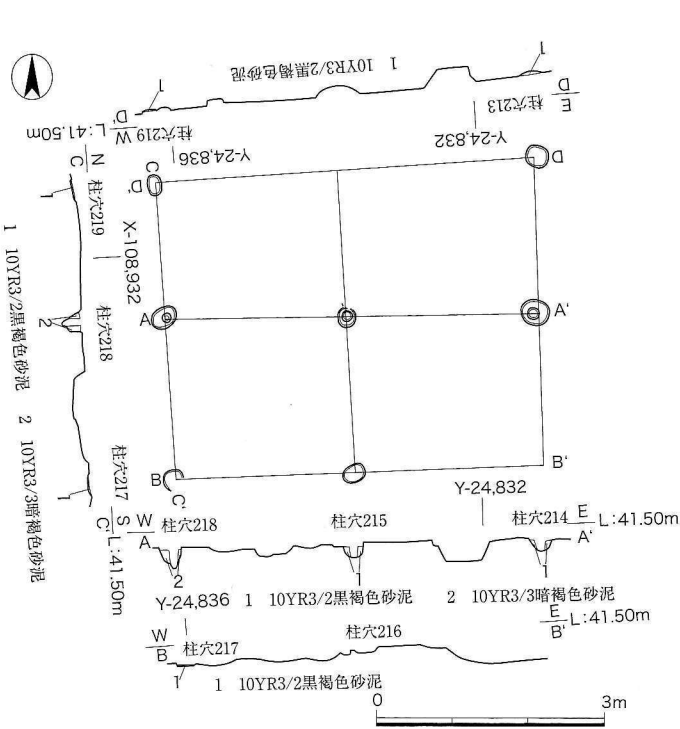
建物6実測図(1/100)



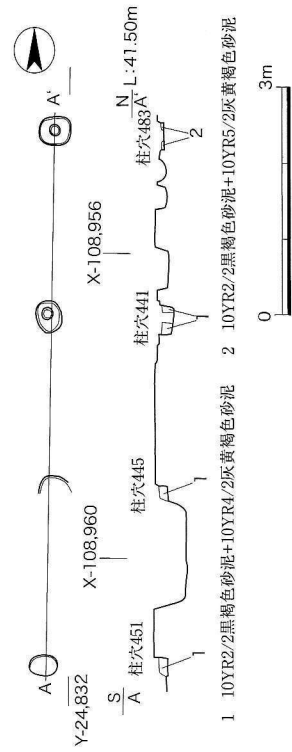
建物7実測図(1/100)



建物8実測図(1/100)

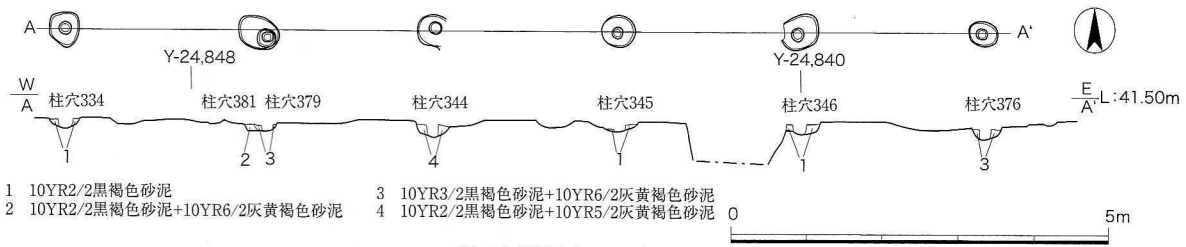


建物9実測図(1/100)



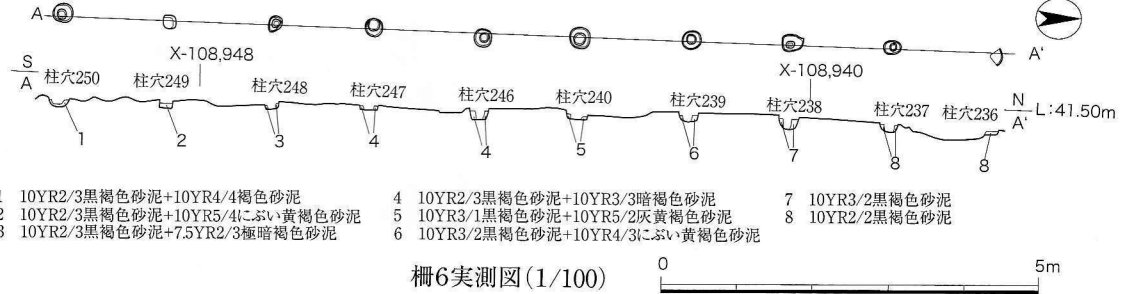
柵5実測図(1/100)

X-108,952

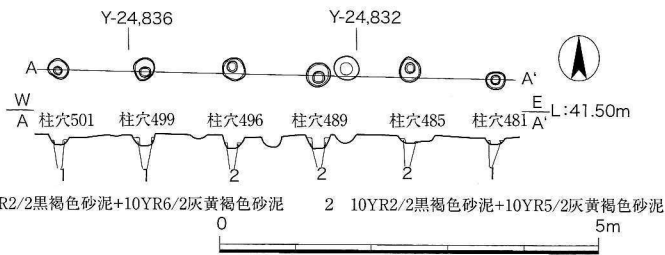


柵4実測図(1/100)

Y-24,828



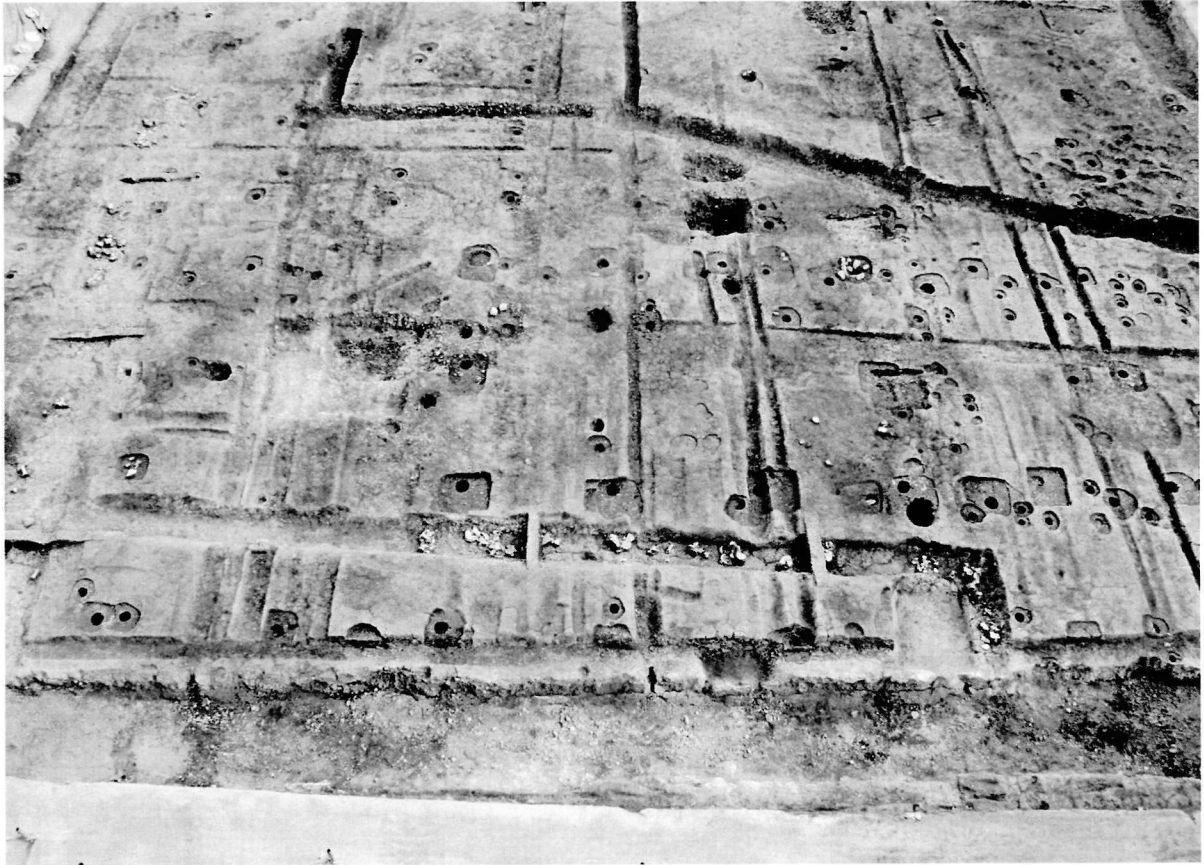
柵6実測図(1/100)



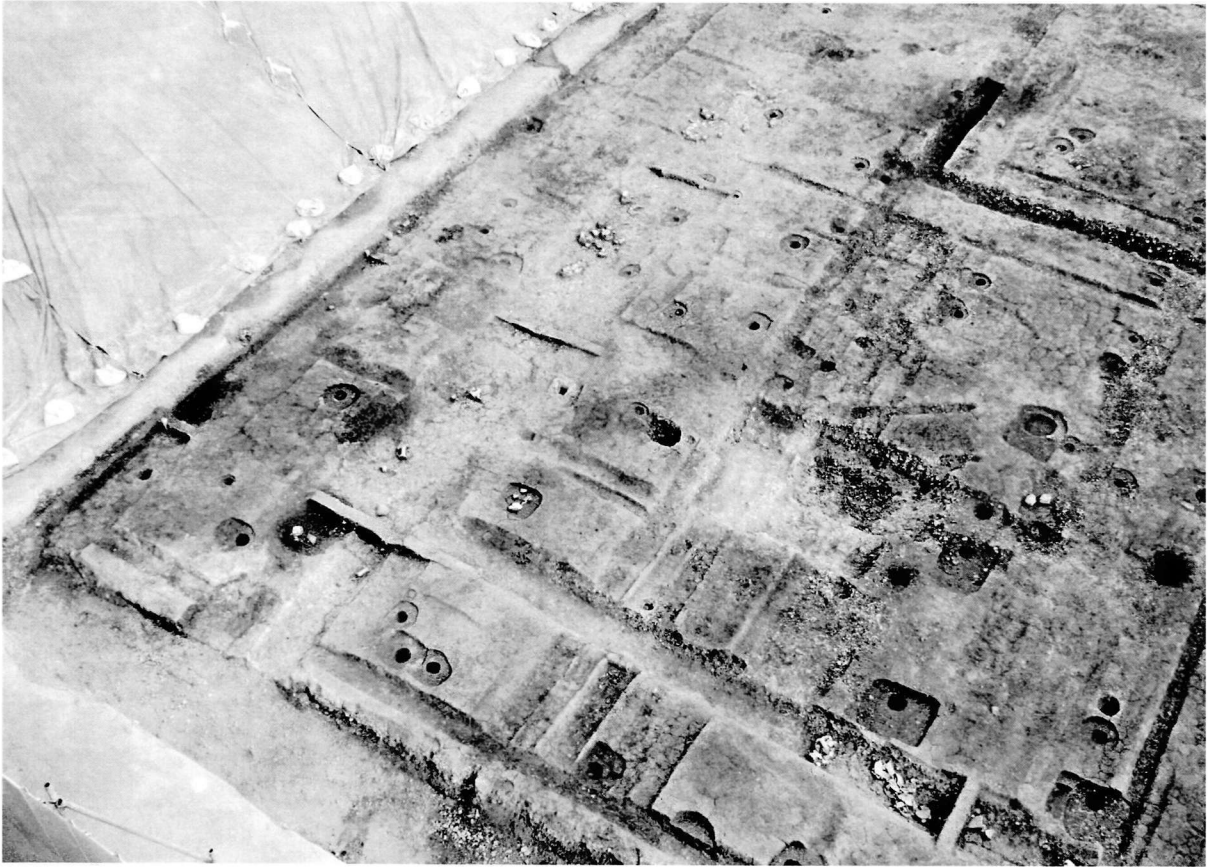
柵7実測図(1/100)



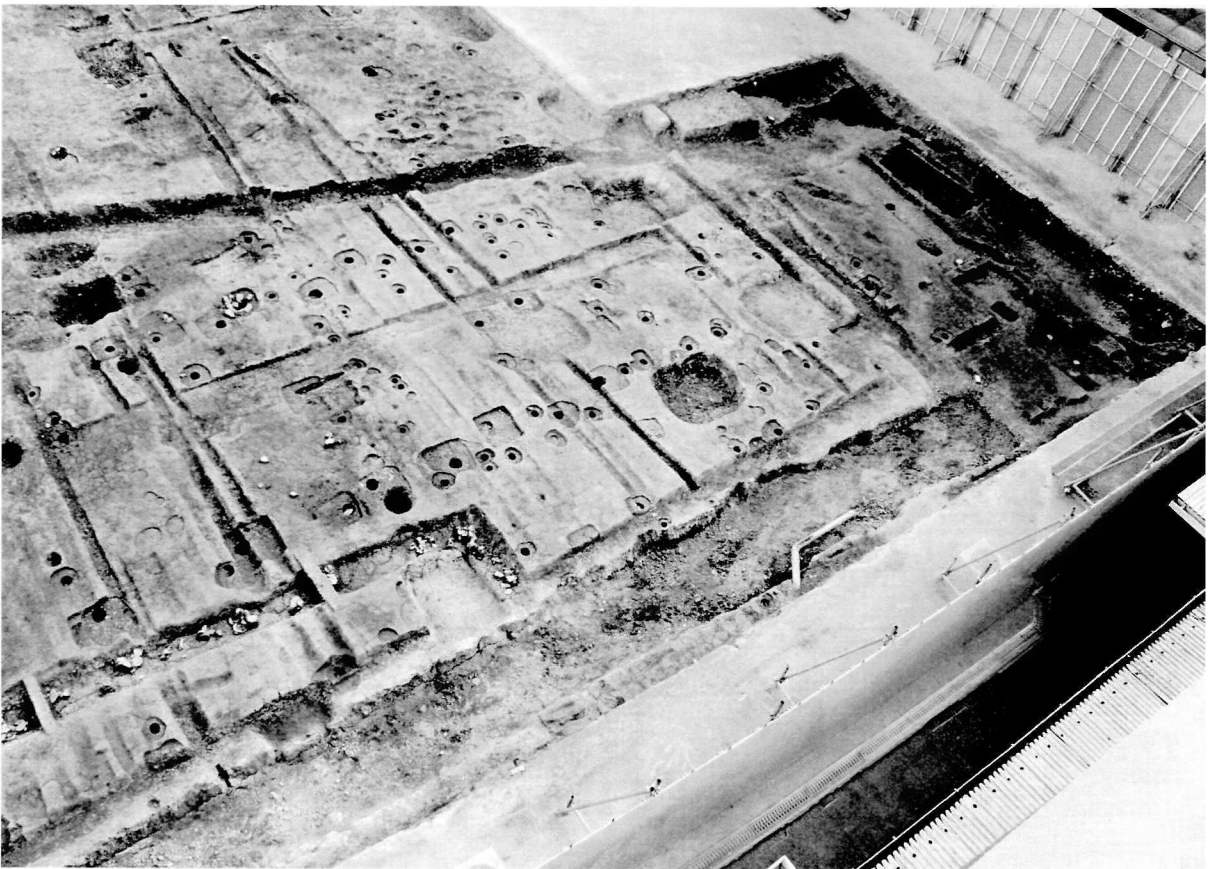
1 第2面全景（南から）



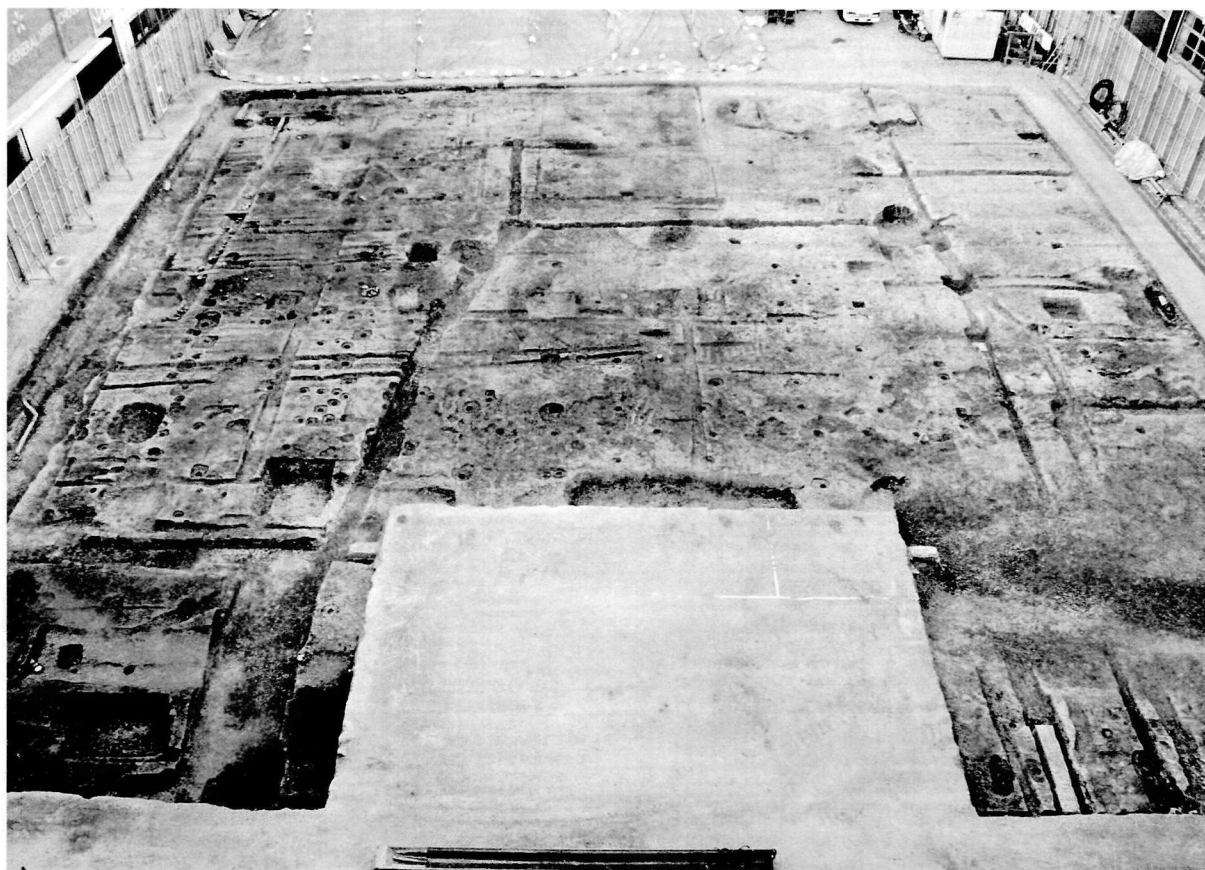
2 第2面南辺部（南から）



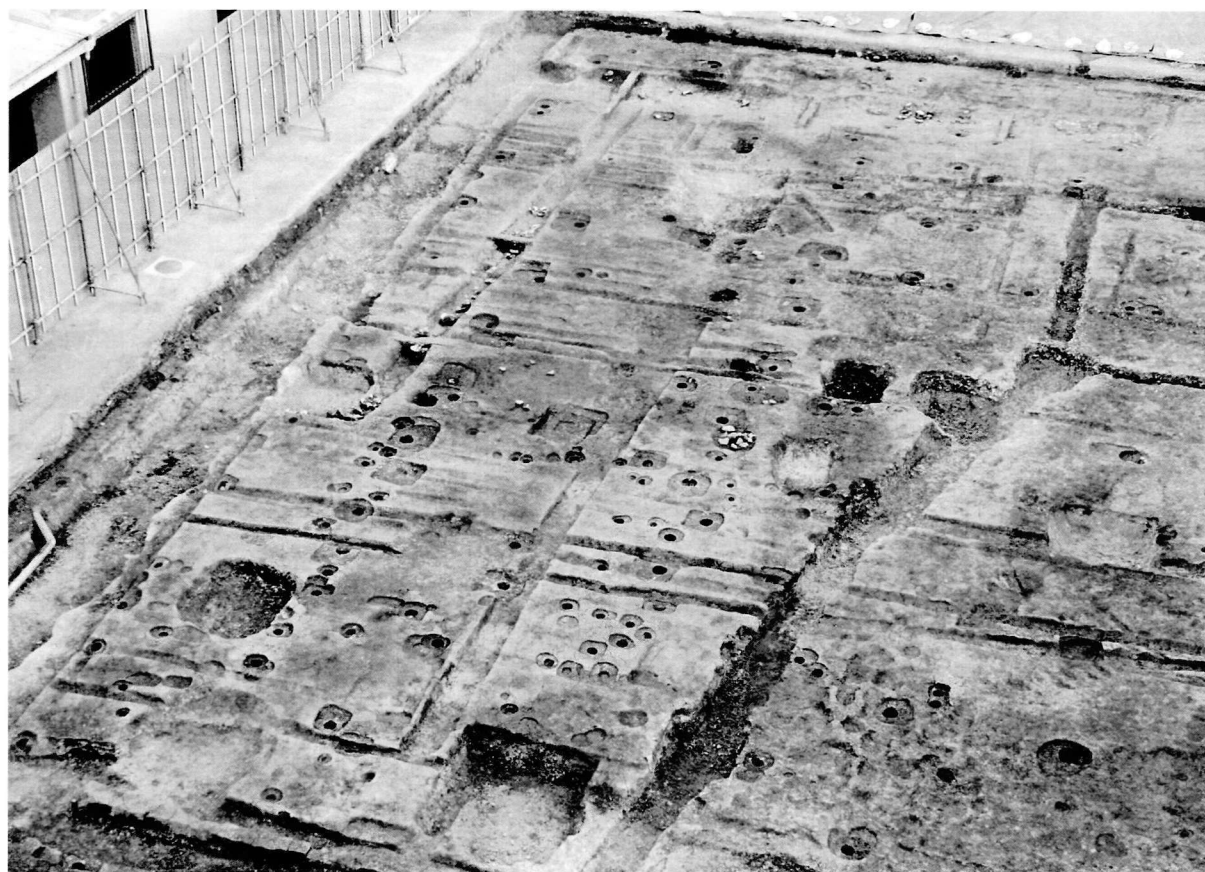
1 第2面南西部（南東から）



2 第2面南東部（南西から）



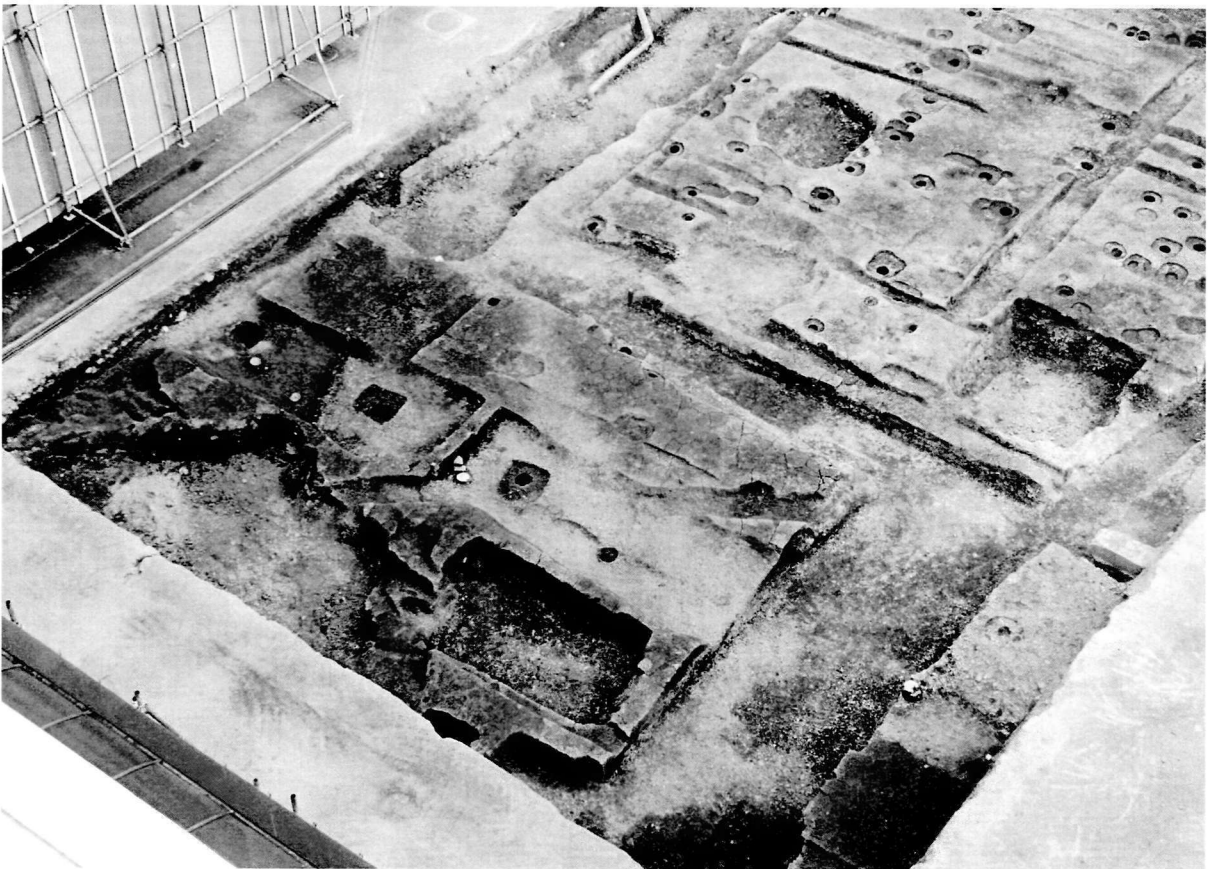
1 第2面全景（東から）



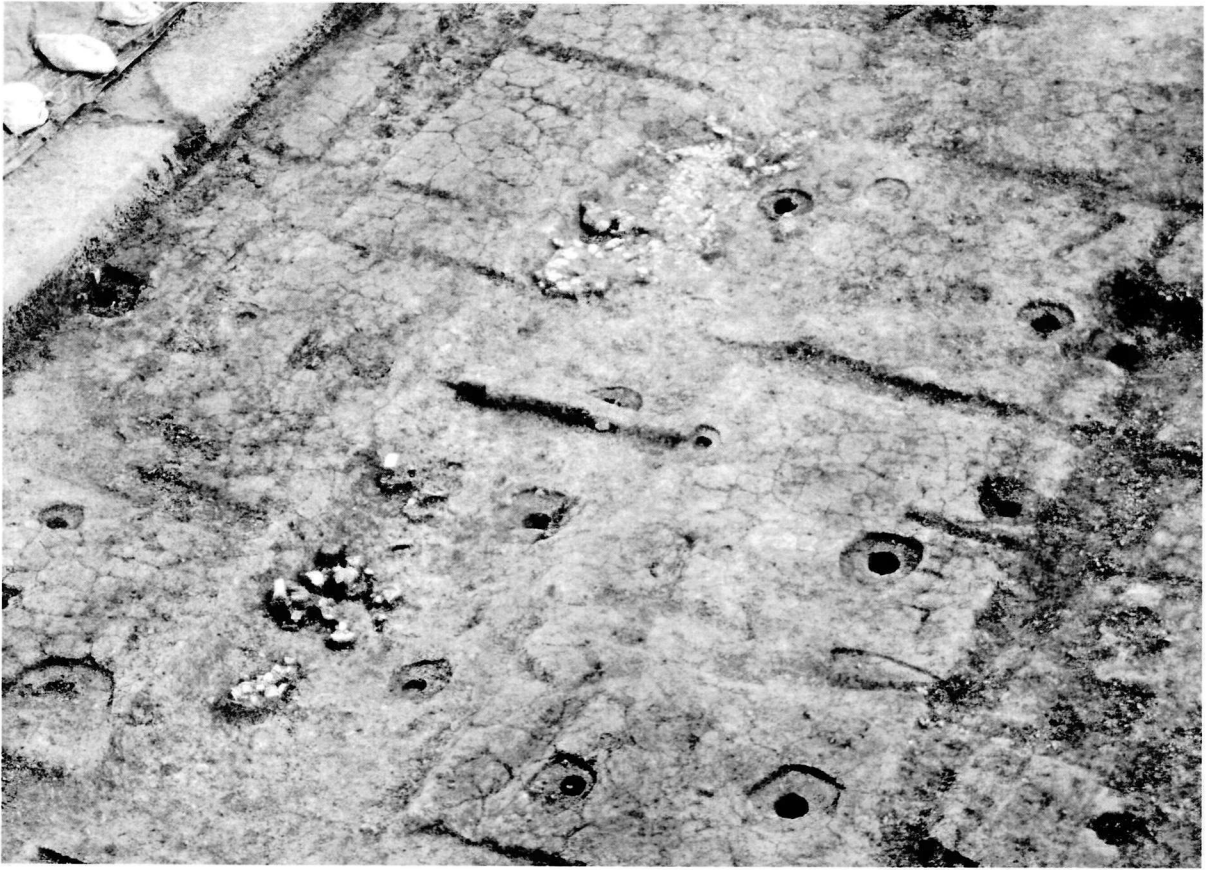
2 第2面南半部（北東から）



1 第2面北東部（南東から）



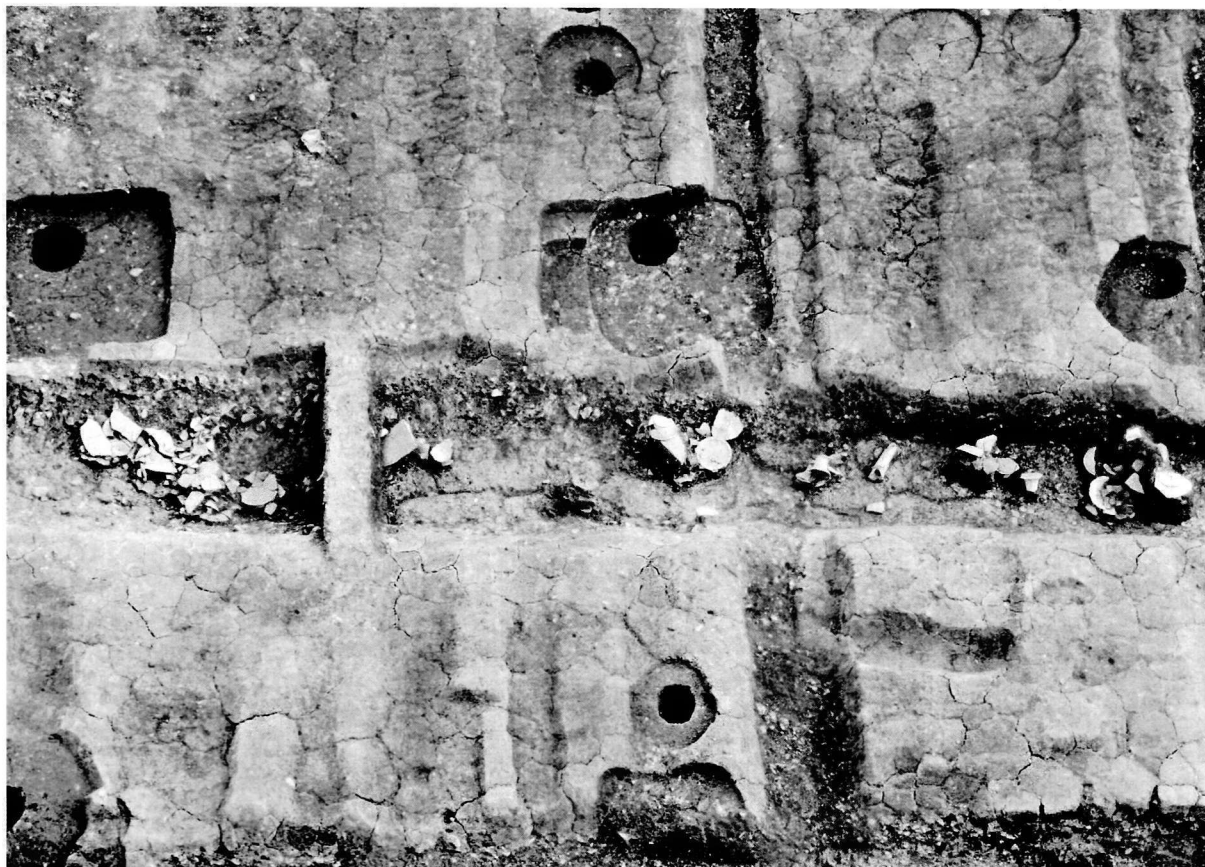
2 第2面南東部（北東から）



1 溝 286 土器出土状況（南東から）



2 溝 286 土器出土状況（南から）



1 溝 399 土器出土状況 (南から)



2 溝 399 土器出土状況 (南西から)



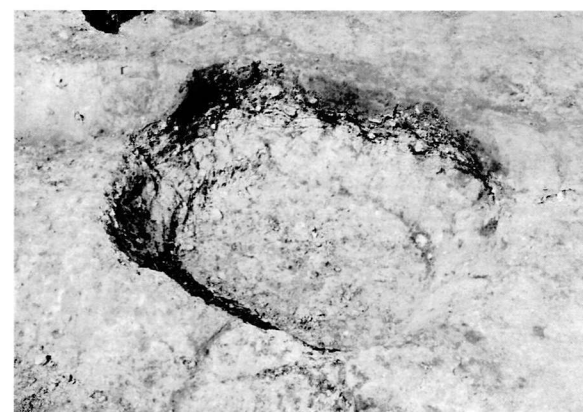
1 調査前全景（北西から）



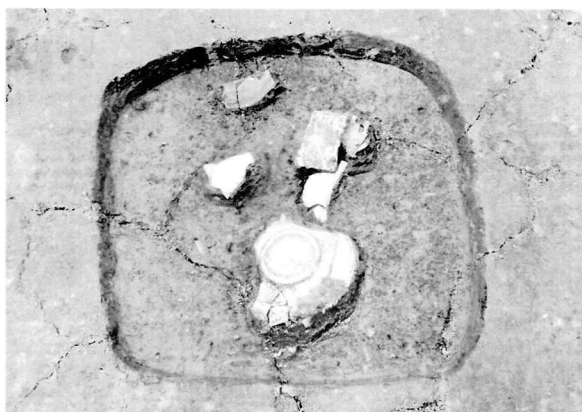
2 調査地遠景（北東から）



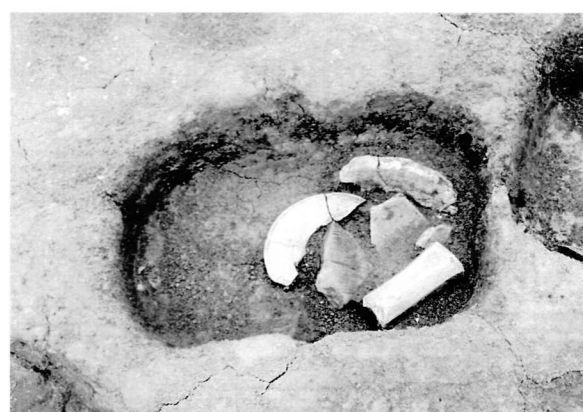
3 拡張区全景（東から）



4 土壙 585（北東から）



5 土壙 382（南から）



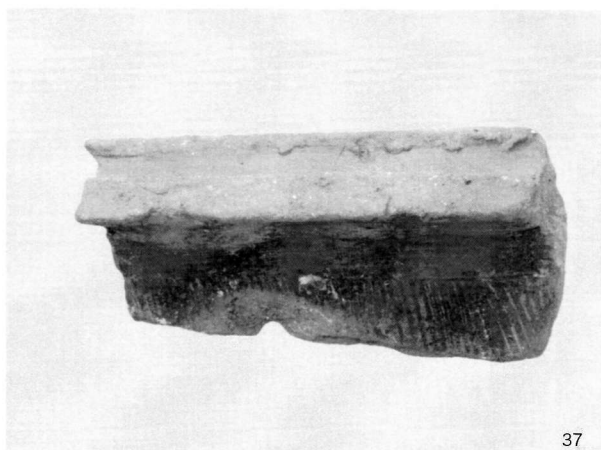
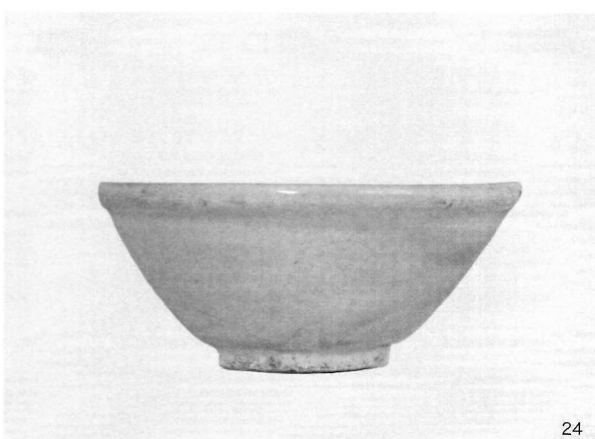
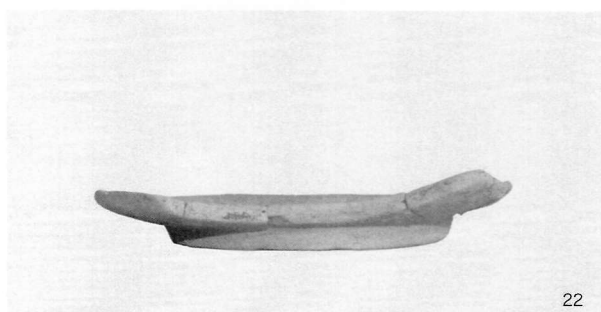
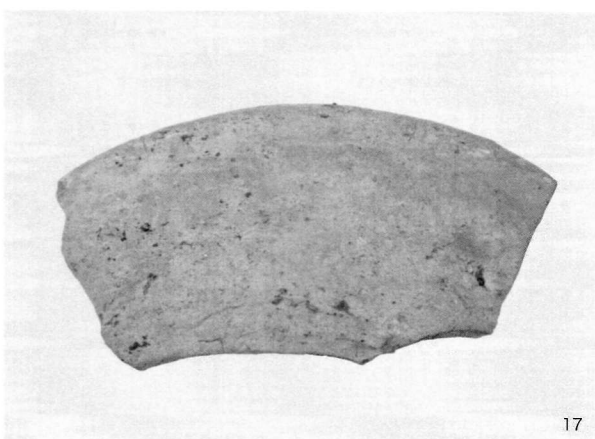
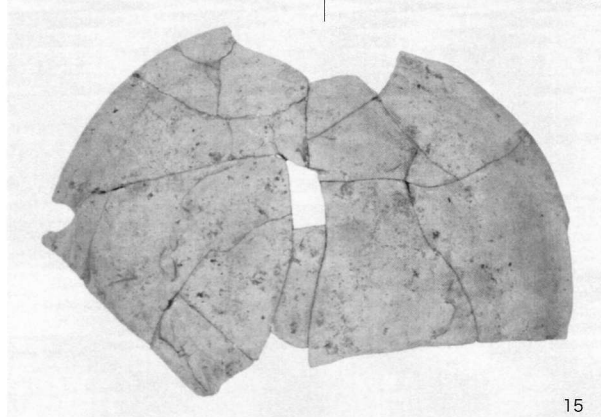
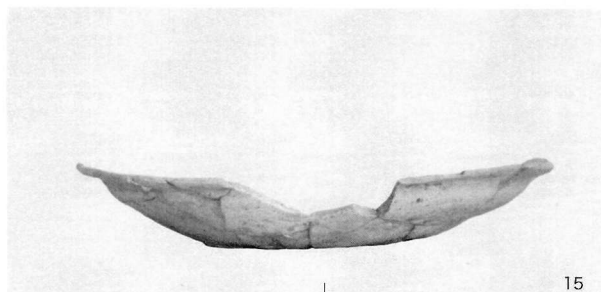
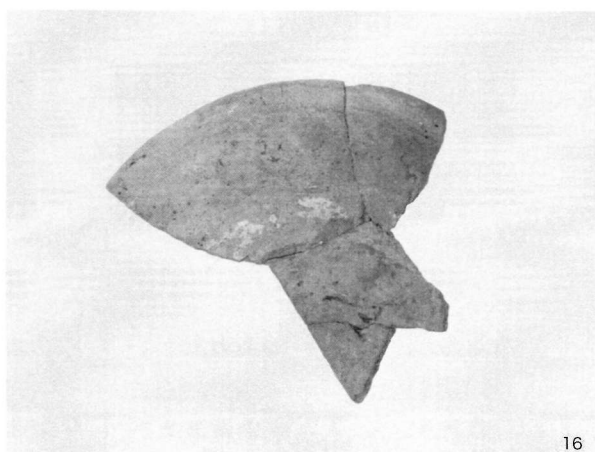
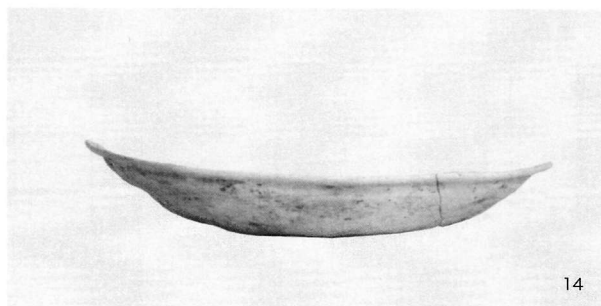
6 柱穴 433（西から）



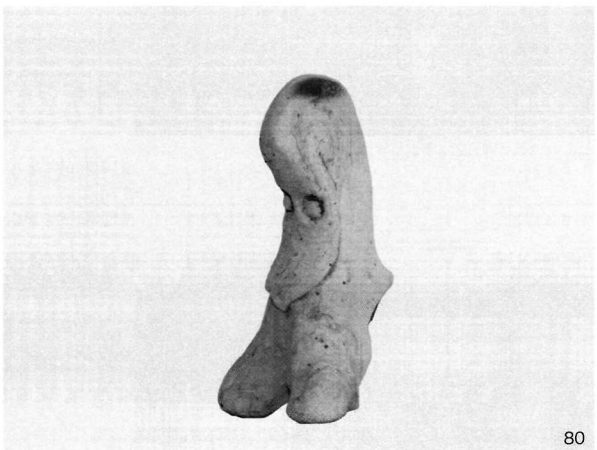
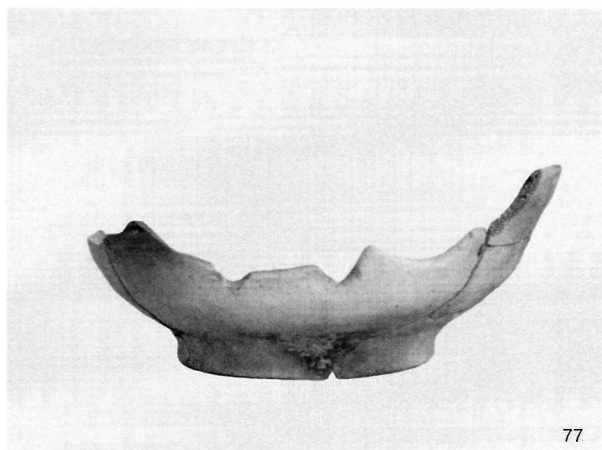
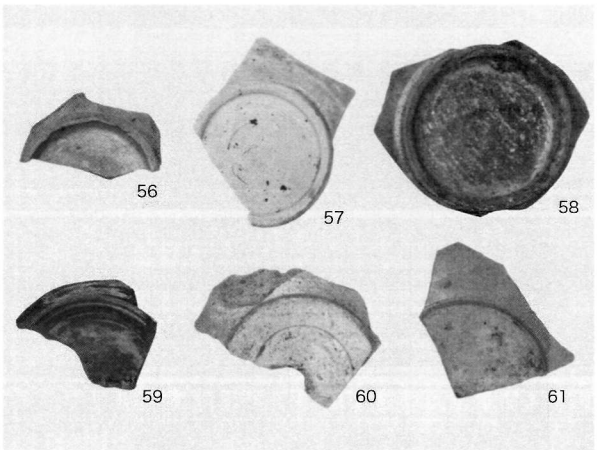
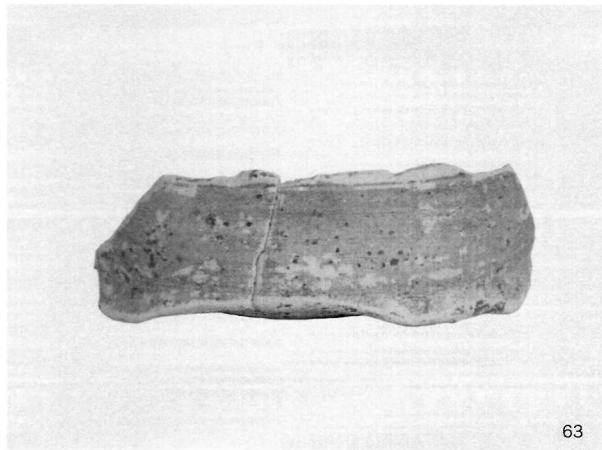
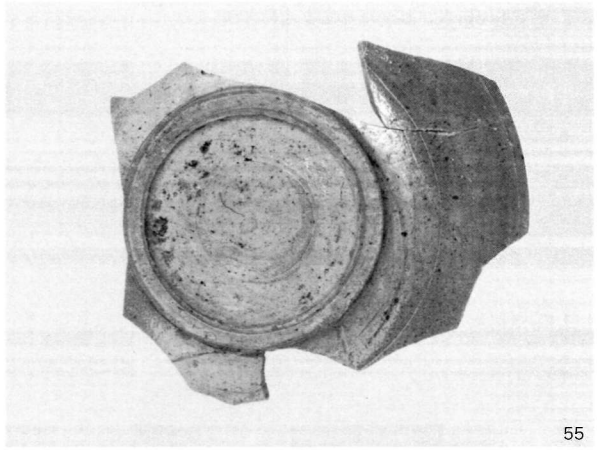
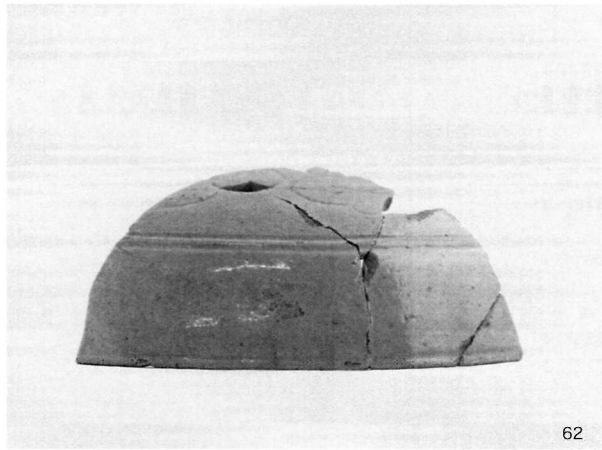
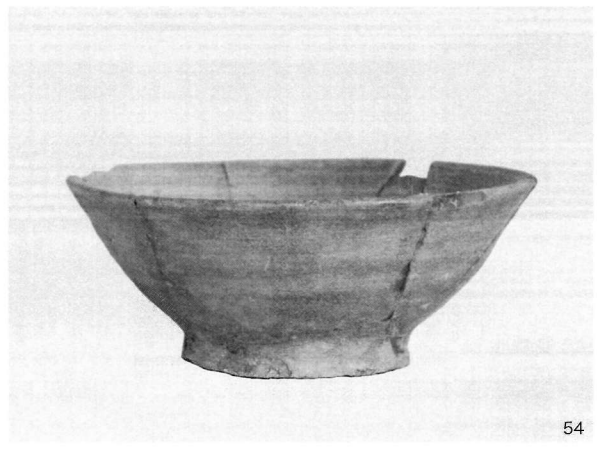
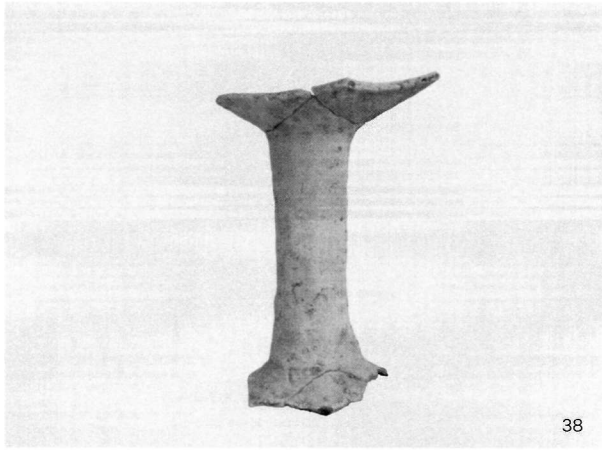
7 柱穴 576（西から）



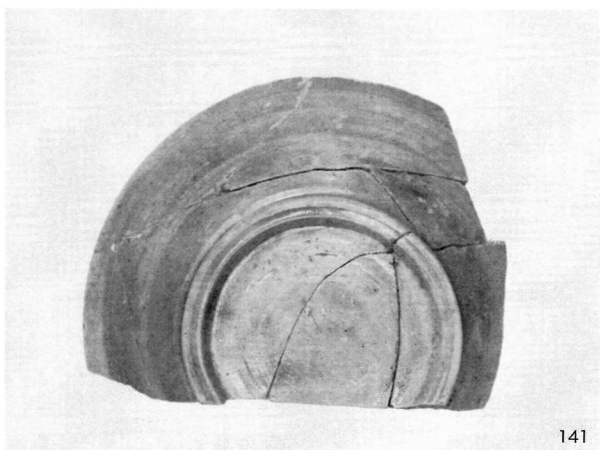
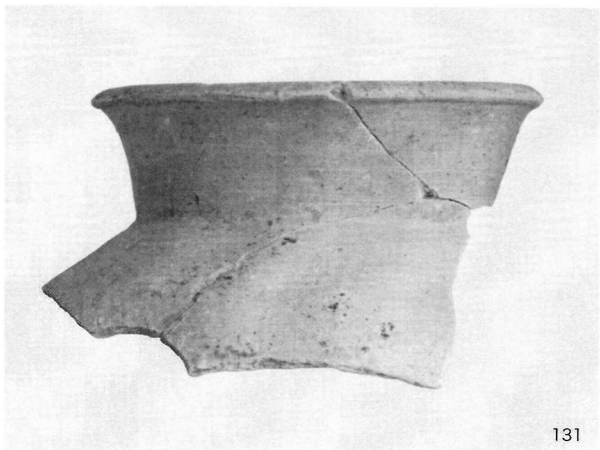
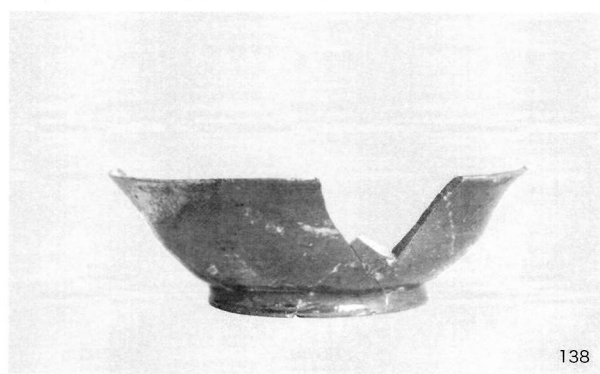
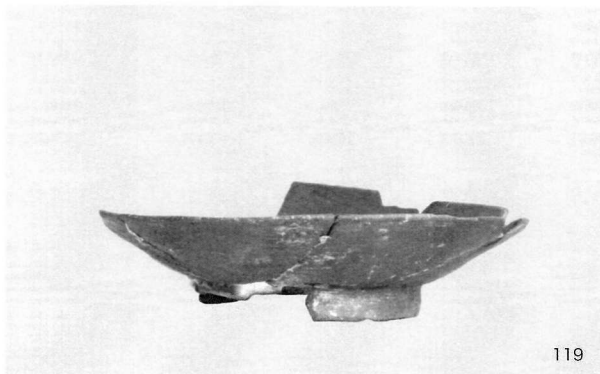
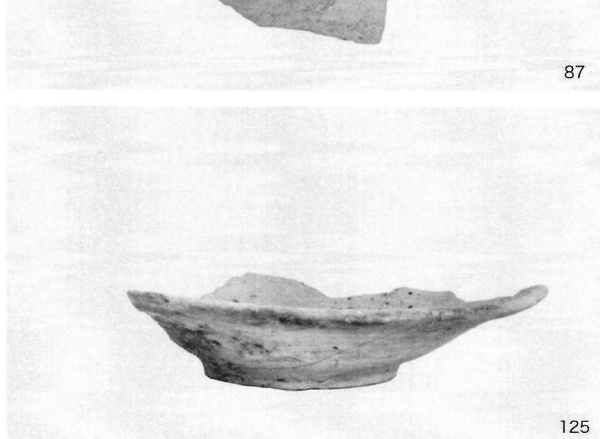
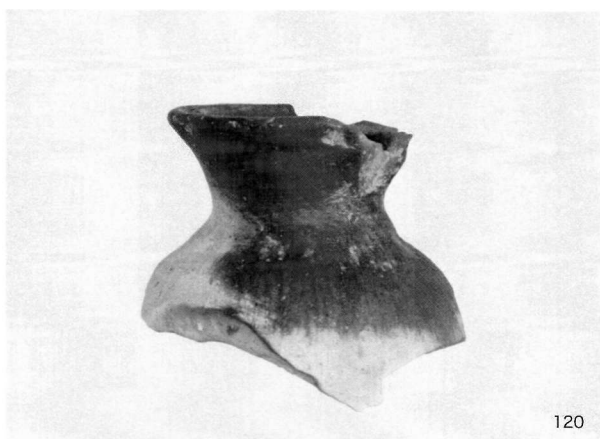
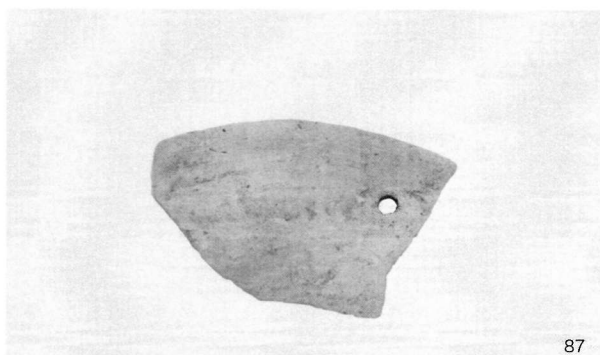
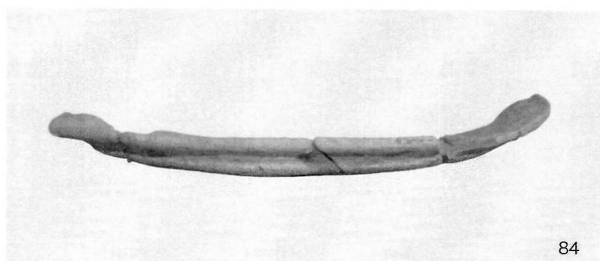
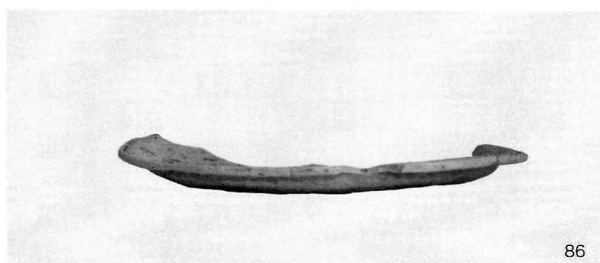
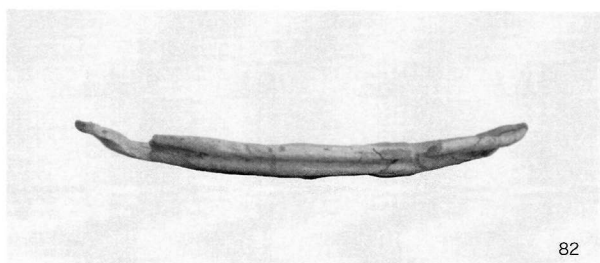
8 柱穴 308（東から）



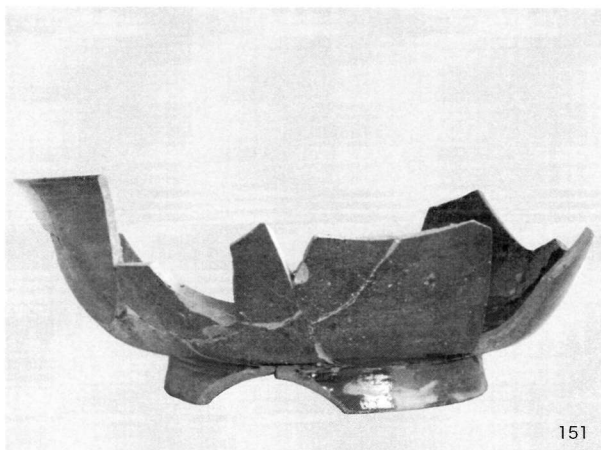
土壙 585 (14 ~ 17) · 土壙 382 (22 · 24) · 溝 286 (37 · 45) 出土遺物



溝 286 (38・54～63)・溝 398 (77・80) 出土遺物



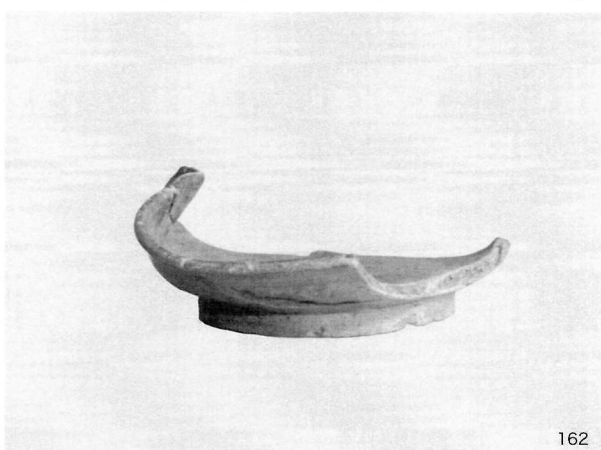
溝 399 出土遺物



151



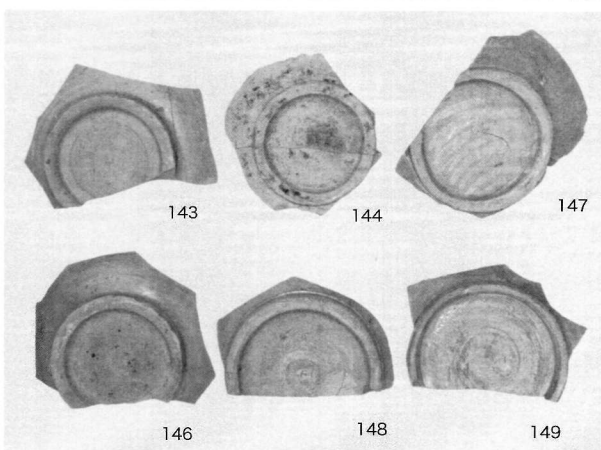
153



162



163



143

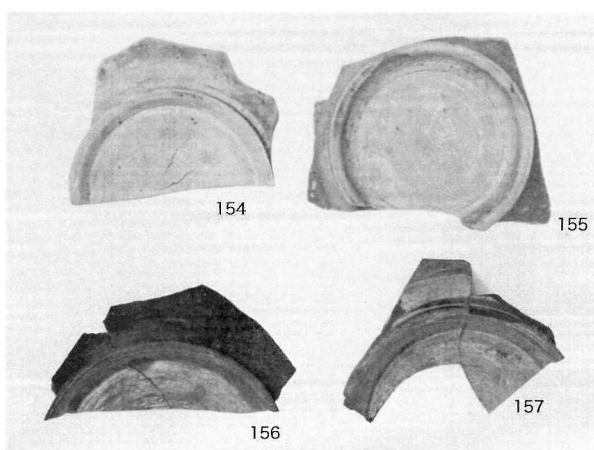
144

147

146

148

149

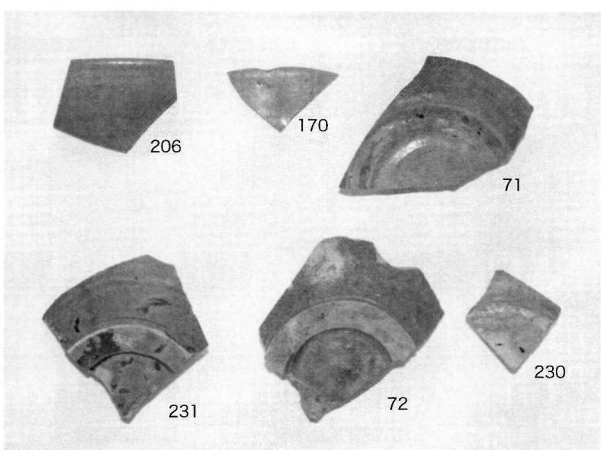


154

155

156

157



206

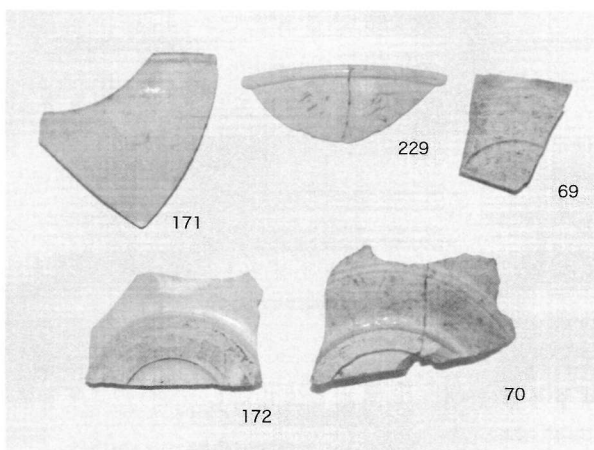
170

71

231

72

230



171

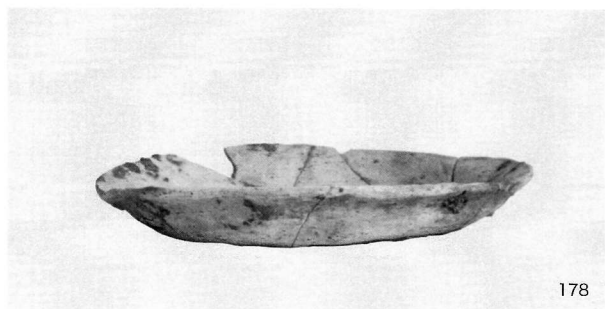
229

69

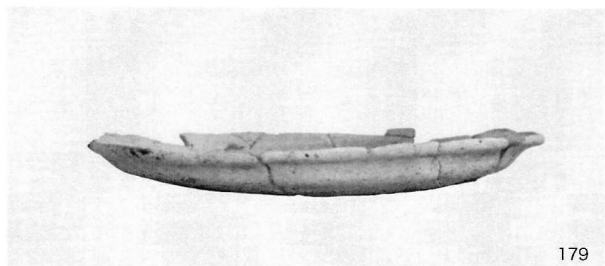
172

70

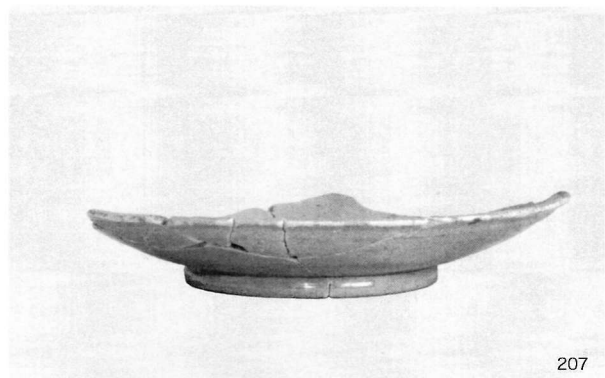
溝 286 (69 ~ 72) · 溝 399 (143 · 144 · 146 ~ 149 · 151 · 153 ~ 157 · 162 · 163 · 170 ~ 172) · 溝 532 (206) · 溝 56 (229) · 溝 57 (230) · 柱穴 495 (231) 出土遺物



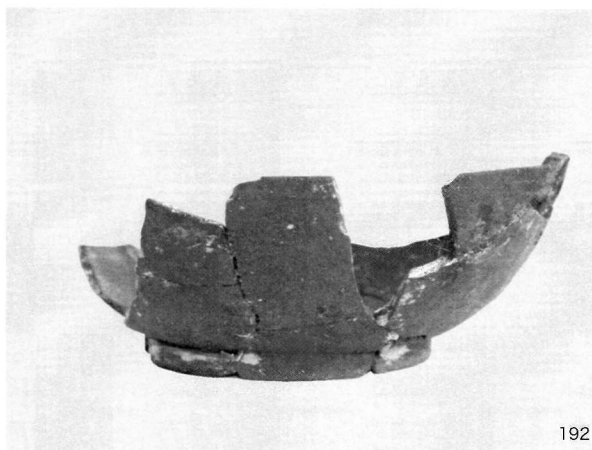
178



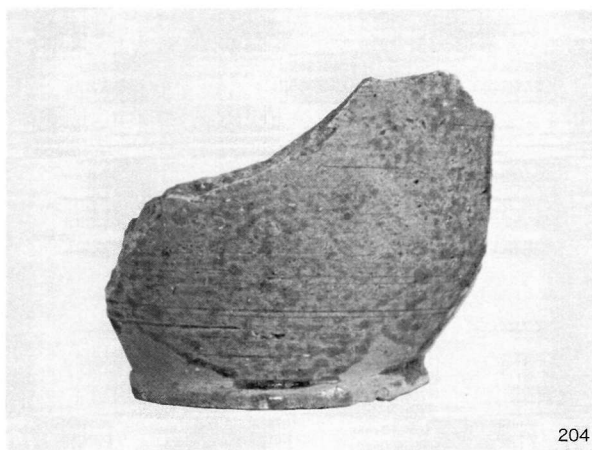
179



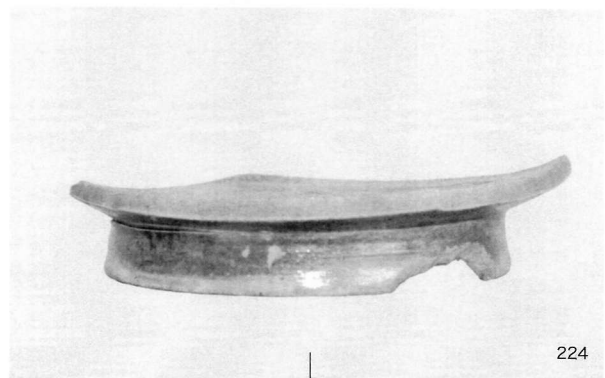
207



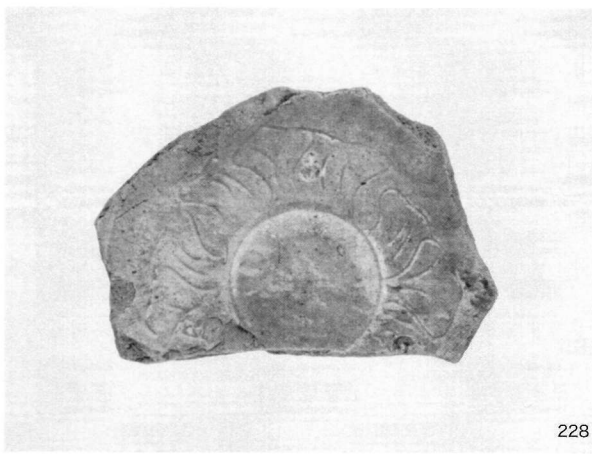
192



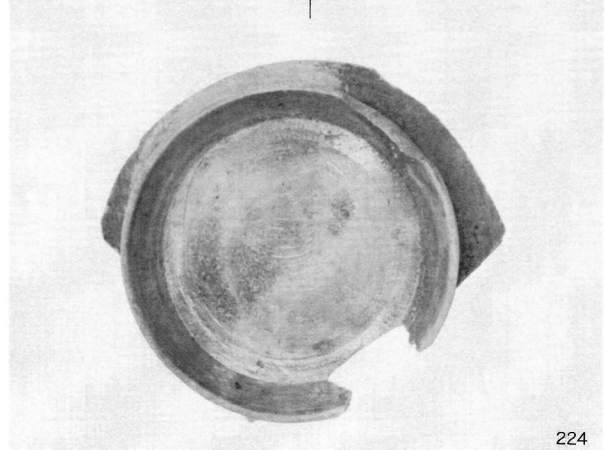
204



224



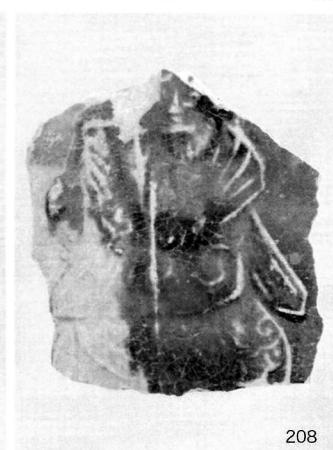
228



224

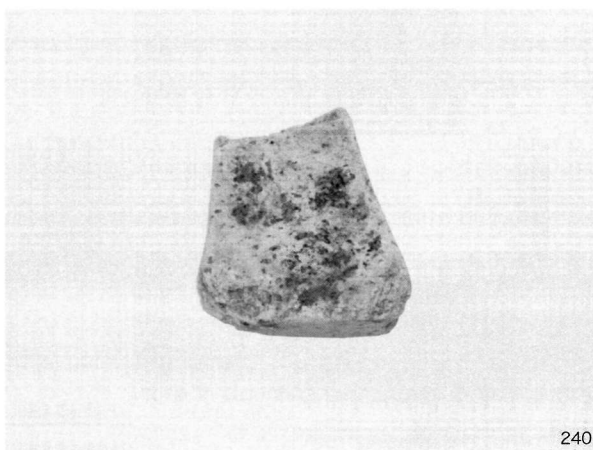
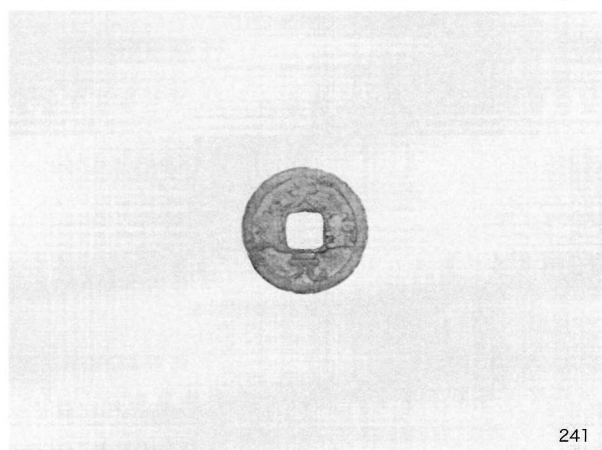
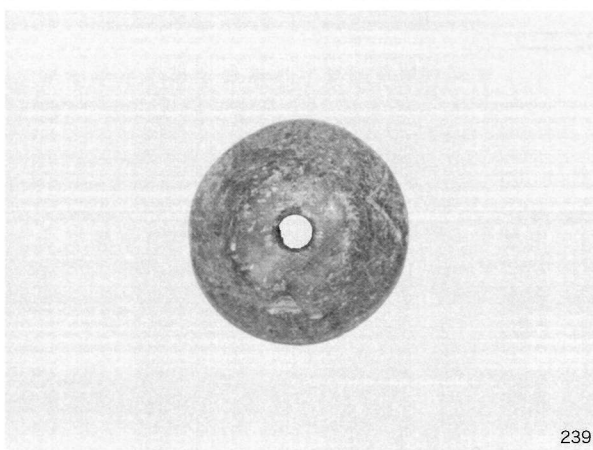
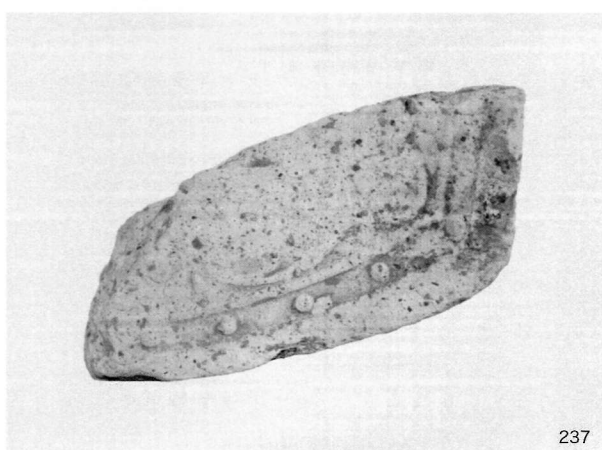
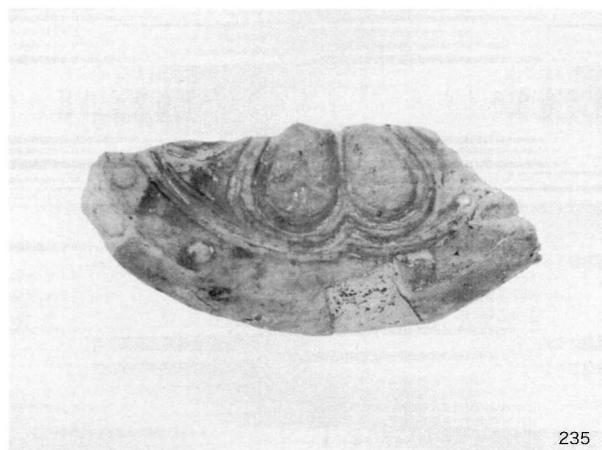
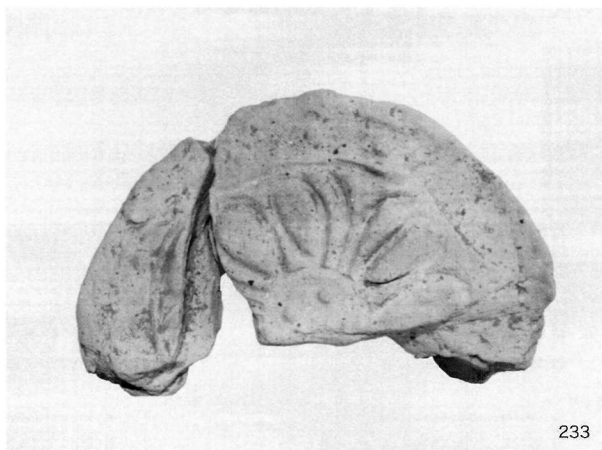


210



208

溝 531 (178 · 179 · 192 · 204) · 溝 312 (207) · 溝 399 (208) · 溝 531 上面 (210) · 柵 3 (224) · 溝 78 (228) 出土遺物



溝 286 (233・239)・溝 531 (234・235)・溝 532 (236)・溝 399 (237)・柱穴383 (240)・南部中央精査中 (241) 出土遺物

平安京右京二条三坊八町

-洛陽総合高等学校校舎建て替えに伴う調査-

発行日 2011年12月10日

編集
発行 古代文化調査会

住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1-4-125-1404
TEL (078) 857-6368

印刷 (有) 京都編集工房
〒612-0868 京都市伏見区深草直違橋南1-524-24
TEL (075) 643-6978